

打出小槌遺跡(第41地点)

発掘調査報告書

2007年3月

芦屋市教育委員会

打出小槌遺跡(第41地点)

発掘調査報告書

2007年3月

芦屋市教育委員会



調査区全景（北西から）



調査区全景（東から）



調査地点全景（南東から）



北区全景（南東から）



東区全景（北東から）



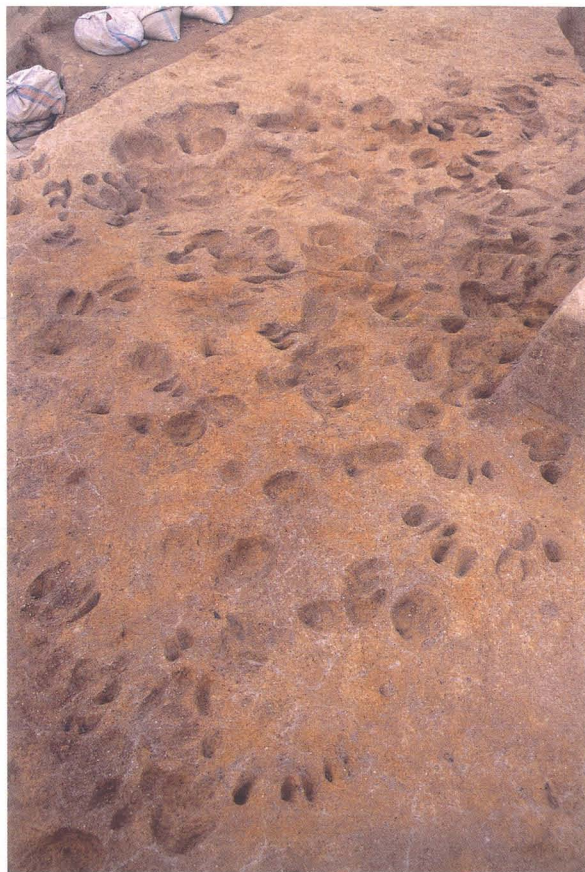
南区全景（西から）



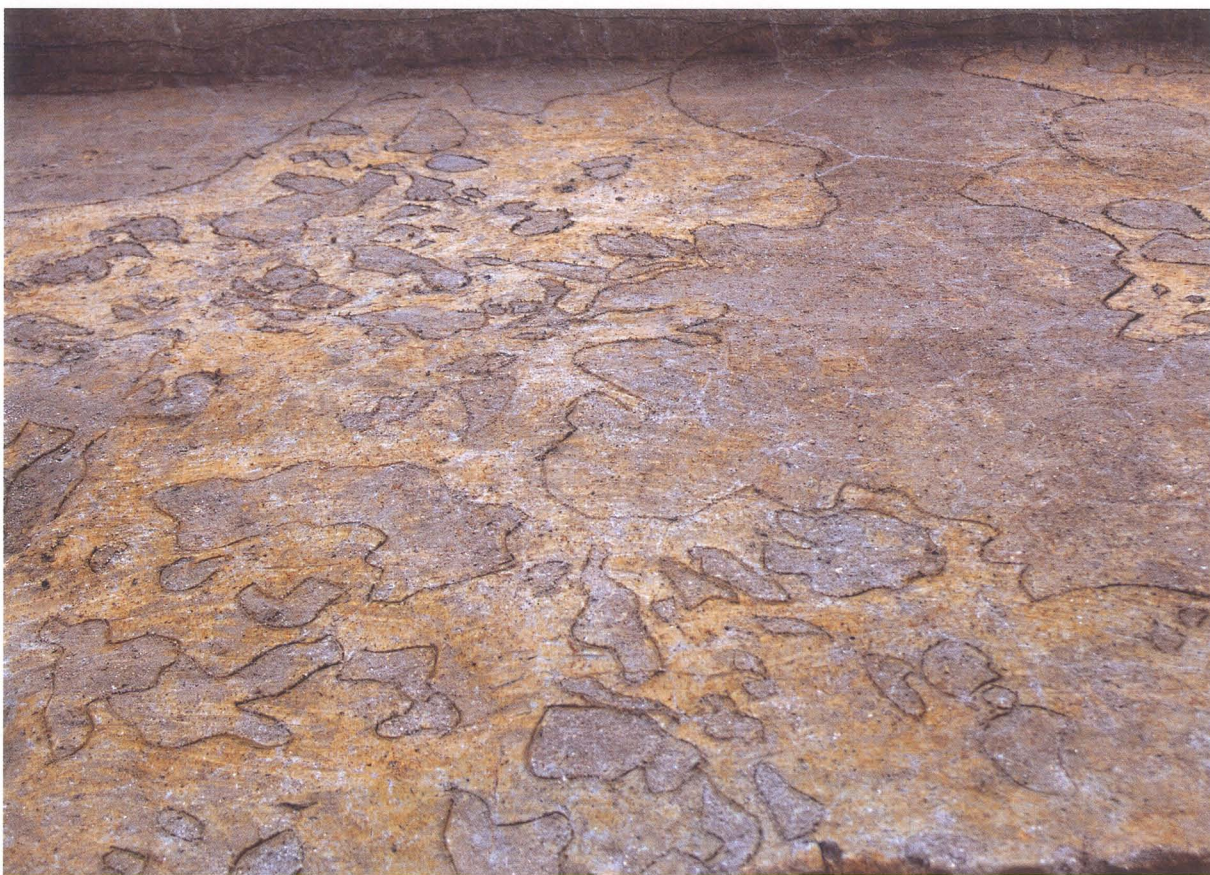
南区D区5層検出状況（西から）



西区Y3ライン、X3ライン以西第4遺構面遺構検出状況（東から）



西区Y5ライン、X3ライン付近第4遺構面遺構掘削状況（南西から）



西区北拡張部、X3ライン以西第4遺構面遺構検出状況（北から）



S K 501掘削状況（北東から）



S K 501・503完掘状況（北東から）



Y 5 ライン S X 501 完掘状況（西から）



X 5 ライン S X 501 完掘状況（北西から）



X 3 ライン西壁土層断面（北東から）



X 4 ライン西壁（S X 501北肩部付近）土層断面（南東から）



Y5ライン北壁（S X 501東肩部付近）土層断面（北西から）



北区南壁土層断面（部分）（北から）

序 文

阿保親王塚古墳や金津山古墳をはじめ、市内の古墳を彩る豊かな緑は、住宅都市に生活する私たちにとって身近にある貴重な自然です。これら市街地に残る古墳は、かつて築かれた数多くの古墳の一部で、その他の多くは何らかの理由で破壊され、地上から姿を消しました。

今回、発掘調査を実施した打出小槌町に所在する打出小槌古墳は、そのような地上に形跡をとどめない古墳の一つです。本墳は、昭和61年の試掘調査で発見され、これまでに実施された発掘調査成果の累積により、中世の耕作地開発で墳丘が完全に削り取られてしまった古墳時代中期の大形前方後円墳であることが判明してきました。

同じく打出小槌町には、打出小槌遺跡があります。この遺跡は市内で最も古い旧石器時代の遺跡としても知られています。

今回の発掘調査では埴輪の破片が出土したことから、本調査地点が打出小槌古墳に近い場所に位置していることが分かりました。さらに、弥生時代後期後半から古墳時代初頭及び平安時代以降の生活の形跡がみつき、芦屋市の歴史を編んでいく上で大変有意義な資料が得られました。

本書が郷土の歴史について関心を深めていただく一助となり、さらに学術研究及び教育資料として広く活用していただければ幸いです。そして、今後とも文化財保護へのご理解をお願いいたします。

発掘調査及び本書の刊行に当たりましては、事業者をはじめ、市民の皆様、本事業の関係者各位に多くのご理解、ご協力をいただきましたことに深く感謝を申し上げます。

平成19年3月31日

芦屋市教育委員会

教育長 藤原 周三

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市打出小槌町39—1番地に所在する打出小槌遺跡（第41地点）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。発掘調査は共同住宅建設に伴う事前調査で、本発掘調査を平成17（2005）年11月21日から平成18（2006）年1月26日まで実働41日で実施した。
2. 確認調査・本発掘調査の実施ならびに資料整理、報告書の印刷・刊行にあたって、事業者であるセントラル総合開発株式会社・和田興産株式会社からは、多大なご協力を得た。確認調査・本発掘調査費ならびに遺物整理費・報告書刊行費は、事業者が全額負担した。
3. 調査対象遺跡である打出小槌遺跡は、兵庫県教育委員会が平成16（2004）年3月に公刊している『兵庫県遺跡地図—第1分冊—（発掘調査の手引き・遺跡地図地名表）』〔兵庫県教委2004〕に「遺跡番号070019打出小槌遺跡」として掲げられている。また、本市教育委員会が平成13（2001）年3月31日に刊行した『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』＜芦屋市文化財調査報告第40集＞においても周知し、遺跡保護の取扱いを行っている。
4. 本発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、社会教育部生涯学習課学芸員 竹村忠洋と同課嘱託職員 白谷朋世（学芸員）・坂田典彦（学芸員）両名が担当した。調査体制については、第1章第2節に記したとおりである。
5. 発掘調査の実施に際しては、兵庫県教育委員会から指導・助言を受けた。
6. 本書の編集は、竹村・白谷が担当した。報告文の執筆は、竹村・白谷・坂田が行った。執筆分担については、目次および本文中に掲げたとおりである。
7. 本発掘調査および遺物・資料整理作業・報告書作成には、竹村・白谷が担当し、調査・整理補助員として生涯学習課臨時的任用職員 天羽育子・楠 貴大・水津真実・西岡崇代・山田みゆき・山本麻理・山本ゆかりが従事した。
8. 本書で使用した方位は、真北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
9. 本書に掲載した地図は、第8図が国土地理院発行5万分の1地形図「大阪北西部」（平成11年要部修正）図幅、第10・13図が芦屋市発行2千5百分の1基本図「六麓荘」「苦楽園口」「芦屋駅」「香櫨園」（平成10年3月修正）図幅、第11・46図は芦屋市発行2千5百分の1基本図「芦屋駅」「香櫨園」（平成18年2月修正）図幅をそれぞれ使用した。
10. 発掘作業は、事業者が安西工業株式会社に委託した。
11. 発掘調査状況のビデオ撮影記録は、山本徹男氏（市内在住・映像作家）に依頼した。
12. 本報告に関わる遺物、写真・実測図等の調査記録等は、芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課三条文化財整理事務所において保管している。広く活用されることを希望する。
13. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々からご助言・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします（50音順、敬称略）。

荒木幸治 岩本 崇 高橋照彦 辻 康男 長友朋子 藤川祐作 守田めぐみ

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

(1) 確認調査に至る経緯と経過…………… (竹村忠洋) …… 1

(2) 本発掘調査に至る経緯…………… (竹村) …… 2

第2節 調査体制…………… (竹村) …… 2

第3節 調査の経過…………… (竹村・白谷朋世・坂田典彦) …… 4

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 芦屋市の歴史的環境…………… (竹村) …… 9

第2節 打出小槌遺跡の概要…………… (竹村) …… 12

第3節 打出小槌古墳の概要…………… (竹村) …… 17

第3章 発掘調査の成果

第1節 本発掘調査の方法…………… (白谷) …… 20

第2節 基本土層…………… (白谷) …… 22

第3節 遺構

(1) 第1遺構面…………… (白谷) …… 24

(2) 第2遺構面…………… (白谷) …… 28

(3) 第3遺構面…………… (白谷) …… 32

(4) 第4遺構面…………… (白谷) …… 35

(5) 第5遺構面…………… (白谷) …… 41

第4節 遺物

(1) 包含層出土遺物…………… (白谷) …… 52

(2) 埴輪…………… (白谷) …… 55

(3) 遺構出土遺物…………… (白谷・竹村) …… 60

第4章 まとめ

第1節 時期的検討による調査成果

(1) 検出遺構から見た成果…………… (白谷) …… 63

(2) 出土遺物から見た成果…………… (白谷) …… 63

第2節 SX501の性格について…………… (白谷) …… 64

第3節 打出小槌古墳の墳域について…………… (白谷) …… 66

引用・参考文献…………… 71

芦屋市文化財調査報告集目録…………… 78

挿 図 目 次

第1図	確認調査におけるトレンチ配置図	1	第23図	第3遺構面遺構配置図	32
第2図	生涯学習課(文化財担当)	3	第24図	S K317土層断面図	34
第3図	三条文化財整理事務所 整理作業風景	3	第25図	第4遺構面遺構配置図	36
第4図	確認調査風景	5	第26図	S K405・406・407・411土層断面図	38
第5図	本発掘調査風景	8	第27図	1 トレンチ西部北壁土層断面図	39
第6図	本発掘調査風景	8	第28図	S E401土層断面図	39
第7図	兵庫県と芦屋市の位置	9	第29図	第5遺構面遺構配置図	42
第8図	芦屋市内主要遺跡分布図	10	第30図	第5遺構面等高線図	44
第9図	三条岡山遺跡(第17地点)で検出された古墳 周溝と埴輪(西から)	11	第31図	S K501~503平面図ならびにS K501・502土 層断面図	46
第10図	打出小槌遺跡周辺遺跡分布図	13	第32図	北区南壁・北区西壁・Y 5ライン南壁・Y 3 ライン南壁・南区北壁土層断面図	47
第11図	打出小槌遺跡とその周辺遺跡の既往調査地点 分布図	14	第33図	S X501内土坑状部分土層断面図	49
第12図	『摂津名所図会』にみえる江戸時代の打出地域	17	第34図	X 2ライン西壁・X 3ライン西壁土層断面図	49
第13図	宮川中・下流部左岸域微地形復元および塚・ 古墳分布図	18	第35図	X 4ライン西壁・X 5ライン西壁・X 6ライ ン西壁・X 6ライン—X 7ライン間南北調査 区西壁土層断面図	50
第14図	打出小槌遺跡(第31地点)前方部周濠渡り堤 検出状況(北から)	19	第36図	1層出土遺物実測図	53
第15図	打出小槌遺跡(第31地点)周濠内遺物出土状 況(東から)	19	第37図	2・3層出土遺物実測図	54
第16図	調査区配置図	21	第38図	埴輪実測図	57
第17図	2 トレンチ北壁土層断面図	23	第39図	埴輪出土分布図	59
第18図	第1遺構面遺構配置図	24	第40図	遺構出土遺物実測図(1)	61
第19図	Y 5ライン、X 4ライン交点付近第1遺構面 遺構平面図ならびにY 5ライン、X 4ライン 交点付近南壁土層断面図	26	第41図	遺構出土遺物実測図(2)	62
第20図	第2遺構面遺構配置図	28	第42図	X 5ライン東壁面における土器検出状況 (西から)	62
第21図	S K203土層断面図	31	第43図	打出小槌古墳出土の埴輪実測図	67
第22図	Y 5ライン、X 5ライン交点付近北壁土層断 面図	31	第44図	既往調査で検出された打出小槌古墳前方部周 濠	69
			第45図	打出小槌遺跡・古墳周辺における古墳関連遺 構および埴輪を検出した調査地点	70

表 目 次

第1表	打出小槌遺跡調査地点一覧表(1)	15	第3表	調査地点出土埴輪観察表	58
第2表	打出小槌遺跡調査地点一覧表(2)	16			

巻頭図版目次

巻頭図版 1

調査区全景（北西から）

調査区全景（東から）

巻頭図版 2

調査地点全景（南東から）

北区全景（南東から）

東区全景（北東から）

巻頭図版 3

南区全景（西から）

南区D区5層検出状況（西から）

巻頭図版 4

西区Y3ライン、X3ライン以西第4遺構面遺構検出状況
（東から）

西区Y5ライン、X3ライン付近第4遺構面遺構掘削状況
（南西から）

西区北拡張部、X3ライン以西第4遺構面遺構検出状況
（北から）

巻頭図版 5

S K501掘削状況（北東から）

S K501・503完掘状況（北東から）

巻頭図版 6

Y5ラインS X501完掘状況（西から）

X5ラインS X501完掘状況（北西から）

巻頭図版 7

X3ライン西壁土層断面（北東から）

X4ライン西壁（S X501北肩部付近）土層断面（南東から）

巻頭図版 8

Y5ライン北壁（S X501東肩部付近）土層断面（北西から）

北区南壁土層断面（部分）（北から）

写真図版目次

図版 1 調査地点近景・現況

調査地点近景（北西から）

調査地点近景（北東から）

調査地点調査前現況（南東から）

図版 2 確認調査（1）

1 トレンチ西部完掘状況（西から）

1 トレンチ西部北壁土層断面（南西から）

1 トレンチ東部完掘状況（北西から）

2 トレンチ掘削状況（東から）

2 トレンチ西部完掘状況（西から）

2 トレンチ東部完掘状況（北西から）

2 トレンチ拡張部掘削状況（南から）

図版 3 確認調査（2）

2 トレンチ西部北壁中央部土層断面（南西から）

4 トレンチ完掘状況および南壁土層断面（北から）

5 トレンチ完掘状況および北・西壁土層断面（南東から）

7 トレンチ完掘状況および北壁土層断面（南から）

8 トレンチ完掘状況および南・西壁土層断面（東から）

図版4 調査区設定状況

北区全景（西から）
南区全景（西から）
東区全景（南東から）

図版5 調査風景

重機掘削状況
重機掘削状況
残土搬出状況
実測状況
人力掘削状況
人力掘削状況
終了立会状況
埋め戻し状況

図版6 第1遺構面（1）

S K101検出状況（北から）
S K101掘削状況（北から）
S R101掘削状況（北から）
S R101掘削状況（東から）
Y 5ライン、X 4ライン交点付近南壁土層断面（北から）

図版7 第1遺構面（2）

西区Y 3ライン犁痕完掘状況（東から）
西区X 2ライン周辺犁痕検出状況（南から）
西区X 2ライン周辺犁痕完掘状況（南から）
西区Y 5ライン犁痕検出状況（東から）
西区X 3ライン周辺犁痕検出状況（南西から）
東区Y 5ライン犁痕検出状況（南東から）
東区X 6—X 7間南北調査区犁痕検出状況（東から）

図版8 第2遺構面（1）

S K203掘削状況（北から）
S K203完掘状況（北から）
S K203土層（部分）（西から）
S K216完掘状況（南東から）
S K209完掘状況（東から）
東区Y 5ライン、X 5ライン以北北壁土層（南東から）
Y 5ライン・X 5ライン交点付近耕作痕集中部検出状況（東から）
Y 5ライン・X 5ライン交点付近耕作痕集中部検出状況（東から）

図版9 第2遺構面（2）

S D201・202検出状況（南から）
S D201・202完掘状況（西から）
S D203検出状況（北から）
S D203完掘状況（北から）
1トレンチ以北S R201検出状況（東から）
1トレンチ以北S R201完掘状況（東から）
Y 5ラインS R201完掘状況（北から）
Y 3ラインS R201完掘状況（北から）

図版10 第3遺構面（1）

X 7ライン第3遺構面遺構検出状況（北から）
X 7ライン第3遺構面遺構完掘状況（北から）
Y 5ライン、X 6ライン以東第3遺構面遺構半裁状況（西から）
Y 5ライン、X 6ライン以東第3遺構面遺構完掘状況（西から）
X 7ライン東壁杭跡検出状況（西から）
Y 5ライン・X 2ライン交点周辺第3遺構面遺構検出状況（南西から）
Y 5ライン・X 2ライン交点周辺耕作痕検出状況（北から）
Y 5ライン・X 2ライン交点周辺足跡検出状況

図版11 第3遺構面（2）

Y 5ライン・X 2ライン交点周辺第3遺構面遺構完掘状況（西から）
S K317半裁状況（西から）
S K317完掘状況（西から）
S D301半裁状況（西から）
S D301完掘状況（西から）
X 3ライン、Y 5ライン以北第3遺構面遺構検出状況（西から）
X 3ライン、Y 5ライン以北第3遺構面遺構完掘状況（西から）

図版12 第4遺構面（1）

Y 5ライン以北S K401検出状況（北から）
Y 5ラインS K401検出状況（西から）
Y 3ラインS K401検出状況（東から）
Y 5ライン以北S K401完掘状況（東から）
Y 5ラインS K401完掘状況（東から）
S K401Y 5ライン南壁土層（北から）

図版13 第4遺構面(2)

S K 405・406検出状況(北東から)
S K 405半裁状況(西から)
S K 406半裁状況(西から)
S K 406完掘状況(西から)
S K 407~409検出状況(西から)
S K 407半裁状況(西から)
S K 407完掘状況(北から)
S K 409半裁状況(西から)

図版14 第4遺構面(3)

X 5ライン第4遺構面検出状況(南から)
Y 3ライン、X 6ライン以西第4遺構面掘削状況
(東から)
S K 411掘削状況(西から)
S K 411完掘状況(西から)
S K 411土層西壁(西から)
S K 411土層北壁(北から)
S K 411土層東壁(東から)
S K 411土層南壁(南から)
S P 402~404検出状況(東から)
S P 402半裁状況(西から)

図版15 第4遺構面(4)

確認調査時のS E 401掘削状況(東から)
S E 401完掘状況(北から)
確認調査時のS K 432~435・S P 401の完掘状況(南から)
X 4ライン・Y 5ライン交点付近耕作痕集中部完掘状況
(東から)
X 3ライン、Y 3ライン以南耕作痕集中部検出状況
(南から)
Y 3ライン、X 3ライン以西耕作痕集中部検出状況
(東から)
X 3ライン、Y 3ライン以南耕作痕集中部完掘状況
(南から)
X 3ライン・Y 5ライン交点周辺耕作痕集中部完掘状況
(西から)

図版16 第5遺構面(1)

S K 501掘削状況(南から)
S K 501土層観察用畦南壁(南から)
S K 501掘削状況(北西から)

S K 501完掘状況(南から)
S K 501南部土器出土状況(東から)
S K 501北部土器出土状況(西から)

図版17 第5遺構面(2)

S K 502掘削状況(東から)
S K 502掘削状況(北西から)
S K 502土器出土状況(北から)
S K 502内ビット半裁状況(東から)
S K 502内ビット土層(東から)

図版18 第5遺構面(3)

S K 503掘削状況(北から)
S K 503検出状況(北から)
S K 503土器出土状況(西から)
S K 503完掘状況(北から)
S K 503土層(北から)

図版19 第5遺構面(4)

X 3ラインS X 501完掘状況(北から)
Y 5ラインS X 501東肩部完掘状況(北西から)
X 4ライン・Y 3ライン交点付近S X 501掘削状況
(北東から)
X 4ラインS X 501北肩部完掘状況(南から)
Y 3ライン、X 4ライン—X 5ライン間S X 501掘削状況
(西から)
X 5ラインS X 501完掘状況(南西から)
X 5ラインS X 501完掘状況(北西から)
X 6ライン・Y 3ライン交点付近S X 501完掘状況
(北東から)

図版20 第5遺構面(5)

5層内土器出土状況
5層内土器出土状況
南区D区5層分布状況(北から)
南区西端S X 501完掘状況(北東から)
北区S X 501完掘状況(南東から)
北区S X 501完掘状況(部分)(南から)
Y 5ラインS X 501完掘状況(西から)
S K 504・505完掘状況(北西から)

図版21 第5遺構面(6)

S K 505完掘状況（西から）
S K 506完掘状況（南から）
S K 507掘削状況（北から）
X 3 ライン東壁 5 層（部分）（西から）
西区北拡張部北壁 5 層（部分）（南から）
西区北拡張部北壁 5 層（部分）（南から）
S X 501床面における黒色ブロック検出状況（北から）
南区 F 区北壁土層（北から）
北区南壁東部（部分）（北東から）
北区南壁西部（部分）（北西から）

図版22 土層断面（1）

北区北壁土層（南から）
北区西壁土層（東から）
北区南壁土層（北西から）
南区東部北壁土層（南から）
南区 X 6 ライン付近北壁土層（南から）
南区北壁土層（南東から）
南区 X 5 ライン付近北壁土層（南から）
東区北壁土層（南西から）

図版23 土層断面（2）

Y 3 ライン、X 4 ライン以西南壁土層（北東から）
Y 3 ライン、X 3 ライン以西南壁土層（北西から）
Y 3 ライン、X 3 ライン—X 4 ライン間南壁土層（北から）
Y 3 ライン、X 5 ライン付近南壁土層（北から）
Y 3 ライン、X 4 ライン—X 5 ライン間南壁土層（北東から）
Y 5 ライン、X 2 ライン以西南壁土層（北西から）
Y 5 ライン、X 2 ライン—X 3 ライン間南壁土層（北から）
X 3 ライン、Y 3 ライン以南西壁土層（北東から）
X 3 ライン、Y 3 ライン以北西壁土層（北東から）

図版24 土層断面（3）

X 4 ライン西壁土層（南東から）
X 4 ライン、2 トレンチ—Y 3 ライン間西壁土層（東から）
X 4 ライン、Y 3 ライン付近西壁土層（南東から）
X 4 ライン、Y 3 ライン—Y 5 ライン間西壁土層（東から）
X 5 ライン西壁土層（北東から）
X 5 ライン、2 トレンチ以北西壁土層（南東から）
X 5 ライン、2 トレンチ—Y 3 ライン間西壁土層（東から）
X 5 ライン、Y 3 ライン—Y 5 ライン間西壁土層（東から）

図版25 土層断面（4）・完掘状況

X 6 ライン西壁土層（北東から）
X 6 ライン、Y 3 ライン以南西壁土層（南東から）
X 6 ライン、2 トレンチ以南西壁土層（東から）
X 6 ライン、2 トレンチ—Y 3 ライン間西壁土層（東から）
X 6 ライン、Y 3 ライン交点付近西壁土層（東から）
X 6 ライン、Y 3 ライン以北西壁土層（東から）
調査区全景完掘状況（西から）

図版26 出土遺物（1）

1 層出土遺物（1）（左上）
1 層出土遺物（2）（左中）
2 層出土遺物（左下）
1 層出土石器（右上）
3 層出土石鏃（右下）

図版27 出土遺物（2）

S K 101出土灯明皿（左）
2・3 層出土遺物（右上）
遺構出土遺物（1）（右中）
遺構出土遺物（2）（右下）

図版28 出土遺物（3）

円筒埴輪（1）
円筒埴輪（2）

図版29 出土遺物（4）

円筒埴輪・形象埴輪（1）
円筒埴輪・形象埴輪（2）

図版30 出土遺物（5）

S X 501出土遺物（1）
S X 501出土遺物（2）

第1章 はじめに

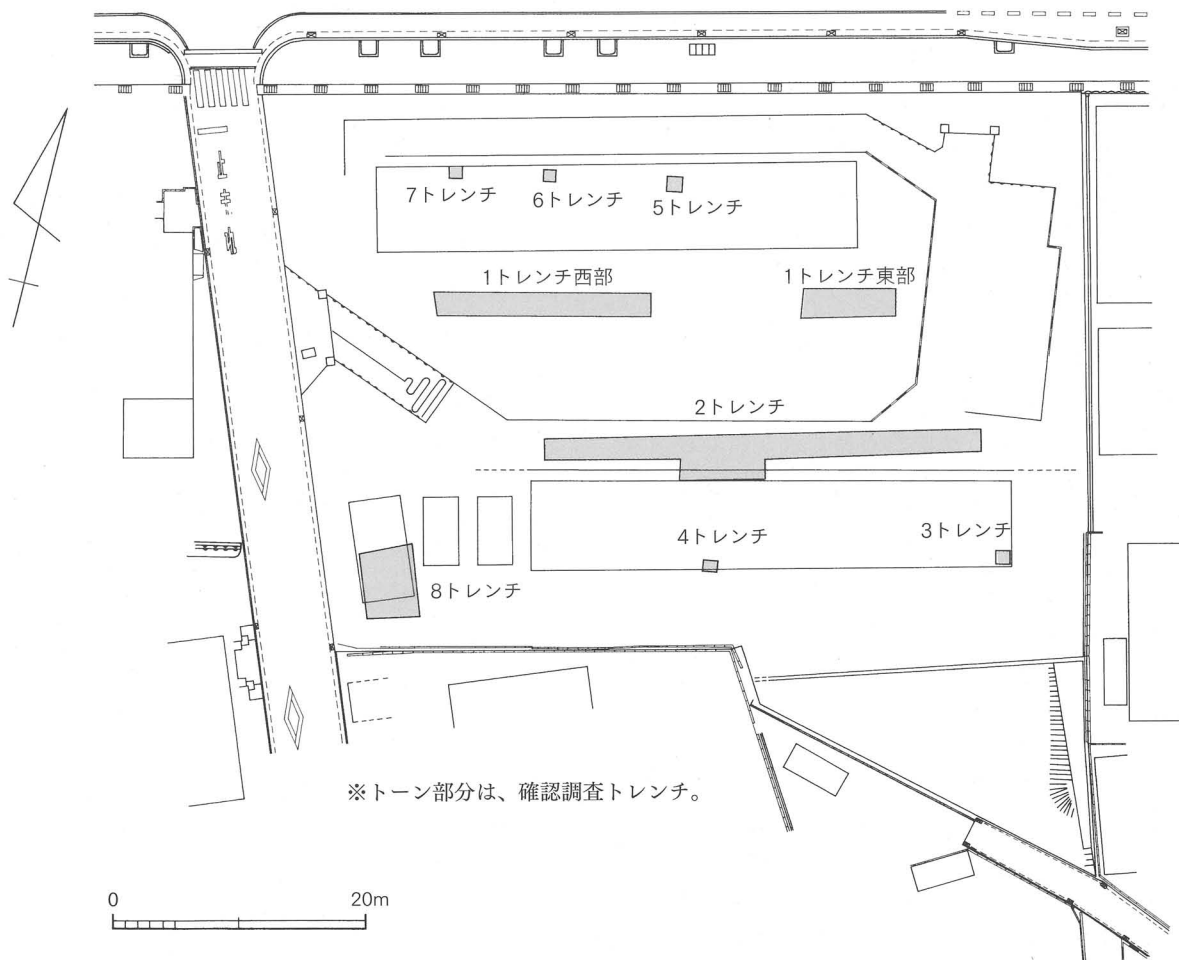
第1節 調査に至る経緯

(1) 確認調査に至る経緯と経過

兵庫県芦屋市打出小槌町39—1（敷地面積3,045.11㎡）において、鉄筋コンクリート造地上12階建共同住宅の新築計画がもち上がったが、当該敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地である打出小槌古墳および打出小槌遺跡の分布範囲内であるため〔兵庫県教委2004、第40集（芦屋市文化財調査報告第40集を略した表記。以下、同様に略す。）〕、事業者であるセントラル総合開発株式会社大阪支店取締役支店長工藤健吾・和田興産株式会社代表取締役和田憲昌より文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出書が平成17（2005）年7月6日付で、本市教育委員会に提出された。

本市教育委員会は、受理した届出書に添付された計画建築物の概要と設計図をもとに内容を審査し、当該地周辺で実施された既往調査の結果から、埋蔵文化財が損壊を受ける可能性が高いと判断した。そこで、工事着手前に確認調査を実施し、当該地における埋蔵文化財の有無や工事による遺物包含層・遺構面への影響を確かめ、今後の取扱いを決定する必要があることを事業者に回答した。

その後、本市生涯学習課と事業者との協議を経て、既存建物を解体した後、芦屋市教育委員会を調査



第1図 確認調査におけるトレンチ配置図（1／600）

主体として確認調査を行うこととなった。確認調査を実施するにあたって、「埋蔵文化財確認調査に関する協定書」が平成17（2005）年9月27日付で、事業者であるセントラル総合開発株式会社大阪支店取締役支店長工藤健吾・和田興産株式会社代表取締役和田憲昌と芦屋市教育委員会教育長藤原周三との間で締結された。確認調査は協定書に基づき、平成17（2005）年10月3日から10月21日までに実働10日以内で実施し、その後、生涯学習課三条文化財整理事務所で11月18日までに基礎資料の整理と確認調査結果報告書を作成することとなった。調査担当者は、生涯学習課主査（文化財担当）森岡秀人（学芸員）・同課学芸員竹村忠洋・同課嘱託職員坂田典彦（学芸員）・白谷朋世（学芸員）となった。調査・整理補助員としては、同課臨時的任用職員天羽育子・楠 貴大・水津真実・西岡崇代が従事した。

なお、発掘作業は、事業者が安西工業株式会社に委託した。確認調査に伴う費用は、事業者が全額負担した。

確認調査は、面積が111.9㎡を測った。結果としては、弥生時代と中世の遺構を検出し、弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器など、弥生時代から中世に帰属する遺物が出土した〔森岡・竹村・坂田・白谷2005〕。

確認調査結果と工事計画を照合したところ、工事掘削によって遺物包含層および遺構面が損壊を受けると判断された。確認調査後、事業者との間でこれらの遺構面や遺物包含層が現状保存できるように計画事業との調整を図ったが、工事によって埋蔵文化財の損壊が避けられないと判断されたため、その範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。（竹村忠洋）

（2）本発掘調査に至る経緯

確認調査の結果を受けて、生涯学習課と事業者の間で、本発掘調査の実施に向けて協議を重ねた。基礎の掘方は地中梁の部分とその余掘に限られ、地中梁によってそれぞれ掘削深度が異なっていた。そこで、調査区を設計図に合わせて設定し、調査深度も工事掘削深度に合わせることとなった（第16図）。

本発掘調査を実施するにあたって、「埋蔵文化財本発掘調査に関する協定書」が平成17（2005）年11月14日付で、事業者であるセントラル総合開発株式会社大阪支店取締役支店長工藤健吾・和田興産株式会社代表取締役和田憲昌と芦屋市教育委員会教育長藤原周三との間で締結された。本発掘調査は、協定書に基づき、現地の作業を平成17（2005）年11月17日から平成18（2006）年2月5日まで実施することとなった。また、発掘調査後には、生涯学習課三条文化財整理事務所において、平成19（2007）年3月31日までに基礎整理事業および発掘調査報告書（本書）を作成することとなった。

本発掘調査は、生涯学習課学芸員竹村忠洋・同課嘱託職員白谷朋世（学芸員）・坂田典彦（学芸員）が担当し、調査・整理補助員として同課臨時的任用職員天羽育子・楠 貴大・水津真実・西岡崇代・山田みゆき・山本麻理・山本ゆかりが従事した。なお、発掘作業は、事業者が安西工業株式会社に委託した。

本発掘調査および基礎整理、報告書の作成、印刷・製本に伴う費用は、事業者が全額負担した。（竹村）

第2節 調査体制

確認調査・本発掘調査および資料整理、報告書作成は、芦屋市教育委員会を主体として、以下の調査体制で実施した。（竹村）

【平成17（2005）年度】

芦屋市教育委員会 教育長 藤原周三
 社会教育部 部長 高嶋 修
 生涯学習課 課長 石濱正昭
 課長補佐 中戸博幸
 主査（文化財担当） 森岡秀人（学芸員、確認調査担当）
 社会教育主事 春木和子（総務担当）
 学芸員 竹村忠洋（確認調査および本発掘調査担当）
 嘱託職員 白谷朋世（学芸員、確認調査および本発掘調査担当）
 嘱託職員 坂田典彦（学芸員、確認調査および本発掘調査担当）
 臨時的任用職員 国政恭子
 調査・整理補助員 天羽育子 楠 貴大 水津真実 西岡崇代 山本麻理

【平成18（2006）年度】

芦屋市教育委員会 教育長 藤原周三
 社会教育部 部長 松本 博
 生涯学習課 課長 川崎正年
 課長補佐 長谷川易司
 主査（文化財担当） 森岡秀人（学芸員）
 社会教育主事 春木和子（総務担当）
 学芸員 竹村忠洋（報告書作成・編集担当）
 嘱託職員 白谷朋世（学芸員、報告書作成・編集担当）
 嘱託職員 坂田典彦（学芸員、報告書作成）
 臨時的任用職員 国政恭子
 整理補助員 水津真実 西岡崇代 山田みゆき 山本麻理 山本ゆかり



第2図 生涯学習課（文化財担当）



第3図 三条文化財整理事務所 整理作業風景

第3節 調査の経過

現地における発掘調査は、確認調査が森岡・竹村・坂田・白谷を調査担当者として、平成17（2005）年10月3日から10月21日まで実働10日で実施した〔森岡・竹村・坂田・白谷2005〕。

本発掘調査は、竹村・白谷・坂田を調査担当者として平成17（2005）年11月21日から平成18（2006）年1月26日まで実働41日で実施した。

発掘調査終了後は、芦屋市教育委員会三条文化財整理事務所において、竹村・白谷を担当者として遺物・図面・写真整理等を行い、引き続いて本報告書の作成・編集作業を行った。

次に確認調査および本発掘調査の日誌抄を掲げて、調査の経過および作業内容の概要を記す。

（竹村・白谷朋世・坂田典彦）

【確認調査日誌抄】

平成17（2005）年10月3日（月） 曇り

調査初日。重機や器材を搬入し、調査を開始する。

設計者から構造物・掘削の計画や基準高を確認し、トレンチを設定する。東西に長いトレンチ（1トレンチ）を設定し、重機掘削を開始した。旧建造物にかかる盛土が厚く、重機を用いてもなかなか掘削が難しい。しかし、この盛土に保護された結果、遺物包含層は良好に残存しているようである。

盛土の下に確認した土層は、上から、土壌化した水成層、旧耕土（「耕土1」と仮称）、砂質土、旧耕土（「耕土2」と仮称）、砂質土、青灰色シルト（大阪層群類似層）である。耕土2の下に砂質土は黄褐色の粘土に灰色の粗砂が混じり、不均質である。粗砂とともに土師器片が出土したことから、遺構埋土の可能性が考えられるようになった。そこで、トレンチの壁を清掃して検討した結果、溝ないし濠状遺構の埋土と考えるに至った。この溝状遺構は何度も掘り直しをしているようで、かなり攪拌されているが、南壁土層と北壁土層の対応関係を検討していくと、南東―北西方向を指向するようである。これは推定されている打出小槌古墳の周濠の方向と合うが、今のところ須恵器も葺石も見られず、関連は不明である。

夕方に、竹村・坂田と明日の作業手順を打ち合わせる。

10月4日（火） 雨

雨天のため、作業中止。

10月5日（水） 雨

雨天のため、作業中止。

10月6日（木） 晴れ

1トレンチ西部の第5層上面で、土坑4基とピット1基を検出した。土壌化した暗黒色土が遺構の最終埋土となる。

1トレンチ東部は、旧表土直下に黄灰色を呈する大阪層群類似層を検出し、当地域の旧地形は予想以上に東側が高いことが確認された。

2トレンチ西部は、1トレンチ西部に似た様相を呈するが、耕作土の遺存状態が悪く不明瞭である。

10月7日（金） 雨

雨天のため、作業中止。

10月11日（火） 雨

雨天のため、作業中止。

10月12日（水） 晴れ

1トレンチ西部で先週検出した土坑4基（SK101～104）・ピット1基（SP101）に加えて井戸1基（SE101）の半裁を行った。検出層位は黄灰色粘土質シルトで、大阪層群を母材とするブロック土が混入している。井戸（SE101）は湧水層の確認をしておらず、平・断面形状から仮に井戸と呼称する。写真撮影後、ベース層の断割りを行い遺構の性格を検証する必要がある。

2トレンチ西部では、灰色シルト質粘土層がGL-1.7mほど掘削したレベルで観察できた。当層が大阪層群（いわゆる地山層）になるか否かの検証は明日に持ちこす。

調査地西半域のトレンチ配置図（1/100）を作成。1トレンチ西半部で検出した遺構の平面実測。SE101のセクションベルトの実測（1/10）。

10月13日（木） 晴れ

13時より森岡・竹村・坂田・白谷の4名で中間現場検証

を行った。検証内容は、次のとおりである。①2トレンチの西・東部を連結して層位の把握と遺構面の広がりを確認する。②GL-1.6mで観察できる黄灰色粘土質シルトの解釈として、純粋な大阪層群ではなく、大阪層群を母材とする再堆積層であると判断できる。根拠として当層から2・3点の遺物が検出されたこと、ブロック土の混入状況、砂や偽礫が混入することが挙げられる。③既存建物解体坑内にも幾つかのトレンチを設け、1・2トレンチで確認される遺構面が遺存しているか否かを判断する。などが検討され、今後の調査方針も上記を加味して、監督作業員と打ち合せを行った。

1トレンチ東部の水抜きと壁面精査、2トレンチ東部の壁面精査、2トレンチ西部の黄灰色シルト質粘土層の掘り下げを行った。東半部の調査区配置図(1/100)、SE101の土層註記、2トレンチ東端の南壁土層断面図(1/20)の実測。仲谷由利子(芦屋市整理補助員)夫妻来跡。

10月14日(金) 晴れ

2トレンチ東部と西部をつなげるため、重機によって盛土を除去した。また、解体坑内の遺構面・遺物包含層の遺存状況を把握するため、南側の解体坑内に3・4トレンチを、北側の解体坑内に5～7トレンチを設定し(各々1m四方)、随時、人力によって掘削した。1トレンチは、SE101の断割りを行い、南壁にて湧水層を確認した。SE101の南壁柱状図(1/20)作成。山内芳子氏(元芦屋市教育委員会文化財課嘱託職員)来跡。

10月17日(月) 晴れ

休日中の降雨で、トレンチすべてに雨水が溜まっており、朝一番で水抜き作業を行った。1トレンチ西部の壁面精査・分層を行い、実測を開始した。3トレンチを完掘し、土層柱状図を作成した。

10月18日(火) 晴れ

2トレンチ中央部の黄灰色礫混じり粘土質シルト上面で、土器片を検出した。土器を残しながら掘削すると、ある程度の集合状況が確認できた。土器の色とベース層の色調が似ているため、写真で判るように竹串を刺して出土位置を押さえた。また、土器出土状態の平面図を作成。4・6・7トレンチ柱状図の作成。

10月19日(水) 晴れ

2トレンチ中央で検出した土器群を、浮かしながら掘り



第4図 確認調査風景

下げた。先日、平面で観察できた土器のまとまりに合致するように、土器片が確認されたため、土器溜まりとして図面に表現し、ナンバーを記入してグループごとに取り上げた。土器以外の遺物は、出土しなかった。

1トレンチ西部の北壁土層断面実測を完了させた。

調査地南西隅の駐車場部分に、トレンチを設定した(8トレンチ)。敷地周縁を巡る石垣に近いため、犬走りを設ける段掘り工法で掘削した。羽釜や瓦器碗など中世の土器が耕作土内から出土した。

10月20日(木) 晴れ

15時30分より、森岡・竹村・坂田・白谷の4名で最終の現場判断協議を行う。2トレンチ中央で観察できる黄褐色シルト質粘土に黒色シルトがマール状に混入する層相について、その形成要因に係るいくつかの問題提起を行った。一つには、打出小槌古墳の後円部築成土に成り得る可能性が指摘され、今回のトレンチ調査で古墳の兆候を掴むことを目標とした。

8トレンチ(敷地南西隅)で、盛土以下の人力掘削。掘削床に近いレベルで黒色有機質粘土が確認できた。上面を薄い砂層が覆い、黒色粘土層に数点の遺物が確認できた。

10月21日(金) 晴れ

確認調査最終日。解体坑内の3～7トレンチを人力で埋め戻した。午前中に2トレンチ北壁の土層断面実測を完了させ、午後から8トレンチの西壁実測に着手した。重機による埋め戻しは、実測終了箇所から追いかけるように行った。

16時30分より、事業者立ち会いの下、現状復旧状況の確認を行った。

敷地出入口付近とトイレの掃除を完了し、調査器材を撤収して、確認調査を完了した。

【本発掘調査日誌抄】

平成17(2005)年11月21日(月)～11月22日(火) 晴れ

盛土の重機掘削が大体終了したので、Y3ラインの東西調査区の設定を行った。また、調査区に合わせて壁面や機械掘削床面を精査した。

11月24日(木) 晴れ

Y1ラインの精査と掘削を継続する。あわせて、コンクリート基礎の除去や攪乱部分の掘削を行う。

11月25日(金) 晴れ

Y3ラインの調査区を設定し、1層上面まで掘削。
X7ライン・Y5ラインの交点付近を精査。犁痕と井戸ないし土坑の掘形を検出したが、電柱のアースや攪乱も多い。

11月28日(月) 晴れ

本日より調査補助員参入。備品・調査道具を搬入。
調査区配置図の作成準備として、確認調査時に打設した杭の確認や、調査区設定用基礎杭の座標を確認。

X4ライン以西の戦災盛土を掘削し、第1遺構面を検出する。コンクリート基礎や土管による攪乱が著しい。

11月29日(火) 晴れ

X4ライン以西の掘削を継続する。
Y3ライン上で検出した犁痕の平面図を作成。

11月30日(水) 晴れ

午前中、坂田と白谷で進捗状況について打ち合わせ。
仮置きしていた残土を4tダンプで場外搬出した。
犁痕の平面実測図の作成を継続し、実測の終了した箇所から遺構掘削を行う。夕方、現時点で検出した犁痕の完掘状況を撮影した。調査区配置図の作成も継続する。

12月1日(木) 晴れ

坂田立会の下での盛土掘削が終了し、重機撤収。
盛土を除去した部分から人力掘削を行う。
調査区配置図の作成を行う。

12月2日(金) 晴れときどき曇り

東区を中心に第1遺構面を検出。傾斜面のため、異なる土層上面に犁痕が確認できる。記録を取った部分から第2遺構面を目指して掘削を行う。坂田から竹村・白谷に引継ぎを行う。調査区配置図の作成を継続。

12月5日(月) 晴れときどき曇り

調査地の北西部分のフェンスと看板が強風のために倒壊し、北区に落下していたので、事業者に連絡した。

東区では第2遺構面の検出を行う。

南区では排水と北壁の清掃を行う。土層観察の結果、南区の東部は既存建物に伴う攪乱が基盤層に及んでおり、遺物包含層や遺構の残存が確認できないことから、残土置き場にする事を決定した。

調査区配置図の他に、遺構平面図の作成に着手した。

12月6日(火) 雨のち曇り

東区では第2遺構面の検出を行う。X5ラインではY5ラインより南に灰色土が広がっており、X6ライン以東とは様相を異にする。

12月7日(水) 晴れ

東区では第2遺構面の遺構を掘削する。灰色土の広がる、X5ラインのY5ライン以南を中心に、一段掘り下げて第4遺構面の検出を行う。

南区は清掃を行う。かなり攪乱がひどいが、所々に遺物包含層や遺構が残存しているようである。

12月8日(木) 晴れときどき曇り

東区では第2遺構面を完掘し、写真撮影や平面図の作成を行う。南東部の第4遺構面の遺構を掘削する。

南区は5層上面(第4遺構面に相当と考える)を検出し、遺構平面図の作成に着手する。

西区では人力掘削を再開し、第1遺構面を検出する。何点か埴輪片が出土している。

12月9日(金) 晴れときどき曇り

東区ではY1ラインとX6ラインの交点部分で第4遺構面を検出。5層の遺物包含量を確かめながら掘削する。第4遺構面の平面図の作成を行う。

南区では第4遺構面の遺構を掘削する。

西区では第1遺構面の犁溝等を検出し、掘削する。記録を取った後、2層の掘削を行う。

12月12日(月) 晴れときどき曇り

東区では南東部の第4遺構面平面図の作成を行う。

西区では第2遺構面の遺構を検出する。東区と西区の境にある流路の平面図を作成する。

北区では既存建物に伴う攪乱部分の掘削を開始する。X3ライン以東は基盤層まで攪乱が及んでおり、遺構等は残存していないことが明らかになった。

12月13日(火) 晴れのち曇り

西区では第2遺構面を検出し、平面図を作成。図のでき

あがったところから、3層の掘削を行う。東区と西区の境にある流路の平面図完成後、近世遺構（S K 101）を掘削する。

北区ではX 3 ライン以東を記録した後、この部分を残土置き場にする。

藤川祐作氏および芦屋川カレッジ卒業生の見学あり。

12月14日（水） 晴れ

西区では3層の掘削を継続する。

12月15日（木） 晴れのち曇り

西区では4層上面の第3遺構面を検出し、平面図の作成や遺構の掘削を行う。

東区では3a層を掘削し、第3遺構面を検出する。

12月16日（金） 晴れ

西区では4層の掘削を開始する。

東区では、第3遺構面の下位にさらに遺構面が存在するかどうかを確認するため、サブトレンチを設けて掘削を行い、基盤層を確認した。

12月19日（月） 晴れときどき雨

西区では4層の掘削を継続し、第4遺構面の検出を目指す。犁痕ないし足跡らしきものや土坑状のものが見えるが、土層の変化が曖昧で判然としない。

東区は完掘し、写真撮影や平面図の作成も完了。なお、本日は東区を中心に山本徹男氏にビデオ撮影を依頼した。

12月20日（火） 晴れ

西区では第4遺構面を精査し、遺構を検出する。足跡を多く確認した。

東区では土層断面図を作成する。

南区ではY 1 ラインに深掘トレンチを設けて5層の状態を確認する。

北区はX 3 ラインを中心に掘削を行う。ここにも遺構が広がっていることが確認された。

12月21日（水） 晴れ

西区では第4遺構面の遺構平面図を作成する。足跡は、特に集中しているY 2 ライン・X 2—X 3 間と、X 3 ライン・Y 2 以南に限って平面図を作成する。

南区ではY 1 ライン西端において第4遺構面の残存を確認し、平面図を作成。北壁沿いにサブトレンチを設けて掘削したところ、確認調査時とは異なる土層を確認。基盤層と考える6層が多様であることがわかる。これを受けて、北区にもサブトレンチを設けて土層の観察を行った。

12月22日（木） 雪

積雪が著しく、調査を中止する。

12月26日（月） 晴れのち曇り

北区のサブトレンチ掘削を継続。森岡・竹村・坂田・白谷の4名で、掘削深度と土層について検討を行う。

12月27日（火） 曇りときどき晴れ

東区の北端について、拡張部分を設けて遺構を検出する。あわせて平面図の補足を行う。

西区の第4遺構面で検出した遺構の掘削を開始するが、遺構埋土とベースの判別が難しい。

南区の土層断面図を作成する。

12月28日（水） 晴れ

東区北拡張部の第1遺構面を完掘し、続いて第2遺構面を検出する。

西区のX 4 ラインについて、位置や幅を再確認した上で、調査区を東に拡幅した。

南区は完掘。土層断面図も完成した。

本日は年内最終日であり、明日から年末年始の休暇のため、養生を念入りに行う。

平成18（2006）年1月5日（木） 曇り

新年早々、六甲おろしがとても寒い。

事業者、設計者、施工業者を交えて再度地区割りを確認し、調査区の追加、拡張を行う。加えて、北区の調査のためにY 6 ラインの位置を明らかにしてもらう。

1月6日（金） 曇りのち晴れ

東区拡張部の第2遺構面を完掘し、続いて第3遺構面を検出する。

西区は第4遺構面の遺構をほぼ完掘。

北区は5層の掘削を開始する。

1月10日（火） 晴れのち曇り

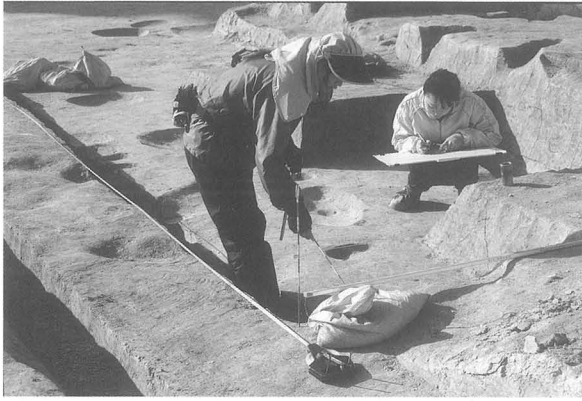
西区は第4遺構面の遺構を完掘し、引き続いてX 4 ラインを中心とする粗砂層の分布部分の掘削を行う。

北区は灰色に汚れた5層から土師器が出土するので、一部サブトレンチを設定して、土層を検討する。

1月11日（水） 曇り

西区は第4遺構面の足跡を掘削し、写真撮影を行う。

辻康男氏とともに5・6層の検討を行った後、東区に広がる5層の掘削を開始する。5層の解釈として、6層を起源とする人為的に攪拌された土という見解に落ち着く。そ



第5図 本発掘調査風景

の性格については、打出小槌古墳の墳丘盛土の可能性が考えられた。これは、しまりの悪い砂層等の不安定な土層を除去して安定した6層まで掘削し、掘削面を古墳構築のベースとして5層を盛り上げたという解釈である。

1月12日（木） 晴れ

東区では5層の掘削を継続する。X5ライン付近はやはり5層が厚く堆積している。

西区では5層の分布状態を確認するため、縦横にサブトレンチを設定。粗砂層分布部分の掘削も継続する。

1月13日（金） 晴れ

東区および西区で5層の掘削を継続する。少しずつ5層の分布域や深さがわかってくる。

西区では粗砂層分布部分や第5遺構面の遺構（S K501～503）の掘削を行う。

1月16日（月） 晴れのち曇り

先週末の雨で調査区全体が水没しており、排水作業に時間がかかる。

東区の5層掘削がほぼ終了したので、5層分布状況平面図や土層断面図を作成する。

西区では5層の掘削を継続する。土師器の出土あり。

1月17日（火） 曇り

昨晚の雨で調査区が再び水没し、排水作業を行う。

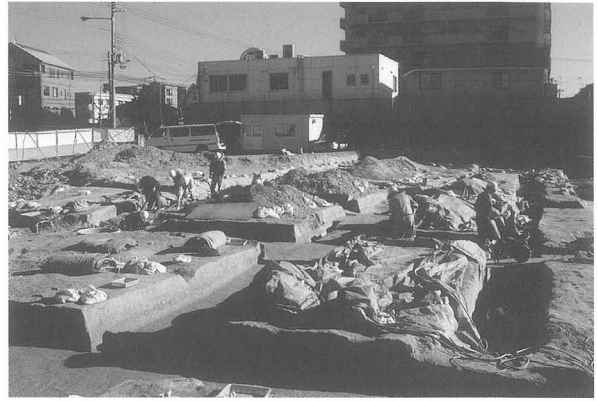
西区の5層掘削継続。5層分布状況平面図や土層断面図を作成する。Y5ライン西端では、5層直下には6層とは異なる水成層の砂層が検出される。

1月18日（水） 晴れのち曇り

東区は5層掘削部分の清掃を行う。

西区では5層の掘削を継続する。

土層断面図の作成を続ける一方、5層掘削状態の山本徹男氏によるビデオ撮影や調査区全景の写真撮影を行う。



第6図 本発掘調査風景

1月19日（木） 曇り

西区の5層掘削もいよいよ大詰めだが、今日もかなり寒い。6層上面に汚れた青灰色土を検出。掘削したところ、土師器が出土し、遺構と確認。6層上面は平坦でなく、所々に凹凸が見られる。

X5ラインやX6ラインに土層観察用のサブトレンチを設けて掘削する。

1月20日（金） 晴れ

天気予報では雪の可能性があったので、掘削作業は止めて平面図や土層断面図の作成に専念する。

6層については、古墳盛土としては包含する土師器の破片が大きいことから、粘土採掘坑に再堆積した粘土ではないかという見解も出てきた。また、Y5ライン西端の砂層は、5層形成以前に埋没した流路ではないかと考えるに至る。水津真実氏・岩本崇氏の見学あり。

1月23日（月） 晴れときどき雪

5層分布状況平面図に、6層上面の検出状況がわかるようにコンターラインを加える。念のため、5層をサンプリングして観察したところ、粘土採掘坑埋土の可能性がとにかく高まる。所々にサブトレンチを設けながら、土層の検討を進める。とにかく寒い。

1月24日（火） 晴れときどき曇り

西区および東区の平面図作成完了。土層断面図の作成を継続する。

1月25日（水） 晴れ

土層断面図の作成を継続する。山本徹男氏によるビデオ撮影の補足あり。

1月26日（木） 晴れ

調査最終日。長友朋子氏の見学あり。図面の最終点検後、器材を撤収した。

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 芦屋市の歴史的環境

芦屋市は兵庫県の南東部に位置する阪神間の住宅都市である。市域の形状は南北に細長く、その規模は東西約2.5km、南北約8.3km、面積約18.57㎢を測る（第7図）。市域の地形は、六甲山地と大阪湾に挟まれた北高南低の変化に富むものとなっており、山地・丘陵・台地・段丘・沖積扇状地・沖積低地・砂州・浜堤・砂浜が形成されている〔辻2002・2003、辻・矢作・辻本・田中・パリノ2003〕。主な河川は、芦屋川と宮川である。

現在の市街地は、六甲山地南麓の台地・丘陵部と神戸平野とも呼称される東西に細長い平野部を中心に展開している。市の推計人口総数は、平成19（2007）年1月1日現在、92,044人となっている〔芦屋市広報課2007〕。狭隘な平野部には、阪急電鉄神戸線、JR東海道本線（神戸線）、国道2号線、阪神電鉄本線、国道43号線、阪神高速国道3号神戸線・5号湾岸線が並行して走っており、東西交通の要衝となっている。さらに、平成22（2010）年には都市計画道路山手幹線が開通する予定である。

市内に分布する遺跡は、平成19（2007）年1月31日現在、137遺跡が周知されている。それらの内、主要な遺跡について時代を追って概観する（第8図）。なお、遺跡の詳細は、『新修芦屋市史』本篇・資料篇1〔武藤・有坂・末中・村川編1971・1976〕および芦屋市文化財調査報告第1～65集等を参照されたい。なお、芦屋市文化財調査報告について、本書の78～82頁にその目録を掲載した。

最も古い遺跡は旧石器時代後期のもので、岩ヶ平・朝日ヶ丘・堂ノ上・打出小槌遺跡など、岩ヶ平台



第7図 兵庫県と芦屋市の位置

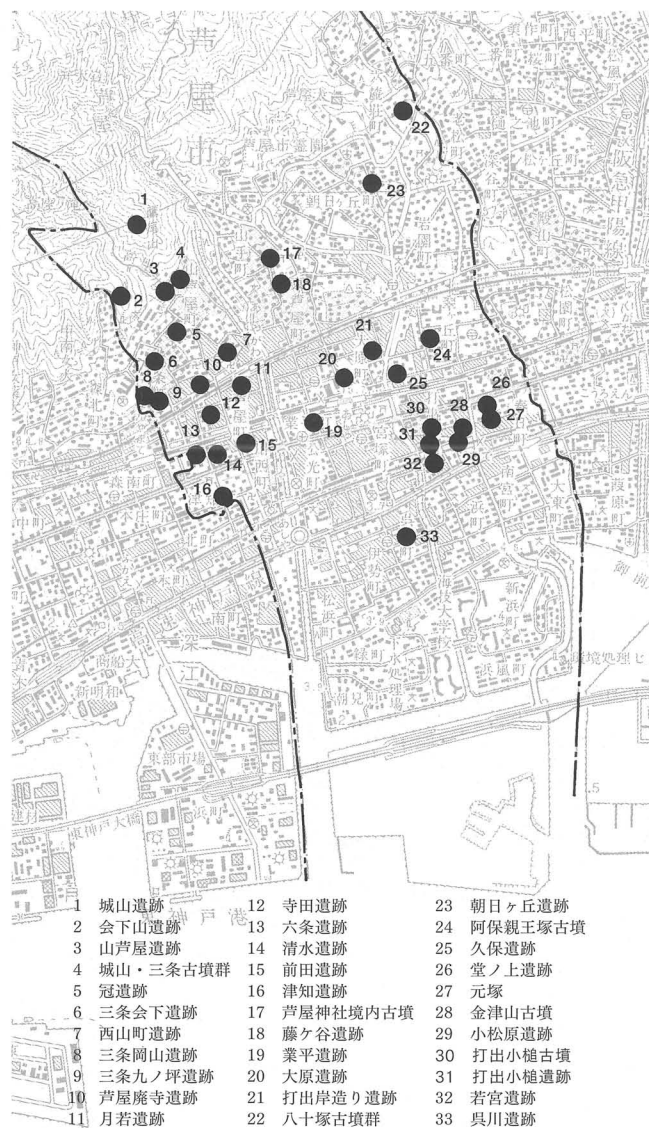
地および翠ヶ丘丘陵を中心に立地している〔武藤・有坂・末中・村川編1971・1976、大川・半澤1997・2005、第8集〕。その一方で、沖積扇状地に立地する津知遺跡においても、翼状剥片が出土している〔第46集〕。

縄文時代の遺跡は早期から晩期まで認められるが、その立地は山地および丘陵に立地するもの（山芦屋・朝日ヶ丘遺跡など）、扇状地に立地するもの（芦屋廃寺・月若・寺田・六条・前田・津知・業平・若宮遺跡など）に大きく分けられる〔武藤・有坂・末中・村川編1971・1976、芦屋市教委・関西大学1983、網干・米田・山口1985、浅岡編1993、吉田・金森2006、森岡・竹村・辻2000、渡辺編2003、第8・27・30・32・38・39・43・62・65集〕。

弥生時代に入ると、前期から中期前葉では、寺田・清水・前田・津知・若宮遺跡および金津山古墳下層など、比較的低地に立地している遺跡が目立つが、中期中葉から後期前半には、山地に立地し高地性集落として著名な会下山・城山遺跡や、丘陵に立地する山芦屋遺跡など、高所に分布が偏る傾向が認められる〔森岡・竹村1999、森岡・村川1996、岡野2001、森岡2001a、丸山2003〕。一方、月若・寺田・芦屋廃寺・業平・打出小槌遺跡などでも当該期の遺構・遺物が確認されているが、その数量は少ない。

後期後半になると、先に挙げた高地性集落は衰退し、それとは逆に芦屋川右岸の扇状地を中心に遺跡群が形成される〔森岡1999b〕。弥生時代の水田跡は、前田遺跡〔第52集〕や津知遺跡〔第34集〕で検出されており、扇状地縁辺部から沖積低地にかけて耕作地が形成されていたと推測される。若宮遺跡では、後期後半の土器棺や方形周溝墓が検出されている〔第38集〕。遺物では、江戸時代に堂ノ上から外縁付紐Ⅱ式銅鐸が見つかっている〔武藤・有坂・末中・村川編1976〕。

古墳時代では、芦屋川右岸遺跡群が引き続き居住域となっている。前期の集落跡は三条岡山遺跡〔第36集〕・三条会下遺跡など丘陵・台地上の遺跡において竪穴住居跡をはじめとする遺構や遺物が認められるものの、扇状地においては遺構・遺物量が減少する。中・後期には再び扇状地上で遺構・遺物が顕著に検出されている〔竹村2002、森岡2002a〕。また、中期から竈を造り付ける竪穴住居跡がみられるようになり、7世紀代には竪穴住居から掘立柱建物に移行している〔竹村・森岡1999〕。当時代の水田跡は、津知遺跡〔第34集〕や大原遺跡



第8図 芦屋市内主要遺跡分布図（1／50000）

〔渡辺1999〕などで検出されている。

古墳は阿保親王塚古墳（前期）、金津山古墳（中期）、打出小槌古墳（中期）などの大形古墳や駒塚古墳（後期）が翠ヶ丘丘陵上に分布している（第13図）。また、平成18（2006）年には三条岡山遺跡（第17地点）の確認調査で古墳の周溝の一部が検出され、そこから円筒埴輪片が数多く出土し、中期後葉（TK23型式前後）の須恵器が共伴した。後期には、業平遺跡において後期前半（MT15型式）の横穴式石室墳などが検出されている〔第62集〕。さらに、六甲山地南麓において、城山・三条



第9図 三条岡山遺跡（第17地点）で検出された古墳周溝と埴輪（西から）

古墳群や八十塚古墳群などの群集墳が形成される〔森岡1984、第33集〕。芦屋神社境内古墳も、本来、笠ヶ塚群集墳を構成していた横穴式石室である〔武藤・有坂・末中・村川編1976〕。遺物では、月若、寺田、三条岡山の諸遺跡で子持勾玉、白玉など滑石製模造品が出土している〔浅岡編1993、第26集〕。寺田遺跡や津知遺跡では、陶質土器が確認されている〔芦屋市教委1994、第32集〕。

古代令制下、芦屋市域は摂津国菟原郡域に含まれるが、古代においても引き続き芦屋廃寺・月若・寺田遺跡をはじめとする芦屋川右岸遺跡群に集落が営まれている。さらに、これらの遺跡から検出された遺構・遺物の中には官衙的色彩の強いものが目立ち、芦屋川右岸地域に寺院・郡衙・駅家が集中していたことが推測されている〔森岡1999a・2001b・2002a・2003a・2003b〕。例えば、白鳳文化期には芦屋廃寺が建立される〔寒川・森岡・竹村2001、森岡・竹村2006a、第7集〕。寺田遺跡では、「大領」「少領」の墨書をもつ須恵器が出土しており〔兵庫県歴博2002、森岡・竹村2005〕、菟原郡衙の所在地と推定されている。津知遺跡では平安時代前期の大型建物跡が検出されており〔第34集〕、隣接する深江北町遺跡（神戸市東灘区所在）では、「驛」の墨書土器が出土し、葦屋驛家の有力な候補地となっている〔山本編2002〕。その他、藤ヶ谷遺跡では、奈良時代の古墓が検出されている〔第48集〕。遺物では、三条九ノ坪遺跡で白雉3（652）年を示すと考えられる「三 壬子年」の紀年銘をもつ木簡が出土している〔高瀬編1997〕。芦屋廃寺遺跡では、「寺」の刻印をもつ鉄鉢形の須恵器が8点出土している〔芦屋市教委2001〕。月若遺跡と寺田遺跡、深江北町遺跡では、芦屋廃寺跡出土の創建期瓦と同型式の単弁八弁蓮華文軒丸瓦や複弁八弁蓮華軒丸瓦、均正忍冬唐草文軒平瓦が出土している〔山本編2002、第62集〕。

古代後半～中世では、やはり、芦屋廃寺・月若・寺田遺跡周辺が居住域となっているようであるが、六条・清水・前田・津知・船戸・打出小槌・若宮遺跡などでも掘立柱建物や井戸など、集落跡に伴う遺構が検出されており〔渡辺編2003、第37・38・41・46・49集〕、集落遺跡数は増加している。また、古代末以降には新たに耕作地が開発されており、三条岡山・冠・久保・打出小槌遺跡や若宮遺跡など、丘陵や沖積地に立地する遺跡でも犁痕などが多く検出されている〔佐藤1999〕。16世紀に入ると、摂津豊島の土豪、瓦林正頼が鷹尾山（通称、城山）に鷹尾城を築くが、その山麓部に分布する城山南麓遺跡では、同時期の建物跡や火葬墓などが確認されている〔森岡1985・1986d、竹村・辻2006、第65集〕。翠ヶ丘丘陵には、伝承墳が十数基分布している。その中の元塚は、発掘調査の結果、中近世に築造された塚であることが判明した〔第56集〕。

近世、幕藩体制下において、芦屋市全域は明和6（1796）年まで尼崎藩領であった。元和～寛永年間

前半期（1620年代）には、西宮市から神戸市東部に及ぶ六甲山地南麓の山地および丘陵部において徳川幕府による大坂城再築に伴う石垣用石材の採石場が経営される。この採石場跡は、現在、「徳川大坂城東六甲採石場跡」と呼称され、市内の採石場は、岩ヶ平・奥山・城山の3つの刻印群に細分されている〔藤川1979、第40集〕。山中や市街地には当時の採石跡や刻印石・矢穴石・割石などの関連石材が多数分布し、開発に伴う発掘調査が数多く実施されている〔第25・31・42・44・60・61・64集〕。また、山地から切り出された石材は浜辺まで運搬され、大坂城までは大阪湾を介して運ばれたが、搬出されずに残された石材が海浜部に位置する呉川遺跡で見つかり〔藤川1991、森岡・古川1992〕、近年、宮川河口付近や西蔵町でも石材が確認されている〔第60・61集〕。

近世後半から近代にかけての遺跡としては産業用水車場跡があり、現在、「芦屋川水車場跡」と呼称されている〔芦屋市教委2005c〕。また、月若遺跡の東部では、複数の竈が検出されている〔浅岡編1993、第27集〕。

以上、本市は市域が狭いながらも豊かな歴史的環境を有している。このような芦屋市を平成7（1995）年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災が襲い、甚大な被害を受けた。その後、復興事業が推し進められたが、埋蔵文化財では住宅の再建をはじめとする復興事業に伴い、震災復興調査が激増した〔芦屋市教委2005a・2005b・2006、兵庫県教委埋文事務所1996～2002、森岡・竹村2000b、『阪神・淡路大震災と埋蔵文化財』シンポ2001〕。（竹村）

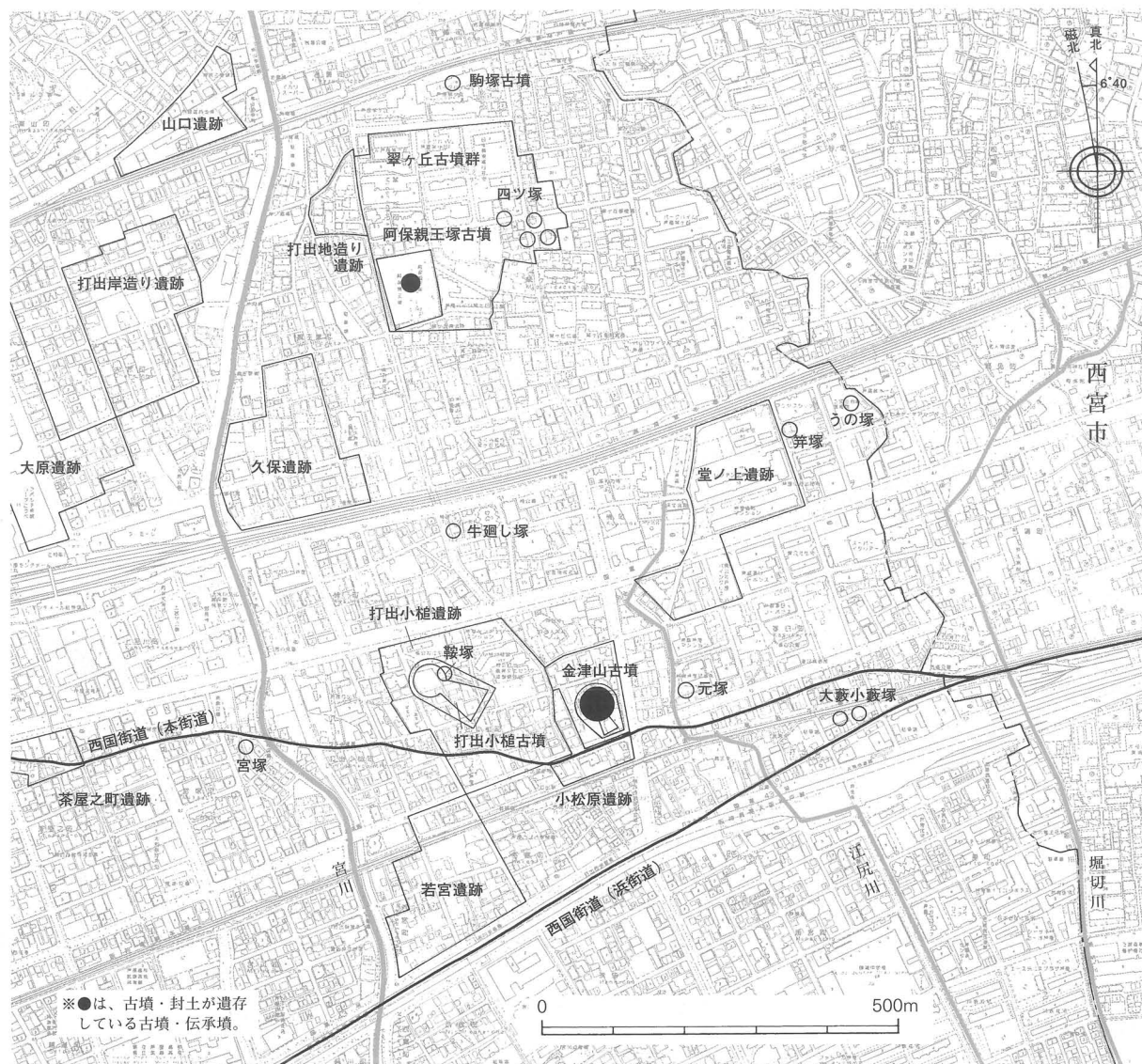
第2節 打出小槌遺跡の概要

今回、発掘調査を実施した打出小槌遺跡は、その名称が字名に由来しており、現在の打出小槌町に位置している。分布範囲は東西約220m、南北約230m、面積は約43700m²を測る（第10・11図）〔第40集〕。地形・地質的には六甲山地から南方へ派生した「翠ヶ丘丘陵」あるいは「翠ヶ丘台地」と呼称される中部更新統の大阪層群上部によって構成される丘陵の最先端部に位置しており〔辻・矢作・辻本・田中・パリノ2003〕、標高は約7.5～12mを測る。遺跡の西方約150～400mには、宮川が南流する。

本遺跡は、昭和61（1986）年に実施された試掘調査（第1地点）によってその存在が明らかとなった〔森岡・木許1986〕。さらに、引き続き行われた本発掘調査では中世までに墳丘が削平され、地上にその形跡をまったく留めていない打出小槌古墳の周濠が部分的に検出された。以後、平成19（2007）年1月31日現在までに登録された調査地点は、第1・2表および第11図に示したとおり、42地点を数える（本発掘調査、確認調査、工事立会、慎重工事を含む）。これら既往の調査によって、打出小槌遺跡が旧石器時代後期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかとなっている。

本遺跡の内容について時代を追って概観すると、本遺跡は低地に分布するにもかかわらず、旧石器時代後期の遺物が確認されている。その理由は、本遺跡が洪積丘陵上に立地しており、比較的浅い深度で当該期の洪積層に達するためである。第4地点では、洪積層層理面から国府型ナイフ形石器1点が多数のサヌカイト剥片とともに出土している〔芦屋市美博1991〕。第22地点では、国府型ナイフ形石器1点とサヌカイト剥片が出土している〔大川・半澤1997・2005〕。その他、第7・36・37地点でも、サヌカイト剥片が出土している〔第23集〕。

縄文時代では、第23・24・25地点の確認調査において縄文時代晩期の土器が数多く出土したが、調査地点の位置と遺跡の内容から打出小槌遺跡とは別遺跡とした方が良いと判断された。そこで、これらの



第10図 打出小槌遺跡周辺遺跡分布図 (1/10000)

地点は新遺跡として若宮遺跡（第1・2・3地点）となった〔第30・38集〕。

弥生時代では、第22地点において中期末～終末期の土器が自然流路から出土しており、古墳時代初頭の土器も認められる〔大川・半澤1997・2005〕。本書で報告するとおり、第41地点では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の粘土採掘坑と考えられる土坑群が検出されている。

古墳時代では、墳丘が削平された中期の大形前方後円墳である打出小槌古墳の存在が知られるが、当墳の概要については次節で別に記す。埴輪片が、第1・2・3・7・22・23・36・37・40・41地点で出土している〔大川・半澤1997・2005、森岡・辻2006、第23・30集〕。後期では、いくつかの地点で土器類が出土しているのみで、遺構・遺物ともにあまり目立たない。

古代では、第1・31地点の打出小槌古墳周濠の埋土や第22地点の自然流路の埋土から8～10世紀の土器類が出土している〔大川・半澤2005、森岡・辻2006〕。今回の調査地の東側に隣接する第36・37地点では、平安時代後期の柵列や柱穴、溝などが検出されている。その他の地点においても出土遺物の中で古代の土器が比較的目立ち、翠ヶ丘丘陵端部における耕作地開発のはじまりを示している可能性が高い。

中世では、本遺跡分布範囲の大半で、犁痕や人・牛の足跡など、耕作に伴う痕跡が認められる。この

段階には耕作地の開発が大規模に行われたようで、打出小槌古墳前方部の墳丘が15世紀後半～16世紀初頭に削平されていることが、第1・31地点の調査で明らかとなっている。第1地点では墳丘削平以降の礎石建物や池状遺構、溝などが検出されている。第2地点では、ため池状遺構が検出され、その埋土には埴輪片が多数包含されていた〔第23集〕。

周辺の遺跡としては、金津山古墳、小松原遺跡、若宮遺跡、堂ノ上遺跡が挙げられる（第8・10図）〔兵庫県教委2004、第40集〕。なお、打出小槌遺跡内には、西国街道（本街道）が走っていた（第10・12図）。西国街道は西宮市域で本街道と浜街道に分岐して芦屋市域を通過していたが、打出付近では本街道



第11図 打出小槌遺跡とその周辺遺跡の既往調査地点分布図（1／3000）

(2007年1月31日現在)

調査地点	所在地	調査種類	調査年	調査所見
第1地点	打出小槌町32番1・2・3・4	本発掘調査	1986	大形古墳の周濠が確認された。埴輪が多量に出土した。中世の礎石建物・池状遺構・溝が検出された。
第2地点	打出小槌町32番地10～13	確認調査	1988	中世のため池状遺構が検出された。埴輪が多数出土した。
第3地点	打出小槌町29番地	本発掘調査	1989	古墳周濠の肩部を確認した。埴輪が多量に出土した。
第4地点	打出小槌町29番地、27番地5	本発掘調査	1989	古代末～中世の耕作面が検出された。国府型ナイフ形石器が出土した。
第5地点	打出小槌町2番地	本発掘調査	1990	現地表下80cm以下に遺物包含層、基盤層上面で弥生時代の遺構が検出された。
第6地点	打出小槌町12番地、26番地3	工事立会	1990	現地表下2mまで掘削し、中世以前の水田層が確認された。
第9地点	打出小槌町34番地3	確認調査	1995	現地表下37cmまで確認した。すべて近現代の盛土層であった。
第11地点	打出小槌町32番地3、5	工事立会	1995	現地表下44cmで洪積層が検出された。近代の水田耕土のみ確認された。
第12地点	打出小槌町6番地8	工事立会	1995	黒赤色攪乱土下に近現代盛土層が確認された。
第13地点	打出小槌町28番地	工事立会	1995	現地表下90cmまで掘削し、近代耕作土・床土、基盤層が確認された。遺物の包含は確認されなかった。
第14地点	打出小槌町1番地	工事立会	1996・1997	現地表下3m近くの既設物撤去時に立会をした。翠ヶ丘丘陵洪積層との関係を中心に土層を観察した。
第15地点	打出小槌町34番地2	工事立会	1995	現地表下55～70cmで近代水田土壌が確認された。
第16地点	打出小槌町10番地	工事立会	1996	現地表下50cmまで掘削した。すべて近現代盛土層であった。
第17地点	打出小槌町28番地・28番地4	第2次確認調査	1995	現地表下約50cmで中世水田造成面が確認された。
第18地点	打出小槌町58番地8先～春日町126番地3先	確認調査	1996	道路面から2mまで掘削した。アスファルト下は基盤層もしくは攪乱であった。
第19地点	打出小槌町50番地2	工事立会	1996	すでに工事の掘方が埋まっていた。
第20地点	打出小槌町53番地	確認調査	1996	現地表下135cmまで掘削した。層厚20cmの近現代整地層の下は翠ヶ丘丘陵でよく見られる沖積層であった。
第21地点	打出小槌町141番地	工事立会	1996	アスファルト・バラス・黒色瓦礫層が確認された。基礎掘削が加わるのは、バラス層下部までである。
第22地点	打出小槌町49、51番地1～3	本発掘調査	1996・1997	自然流路が検出され、弥生時代中期～古墳時代後期の遺物が出土した。また、国府型ナイフ形石器が出土した。確認調査では埴輪片が1点出土している。
第23地点 (若宮遺跡第1地点)	若宮町60、62番地13	本発掘調査	1996・1997	2次にわたる確認調査を経て、本発掘調査を実施した。その際に、遺跡名および調査地点名が変更され、若宮遺跡(第1地点)となった。本発掘調査では、縄文時代晩期の自然流路、中世の耕作面が検出された。円筒埴輪が出土している。
第24地点 (若宮遺跡第2地点)	若宮町62番地1・7～9	本発掘調査	1997	本発掘調査の際に遺跡名および調査地点名が変更され、若宮遺跡(第2地点)となった。遺構面が6面検出された。縄文時代晩期の自然流路、弥生時代中期前葉の堅穴住居跡・土壇墓等、中世の耕作面が検出された。
第25地点 (若宮遺跡第3地点)	若宮町61番地他	本発掘調査	1997	本発掘調査の際に遺跡名および調査地点名が変更され、若宮遺跡(第3地点)となった。第1～4遺構面は中世以降の耕作面である。第4・5遺構面からは、縄文時代晩期後半の流路と土器群が検出された。
第26地点	打出小槌町102・103番地	確認調査	1997	現地表下37.5cmまで掘削した。盛土・表土のみ確認された。
第27地点	楠町57番地2	工事立会	1997	基礎工事中に立会をした。敷地西側に南北方向の中世溝が確認された。将来、この付近における開発において注意が必要である。
第28地点	打出小槌町34番地8	確認調査	1998	現地表下190cmまで掘削した。近現代水田耕土・洪積層が確認された。遺物は確認されなかった。

第1表 打出小槌遺跡調査地点一覧表(1)

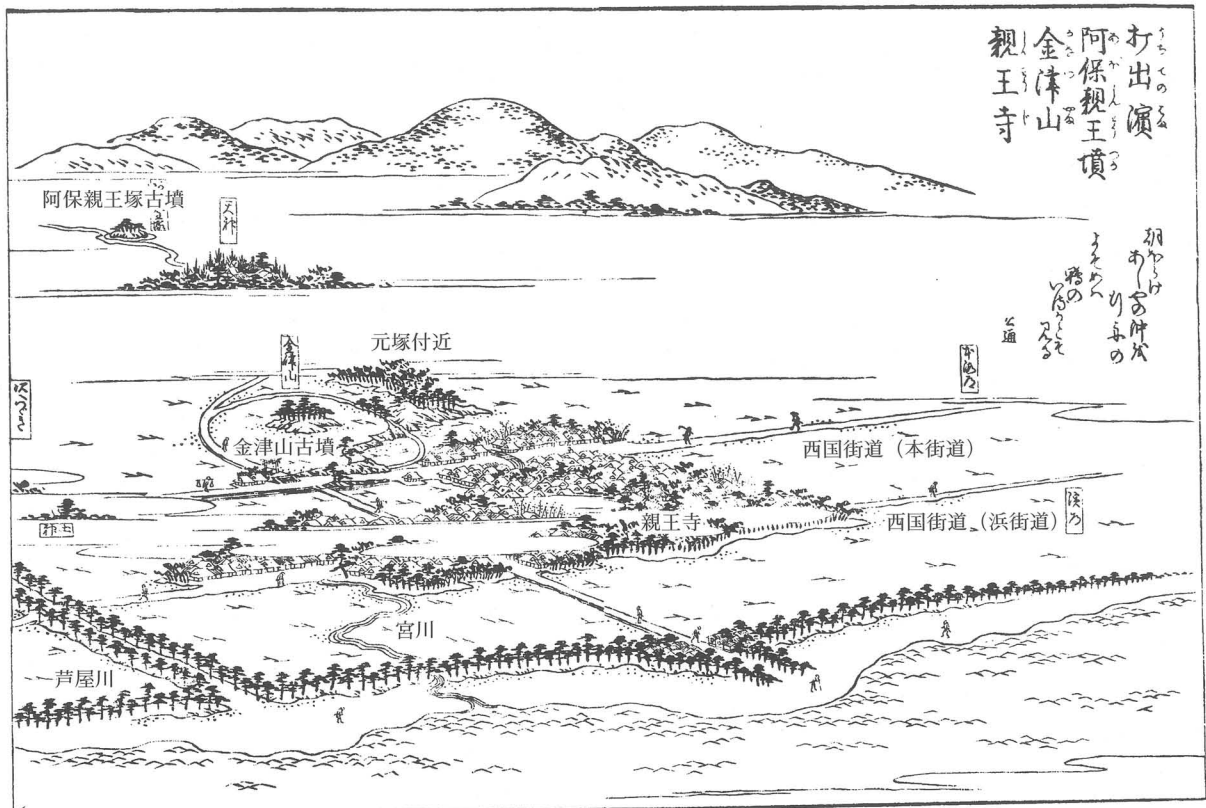
(2007年1月31日現在)

調査地点	所在地	調査種類	調査年	調査所見
第29地点	打出小槌町3番地2	確認調査	1998	現地表下50cmまで掘削し、黄色土が確認された。
第30地点	打出小槌町34番地1	工事立会	1998	地下車庫の工事掘削中に立会をした。深さ約1.5mを掘削中、黄色砂質土、灰色砂質土層、黄色粘土（大阪層群）が確認された。遺物・遺構は確認されなかった。大阪層群の深度は現地表下40cmである。
第31地点	打出小槌町32・33番地	本発掘調査	1999	2次の確認調査を経て、本発掘調査が実施された。打出小槌古墳前方部の周濠が検出され、多量の埴輪が出土した。
第32地点	打出小槌町127番地	確認調査	1999	現地表下80cmまで近現代の盛土であった。
第33地点	打出小槌町15番地17	確認調査	1999	最深確認深度は現地表下100cmを測る。現地表下80cmで遺物包含層が確認された。
第34地点	打出小槌町38-4	確認調査	2002	遺物包含層を2層、遺構面を2面確認した。現地表下10cmで中世遺物包含層、現地表下40cmで大阪層群を確認した。本発掘調査では、第36・37地点とした。
第35地点	打出小槌町127	確認調査	2002	現地表下154cmまで掘削した。現地表下87cmで褐灰色砂質土層が確認された。
第36地点	打出小槌町38-6	本発掘調査	2002～2003	第34地点として確認調査を実施した敷地を、第36・37地点として本発掘調査した。遺構面が4面確認された。その内、第1～第3遺構面は、中世の耕作面であり、唐犁痕が多数確認された。第4遺構面は、平安時代後期の遺構面であり、溝状遺構、柱穴跡および柵列が確認された。
第37地点	打出小槌町38-5			
第38地点	打出小槌町128	慎重工事	2003	自転車置場造り換え工事の際に念のため立会った。掘削深度現地表下20cm程度。盛土のみを確認した。
第39地点	打出小槌町38-4	慎重工事	2003	基礎掘削中に念のため立会った。現地表下20cmまでの掘削で、掘削が遺物包含層まで及んでいないことが確認された。
第40地点	打出小槌町34-3	確認調査	2004	現地表下143cmまで掘削し、最も浅い箇所では現地表下104cmで、遺物包含層（稀薄）が確認された。遺構面は耕作痕を伴うものが1面確認された。円筒埴輪片1点が表面採集された。
第41地点	打出小槌町39-1他	本発掘調査	2005～2006	今回の調査地点。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の粘土採掘土坑、中世以降の耕作面4面が検出された。埴輪が40片出土している。
第42地点	打出小槌町27番6	確認調査	2006	現地表下80cmまで掘削した。現地表下18cmで中世の稀薄な遺物包含層、46cmで大阪層群が確認された。
南東部周辺	打出小槌町9番地3号	工事立会	1988	近代の水田と洪積層の分布が確認された。
西部	打出小槌町50番地	工事立会	1989	翠ヶ丘台地西傾斜の変換部および稀薄な中世包含層が3層確認された。
南西部	打出小槌町193番地	工事立会	1993	現道路下4mまで掘削した。砂・粘土の互層堆積が確認された。遺物包含層は確認されなかった。
近接地	打出小槌町32番地2	工事立会	1994	現地表下40cm～80cmに遺物包含層が2層確認された。中世水田面が土層断面で確認された。
近接地	打出小槌町84番地5・6・7	工事立会	1994	現地表下1.5m程度まで掘削した。遺物の包含は確認されなかった。
近接地	打出小槌町74番地、73番地1	工事立会	1998	建築部分掘削の東断面を中心に土層観察。断面の高さは1.1～1.3mを測る。最下層に灰褐色粘土層、その上層に黄褐色粘土層が確認される。遺物は確認されなかった。中世に遡るものと推定される水田土壌が見られた。

第2表 打出小槌遺跡調査地点一覧表（2）

が昭和50年代に施行された春日土地区画整理事業によって消滅し、区画街路である鳴尾御影線に姿を変えている〔山本・久下編1992、第9集〕。一方の浜街道も国道43号線の建設によって昭和30年代に消滅しており、その面影はまったく見当たらない。

(竹村)



第12図 『摂津名所図会』にみえる江戸時代の打出地域（寛政8〔1796〕年刊行、〔臨川書店1996〕に加筆。）

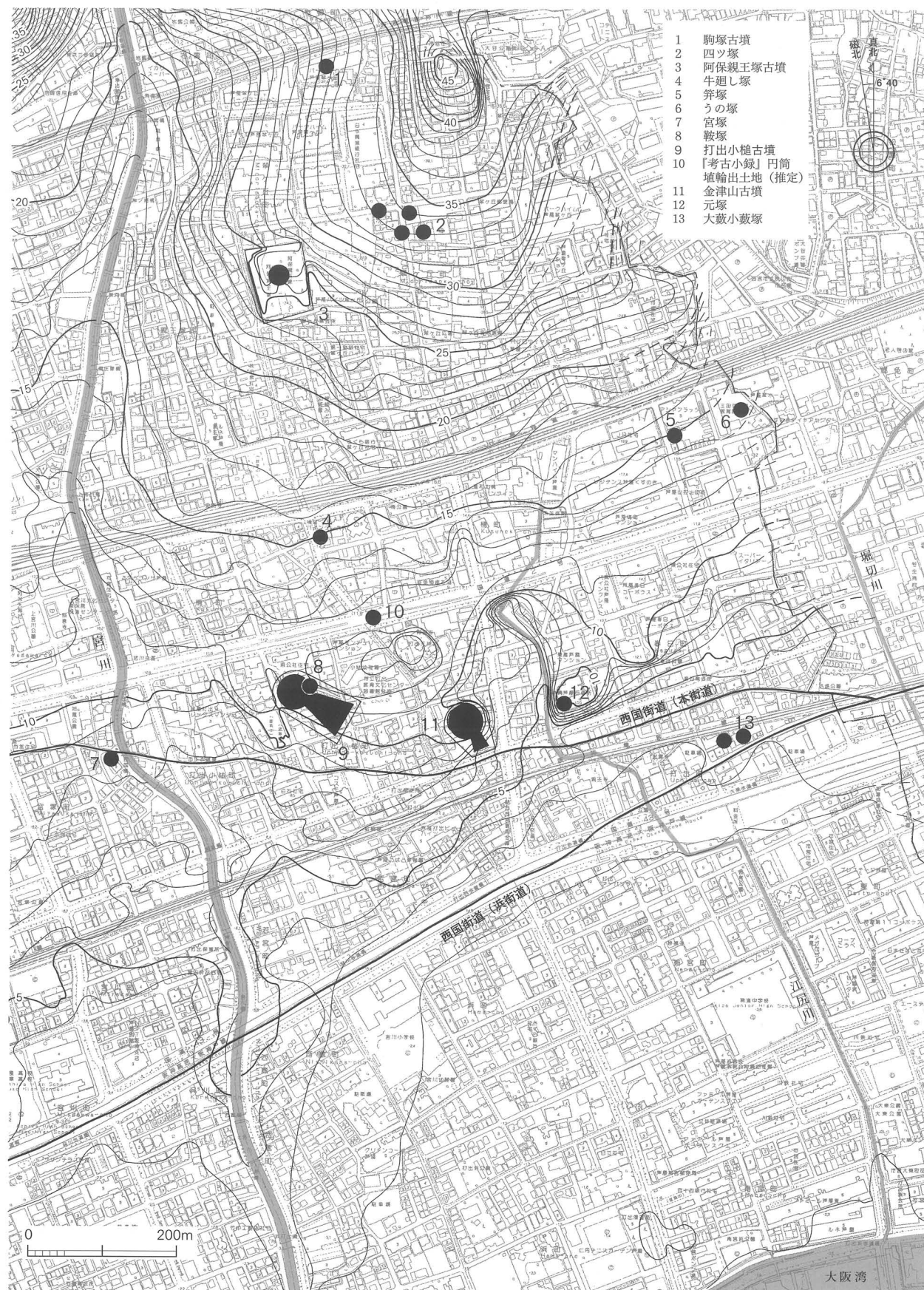
第3節 打出小槌古墳の概要

打出小槌古墳は、打出小槌遺跡内に分布する古墳時代中期の大形前方後円墳で、翠ヶ丘古墳群を構成する一古墳である。

本墳以外に翠ヶ丘古墳群を構成する大型古墳としては、複数の三角縁神獣鏡が出土した阿保親王塚古墳（4世紀前半）、全長55mの帆立貝形の前円後円墳である金津山古墳（5世紀後半）がある。

これら大型古墳以外に、四ツ塚・駒塚・うの塚・笄塚・鞍塚・牛廻し塚・大藪小藪塚・元塚・宮塚等の塚名の伝承がある。これらの大半は発掘調査されることなく消滅してしまったが、笄塚と元塚は発掘調査によって中近世に築造された塚であることが判明している〔森岡1986c、第46集〕。また、明治時代に墳丘が削平されてしまった駒塚古墳は、石室図から横穴式石室と推定されている。辰馬考古資料館が所蔵している出土遺物には、金環・管玉・切子玉・勾玉・粟玉などが含まれている〔武藤・有坂・末中・村川編1976〕。同じく墳丘が削平され、地上にその形跡を留めないものとして四ツ塚がある。これはその名の通り、複数の古墳などから構成されていたようであり、その推定位置付近から古墳時代後期の須恵器が出土していることから、当該期の古墳が含まれていると考えられる。なお、四ツ塚出土の遺物とされるものとして他に、石製帯飾具があることから〔武藤・有坂・末中・村川編1971、森岡2003〕、古代古墓が含まれていた可能性が高い。なお、鞍塚の位置は、打出小槌古墳の推定墳域内にあたり、ちょうど今回の調査地の南側隣地に所在する。

ところで、紅野芳雄氏は『考古小録』の中で、大正14（1925）年11月2日に「午後打出工營所出張所にて知人朝日を訪ねて出土状態を聞くに、場所は打出天神社の西北約十間、打出より岩ヶ平へ通する道



第13図 宮川中・下流部左岸域微地形復元および塚・古墳分布図 (1/7500)



第14図 打出小槌遺跡（第31地点）前方部周濠
渡り堤検出状況（北から）



第15図 打出小槌遺跡（第31地点）周濠内遺物出土状況
（東から）

の東側にて国道工事中外に何物も伴わず出たる由なり。八箇の破片中四箇までは圓筒の底部なると、従来此の地に古墳の封土らしきものなかりしより想像すれば、かつて圓筒を有する古墳ありたるもいつの世にか破壊され封土の取去られたる時圓筒の一部分が土中に残りそれが今回土工の為出土したるものなるべし。」と記載している〔紅野1940〕。これらの円筒埴輪片は戦災で消

滅してしまったため詳細が不明であるが、出土位置からすると打出小槌古墳に伴うものとは考えがたい。

打出小槌古墳は、第1地点の本発掘調査によって周濠の一部が検出され、墳丘を削平された中期の古墳が存在していることが明らかとなった。また、墳丘は15世紀後半～16世紀初頭に完全に削平されていることが確認された。その後、第3地点において周濠の南端変換部が確認され、一辺35m前後の方墳と推定された〔森岡1992a・1993〕。

しかし、平成11（1999）年に実施された第31地点の発掘調査において周濠の一部が検出され、推定全長約90mクラスの大形前方後円墳に復元し直された（第10・11・13図）〔森岡・辻2006〕。また、その周濠は、盾形を呈する可能性が判明した。周濠内では、渡り堤が検出された（第14図）。

第1・31地点では、周濠から普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪が大量に出土しており、それらから本墳の築造年代は5世紀後半～末に推定されている。また、家・器材・人物・動物などの形象埴輪も確認されている（第15図）。なお、本墳に伴う須恵器はTK47型式前後のものが比較的多い〔森岡・辻2006〕。

周濠内埋土の観察からは、打出小槌古墳の損壊過程が明らかとなっている。具体的には、8～9世紀には古墳周辺において埴輪列などの破壊行為が行われ、15～16世紀には墳丘および周濠が耕作土層の形成に伴って大きく改変されたと考えられる。

以上のように、打出小槌古墳は、5世紀後半～末に築造された盾形周濠をもつ全長80～90mクラスの大形前方後円墳と推定されている。今回の調査地点付近は、〔森岡・辻2006〕の墳形推定図において、後円部の周濠付近に位置していたことから、調査前に打出小槌古墳の一部が検出されることが予測された。しかし、調査区では、周濠や墳丘など古墳と関連する遺構はまったく確認されなかった。（竹村）

第3章 発掘調査の成果

第1節 本発掘調査の方法

当該地で計画された建築計画は、工事による掘削範囲の幅や深さが一律ではなかった。そこで、確認調査ならびに本発掘調査では、梁や地下構造物の設置に伴う掘削によって埋蔵文化財が損壊を被る範囲に限って調査区を設定した。また、建設工事による掘削深度が、設計G L -0.55m～-3.75mと深浅差があったので、それぞれの地区ごとにこの掘削深度を掘削限界とし、これよりも浅い位置で明確な基盤層が検出された場合には、基盤層検出レベルをその地区の最終掘削レベルとした。

調査区設定に先立ち、事業者側で建築図面に即して縄張りを行い、工事により掘削を被る範囲やその深度についての詳細な図面の提供を受けた上で、地区割りを行った。なお、当該地には2棟の既存建物が存在しており、この建物の基礎によって北部と南部に大きな攪乱を被っていたが、これらの攪乱部分でも地中梁部分の掘削深度が攪乱深度よりも深い部分については、地中梁部分に加えて梁間も調査対象とした。この結果、本発掘調査面積は、832.49㎡となった。

設計図面は、直交するXラインとYラインを用いて主要な地中梁の位置を表現しているので、調査区についてもこの表記を踏襲して位置を表現する。東西方向の主要な梁は、北から順に、Y5ライン、Y3ライン、Y1ライン、Y0ラインである。一方、南北方向の主要な梁は、西から順にX1ライン、X2ライン…X9ラインである。ただし、Xライン、Yラインは座標軸ではないので、各ラインの間隔は不均等である。

また、調査前の現況や作業の段取りから、調査区内は、「東区」・「西区」・「南区」・「北区」の4つに大別している。Y5ライン—2トレンチ間は、X5ライン—X4ライン間をほぼ南北に走る段差を境に、東側を「東区」、西側を「西区」とした。Y5ラインより北側の攪乱部分を中心とする部分を「北区」、2トレンチより南側の攪乱部分を中心とする部分を「南区」とした。ただし、南区については、他の地区と異なり、梁と梁の間に島状に掘り残した部分を、東から順に「A区」、「B区」…「I区」と呼称することで、その位置を示した(第16図)。

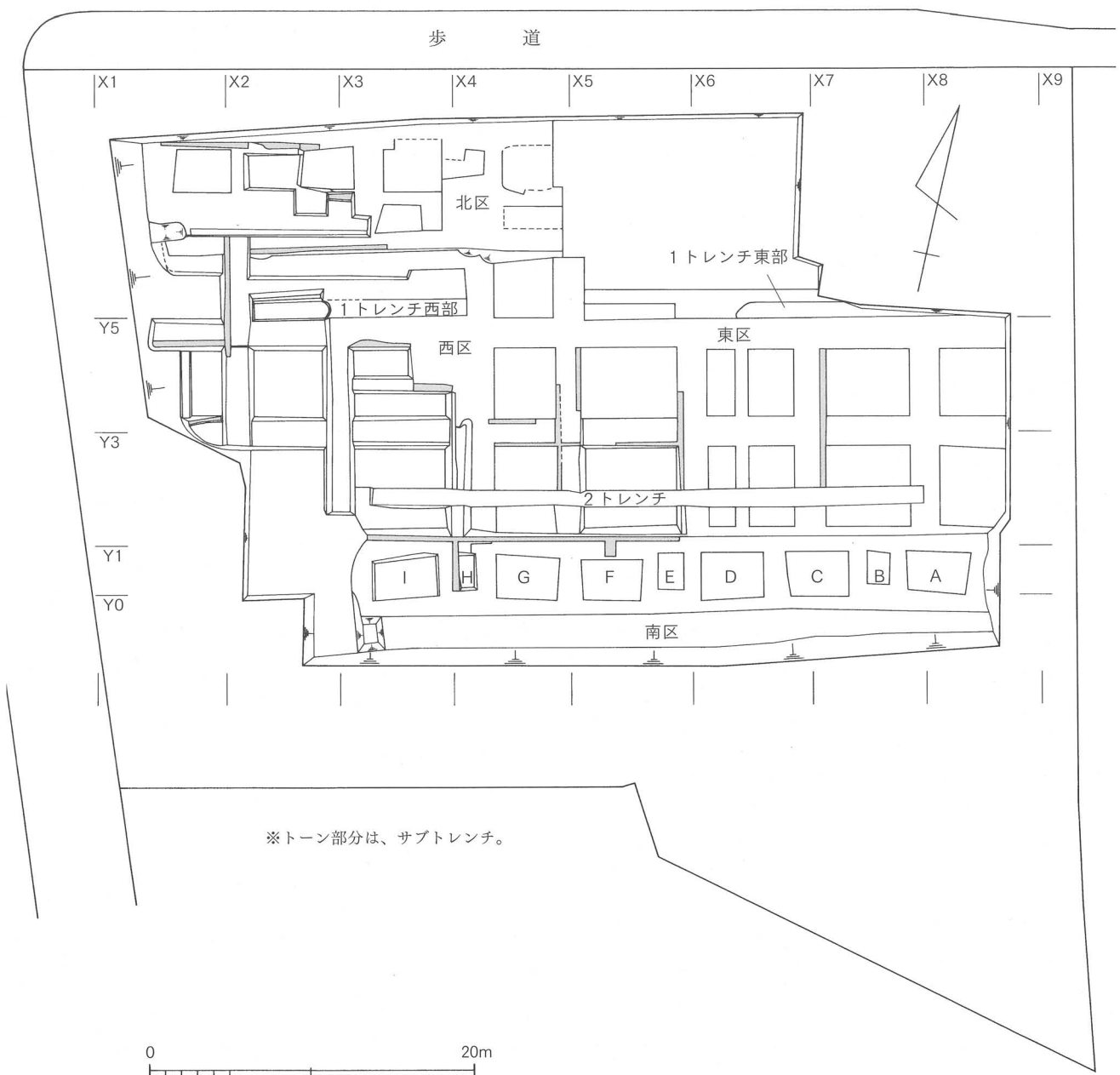
当該地は、確認調査によって、近代の地表面の上に安定の悪い盛土を厚く積んでおり、包含層や遺構面は近代の地表面よりさらに下位に遺存していることを把握していたので、現表土と盛土を重機掘削し、排土は場外に搬出した。重機掘削の際、掘削深度を考慮すると調査区の壁面の安全が保てないと判断したので、重機掘削は調査区のみに限るのではなく、調査区外となる梁間部分も対象とし、重機掘削後に、厳密な調査区を設定した。盛土除去後の掘削はすべて人力で行い、排土は東区・西区の梁間に島状に掘り残した部分や、北区や南区の攪乱によってすでに基盤層が露出している部分に仮置きした。調査完了時には埋め戻しは行わなかったが、建築工事に先立つ埋め戻し時に立会い、排土を検出面に敷いて保護層とすることで残存している埋蔵文化財を保護しながら重機を自走させることを事業者側と確認した。

記録は、写真を35mm白黒・カラーポジの2種類のフィルムを用いて撮影するとともに、デジタルカメラによる撮影も行った。実測図は、光波測距器を用いて調査区平面図を縮尺1/100で、遺構平面図を縮尺1/20で、土層断面図を縮尺1/20で作成した。ところで、設計G Lが設計図面では標高50.00mと仮定されていたが、当該地西側道路の仮設ポイント(T.P.10.68m)を基にして設定されているので、

実際にはT.P.12.48mである。そこで、本報告書ではT.P.値に統一して表記している。ちなみに、当該地の地表面レベルがこの設計G.L.とほぼ一致している。

なお、Y6ラインより北側とY0ラインより南側、X1ラインより西側とX9ライン付近は、隣地境界に近接するため、安全面に配慮して調査の対象から外し、建築工事時に立会を行った。（白谷）

国道2号線



第16図 調査区配置図（1／400）

第2節 基本土層

確認調査では、2トレンチ北壁で確認した土層を基本層序とし、現表土である近代盛土を除いて、上から順に土層番号を付した。色調や土質に若干の違いが観察されたものは、土層番号にアルファベットの小文字を付けて細分、表示した。本発掘調査でも、原則的に確認調査時の基本層序の土層番号を踏襲し、基本層序と同一のものについては、基本層序の土層番号をそのまま用いたので、ここでは、基本層序を示す土層断面図として、2トレンチ北壁土層断面図（第17図、図版3）を提示する。なお、ブロックや遺構埋土は○囲いの数字で表示した。その後、本発掘調査で新たに確認された土層や、より細分化できた土層、遺構埋土等は、基本層序の土層番号表記とは区別して、それぞれの土層断面図ごとに○囲いの数字で表示し、基本層序との対応の明らかなものは、その対応関係を明記している。なお、土色は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）に依った。

基本層序は、現代盛土層の下に、上から順に、1層（近世以降の耕作土構成層）、2層（中世の耕作土）、3層（砂礫層）、4層（当該地南西部を中心に分布する5層上に堆積した土壌層）、5層（当該地南西部を中心に分布する砂混じりシルト質粘土）、6層（大阪層群を母材とする二次堆積層）である。

現代盛土層は、本発掘調査時にはほとんどが除去されていたが、灰色砂質土を主体とするもので、瓦礫や塩び管の他に、昭和20年の空襲によると見られる焼土や炭化物を含んでいた。この層の上面、即ち本発掘調査前の現地表面はほとんど水平であったが、盛土層は東側が薄く、西側が厚くなっていたため、この盛土層を除去すると、北東から南西に雛壇状に下る旧地形が確認できた。

1層は、にぶい黄灰色や灰黄褐色のシルト質細砂～中砂で、炭化物を含む耕作土である。この層の上面が近代の地表面に相当する。層厚は0.2～0.6mを測る。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦・石器・鉄製品と多彩で、近世の遺物を相当量含む。上層（1a層）と下層（1b層）に細分した。

2層は、灰色中砂混じり粘性シルトで、3mm以下の白色砂粒を含む。層厚は約0.1mである。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器・埴輪・瓦・土製品で、その主たる帰属年代は古代後半から中世前半である。近世に下るものが乏しいので、中世の耕作土と考えられる。

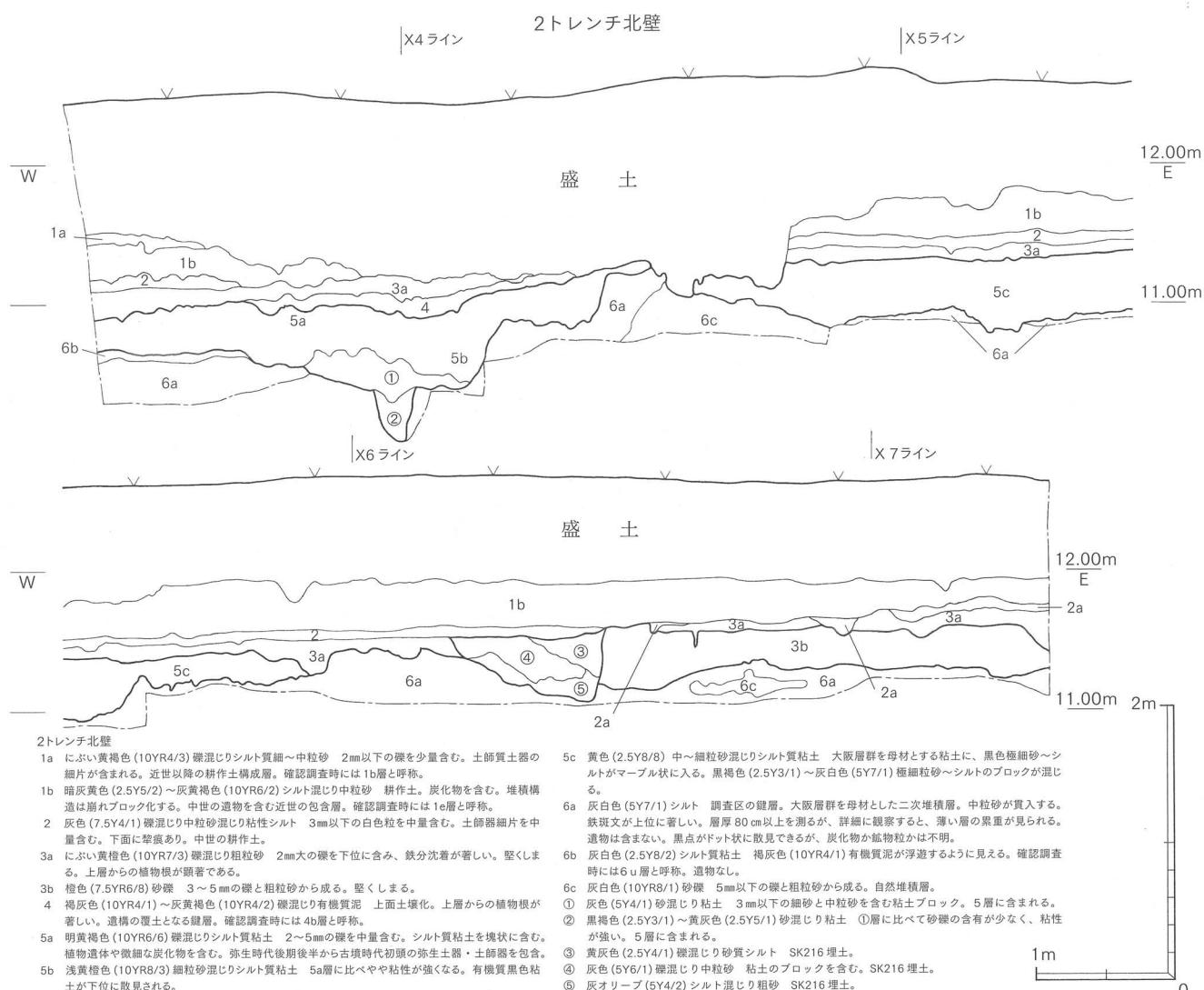
3層は、調査区全体を覆うにぶい黄橙色礫混じり粗砂層である。6層起源の再堆積層と考えられる。粗砂を主体とし、堅くしめる。上層からの植物根が顕著である。調査区西部は層厚が0.1～0.2mであるが、調査区東部で6層直上に3層が見られる部分では層厚が0.4～0.5mを測り、上下2層（3a・3b層）に細分できる。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪で、概ね古代末期を下限とする。ただし、東部で確認された3b層からの遺物の出土は認められなかった。

4層は、褐灰色～灰黄褐色粗砂混じり粘土を主体とする層で、有機質の含有が多い。湿地状を呈していたと考えられる5層上面の覆土と推定する。層厚は0.1mほどで、この層の下面に犁痕や足跡が検出できるので、耕作土であったと考えられる。出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪で、概ね古代末期を下限とする。なお、調査区西部では、4層に類似する土層が複数枚見られた。

5層は、2～5mmの砂礫とシルト質粘土が混じった6層起源の層で、植物遺体や微細な炭化物を包含する。5層は、一見人為的に攪拌されたように見える不均質な層であるが、つぶさに観察すると、俵や土囊の様に明確ではないものの、砂層を主体とする部分や粘土やシルトを主体とする単位に細分できる

ので、水田耕作土のように均等に攪拌したと言うよりも、掘り起こしたまま放置されていた残土が徐々に流入することによって成立した再堆積土と考えられる。2トレンチでは、5層として、明黄褐色から浅黄橙色を呈する5a・5b層と、黄色土に黒褐色土や黒色土が混在する5c層が確認できた。5a層と5b層は土質が漸次変化する。5c層は有機質を含む黒色極細砂やシルトがマープル状に混じった層である。さらに、5層に相当するものとして、有機質の含有が多く黄灰色や黄褐色を呈する土層も確認された（第32図南区北壁②4層など）。これらの有機質は、植物遺体や6層中に含まれる有機質黒色粘土に由来すると推測される。なお、5層は6層を掘り起こしたものが再堆積したと考えられるので、5層の分布範囲即ち6層を掘開した範囲をS X501と呼称する。ただし、S X501は一挙に掘られたものではなく、一定の範囲に小規模な土坑を繰り返し掘り続けた土坑群と言うべき性格を有するものであろう。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の弥生土器・土師器に限られており、須恵器や埴輪は検出されなかった。

6層は、灰白色のシルトや粘土、砂礫、砂等で構成された自然堆積層で、ラミナが観察できる。全体にしまりがよく、非常に安定していることから、当該地の基盤層と判断した。ただし、6層中には、有機質黒色粘土（第32図北区南壁⑦層・南区北壁⑱層など）が帯状に堆積している部分があるため、6層を典型的な大阪層群と見ることはできない。よって、6層は、大阪層群が再堆積することで成立した二次堆積層と考える。（白谷）

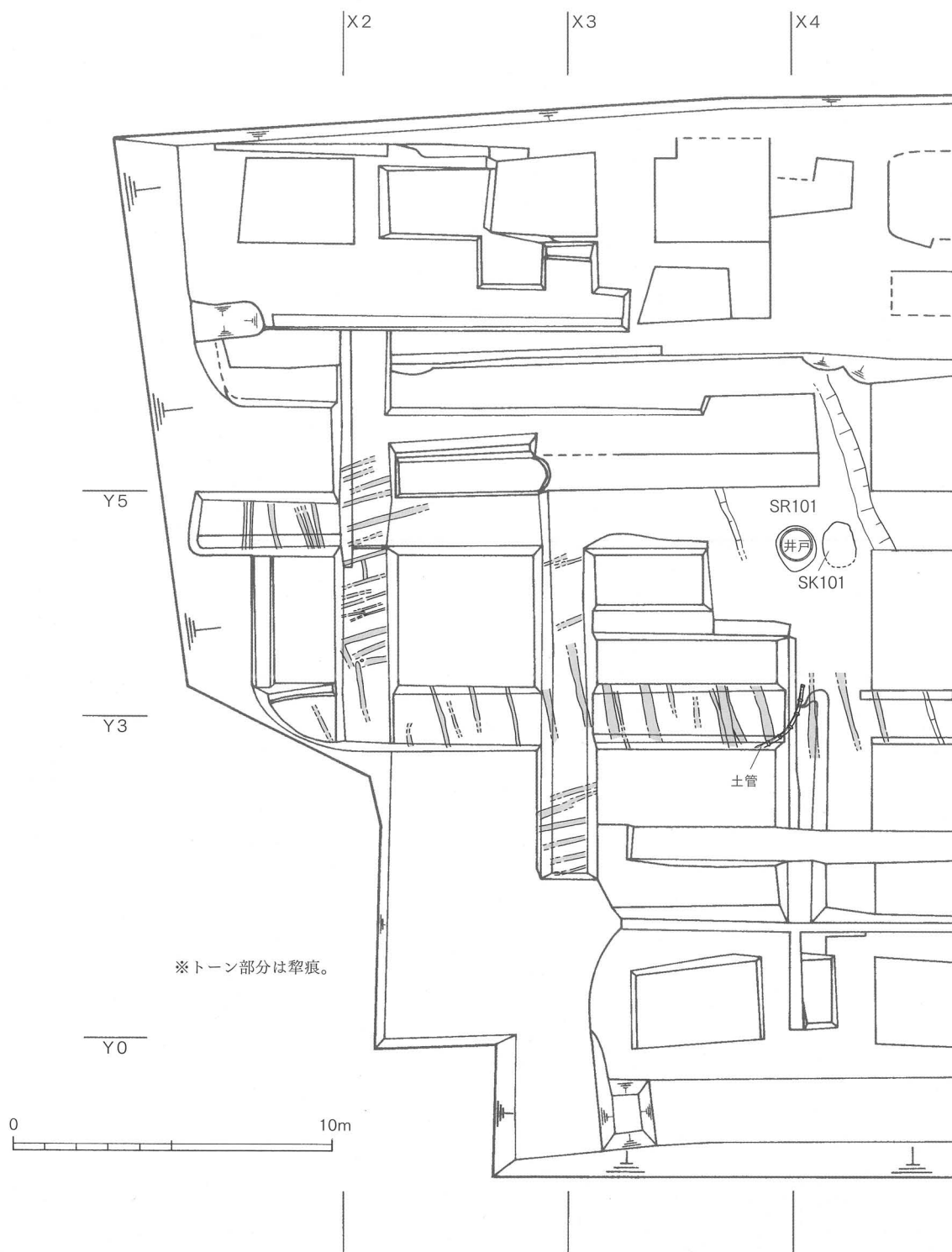


第17図 2トレンチ北壁土層断面図（垂直方向1/50・水平方向1/100）

第3節 遺構

(1) 第1遺構面（第18・19図、図版6・7）

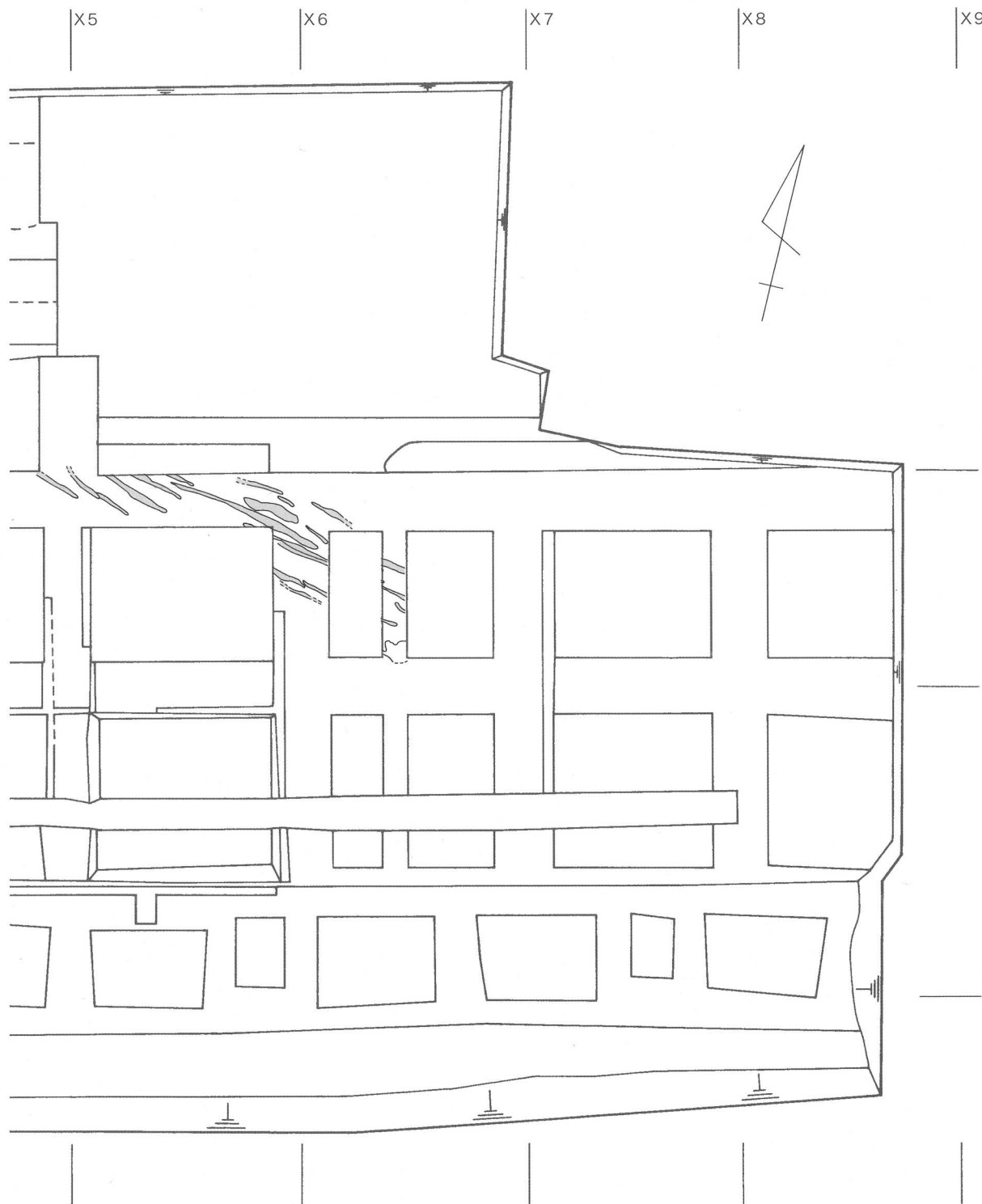
第1遺構面は、東区と西区および北区南端において、1層下面で検出した遺構面で、遺構面のベースは概ね2層である。ただし、傾斜地のため、遺構面レベルは東区が西区より高くなっており、東区と西

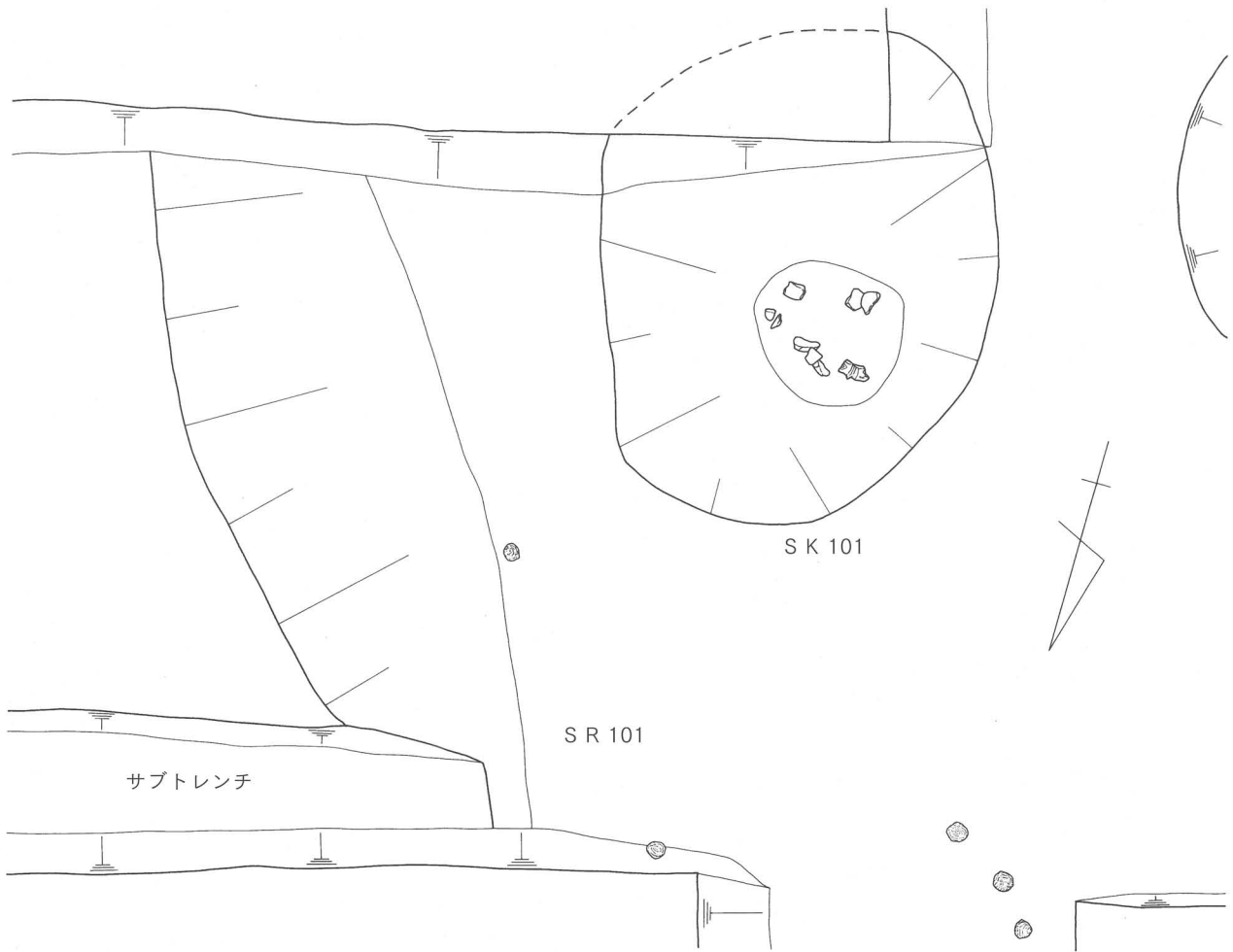


第18図 第1遺構面遺構配置図（1／200）

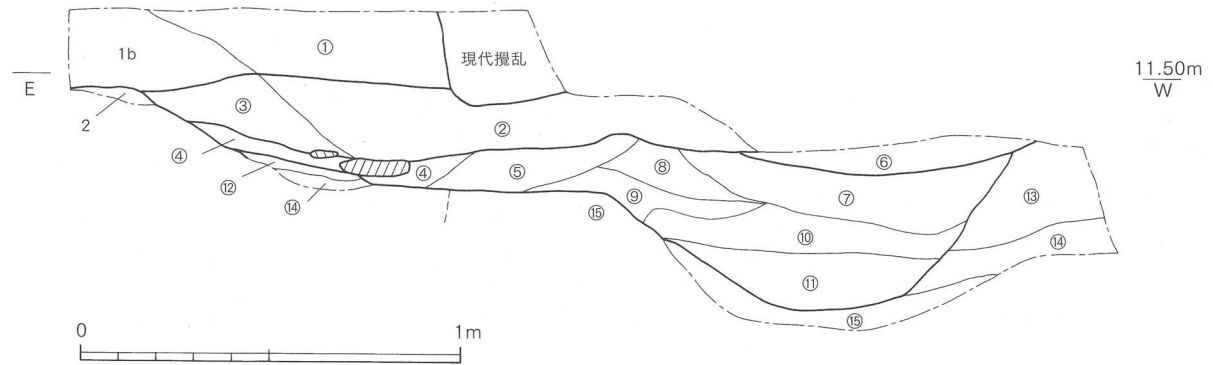
区の境には比高差0.3m程度の段差がある。昭和7年の地形図〔清水編1995〕には、当該地のほぼ中央を南北に走る段差が描かれており、まさしくこの段差に相当すると考えられる。また、東区の遺構面検出レベルは、北東部が約11.9m、北西部が約11.7mで東から西に緩傾斜している。一方、西区の遺構面検出レベルは、概ね11.3～11.4mで平坦である。

第1遺構面で検出した遺構は、土坑2基、流路1条と多数の犁痕である（第18・19図、図版6・7）。この内、特徴的な遺構として、土坑1基（S K101）と流路、犁痕について記述する。





Y5ライン、X4ライン交点付近南壁



Y5ライン、X4ライン交点付近南壁（1・2層は基本土層と一致）

- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)～灰黄褐色(10YR6/2)シルト混じり粗粒砂 耕作土。1b層より粗砂多く、下位の水流層や流水の影響を受けている。近世以降の耕作土構成層。
- ② にぶい黄褐色(10YR7/2)～灰黄褐色(10YR5/2)細砂～粗砂 水成層。SR101埋土。
- ③ 褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 水成層の土壌化部分。SR101埋土。
- ④ 灰黄褐色(10YR6/2)～にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト～中砂 水成層。SR201埋土。
- ⑤ 褐灰色(10YR5/1)シルト混じり中砂～細砂 水成層の土壌化部分。互質土器を含む。SR201埋土。
- ⑥ 黒褐色(10YR1/3)粘性砂質土 水成層の土壌化部分。SK101埋土。
- ⑦ 褐灰色(10YR6/1)～灰黄褐色(10YR6/2)細砂 水成層。SR201埋土。⑬層起源のブロックを含む。
- ⑧ 灰白色(10YR7/1)～褐灰色(10YR6/1)細砂 ラミナが見られる水成層。⑨層の土壌化部分。SR201埋土。

- ⑨ 灰白色(10YR8/1～10YR7/1)細砂 ラミナが見られる水成層。SR201埋土。
- ⑩ 褐灰色(10YR6/1～10YR5/1)細砂～中砂 ラミナが見られる水成層。有機質を含みやや土壌化。SR102埋土ないしSK503の最終埋土。
- ⑪ 灰白色(5Y8/1)～黄褐色(10YR7/8)粘土+灰白色(2.5Y8/1～2.5Y7/1)砂 ⑭層と⑯層の混成土。SK503埋土。
- ⑫ 灰白色(10YR8/1)中砂 堅くしめる。6層に相当。
- ⑬ にぶい黄褐色(10YR7/2)～明黄褐色(10YR6/6)中砂 堅くしめる。6層に相当。
- ⑭ 灰白色(5Y8/1)～黄褐色(10YR7/8)粘土 6層に相当。
- ⑮ 灰白色(2.5Y8/1～2.5Y7/1)砂 鉄分沈着で橙色を呈する部分もある。ラミナが見られる。6層に相当。

第19図 Y5ライン、X4ライン交点付近第1遺構面遺構平面図（1/20）
ならびにY5ライン、X4ライン交点付近南壁土層断面図（1/20）

S K101は、X 4ラインとY 5ラインの交点付近に検出した遺構で、一部未掘部分に広がっているため全容は不明であるが、長軸1.3m程度のほぼ楕円形の遺構と考えられる（第19図、図版6）。S K101の直上に水成層（第19図②・③層）が堆積しており、S K101の成立後に、この部分に流路（S R101）が走っていたことがわかった。S K101の断面形は浅い皿状で、深さは0.2mを測る。S K101の下には、さらに先行する流路（S R201）とS K503が位置しており、S K101がS R201を切り込んで構築されたことがわかる。S K101の埋土は有機質を含む黒褐色粘性砂質土（第19図⑥層）で、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦が出土している。江戸時代の陶磁器が主体であり、S K101は江戸時代後期以降の遺構と判断した。なお、当該期の施釉陶器の灯明皿1点（第40図79）を図示している。

S K101を切るS R101は、西肩部が1層に伴う耕作の影響で不明瞭なので、ひとまずS R201の西肩部と同じ位置と想定した（第18図・図版6）。また、延長部分に当たるY 3ライン並びに北区では、1層の影響や近現代の攪乱を被っているので、S R101のY 5ラインにおける検出幅は約5.2m、残存長は約5.3mである。S R101の東岸は断面が逆台形を呈しており、底面はほぼ水平である。東岸上端の検出レベルは11.52m、下端のレベルは11.28mなので、深さは0.24mを測る。埋土はにぶい黄橙色～灰黄褐色の粗砂～細砂（第19図②・③層）で、明らかな水成層である。S R101は北北西—南南東（N33° W）方向を指向していたようである。出土遺物は、土師器・須恵器・埴輪・瓦質土器・陶器・瓦で、中世の備前焼や丹波焼も見られる（第40図80・81）が、最も新しい遺物は近世後半に下る。S K101との切り合い関係や昭和7年の地形図に見られる段差から、S R101は江戸時代後期から近代にかけての流路と捉えたい。S R101の範囲には、直径5 cm程度の杭が所々に残存していた。流路の東肩部に見られる杭もあるが、流路内に設置されているものもあり、その多くがS R101に伴うものと考えられる。

第1遺構面で最も検出数の多い遺構は犁痕である。これらは、幅約10～20cm、深さ5 cm程度の溝状のもので、埋土はいずれも1層の暗灰黄色～灰黄褐色シルト混じり中粒砂である（第18図・図版7）。犁痕は、東区ではほぼ東西方向を指向しているのに対して、西区ではY 3ラインを中心に北北西—南南東を指向するものと、X 2ラインやX 3ラインを中心にそれより下位に、東北東—西南西を指向するものが検出された。これらの内、西区の北北西—南南東を指向するものが、S R101の走行方向と概ね合致している。しかし、これらの犁痕を有する水田に直接関わる畦畔は確認できなかった。遺物は、弥生土器ないし土師器の細片や瓦質土器片、陶器片、磁器片が少量見られる（第40図77・78）。ただし、明らかに近世以後のものを含んでいるので、これらの犁痕は、近世以後の耕作痕と捉えておく。

ところで、当該地のすぐ東隣で平成14年度に実施した発掘調査（第36・37地点）では、合計3面の耕作面が確認されている。ここで検出した犁痕は、上から2面が南北方向を、最下面のみが東西方向を指向していた。これらの犁痕の方向を第1遺構面検出の犁痕の方向と比較すると、上位で検出された犁痕が西区のY 3ラインを中心とする犁痕と、下位で検出された犁痕が東区や西区のX 2ライン・X 3ラインを中心とする犁痕と共通点を見出せる。今回の調査区ではすべて同一の遺構面として扱っているが、前者が比較的新しい段階の耕作痕であり、後者がより古い段階の耕作痕である可能性が指摘できるので、第36・37地点と同様の犁痕の方向変化があったと考えられる。ただし、東区と西区では東西方向とは言っても、犁痕の方向は30度ほど異なるので、耕作面の段差ないし時期差を認めることができる。

以上のように、第1遺構面で検出した遺構は、いずれも近世以後のものと言える。犁痕とS R101は、耕作に伴う遺構と言える。また、S K101は流路部分に掘り込まれた土坑であり、有機質を含む埋土の様子から、耕作地に設けられた溜井の痕跡と考えることもできよう。（白谷）

(2) 第2遺構面(第20～22図、図版8・9)

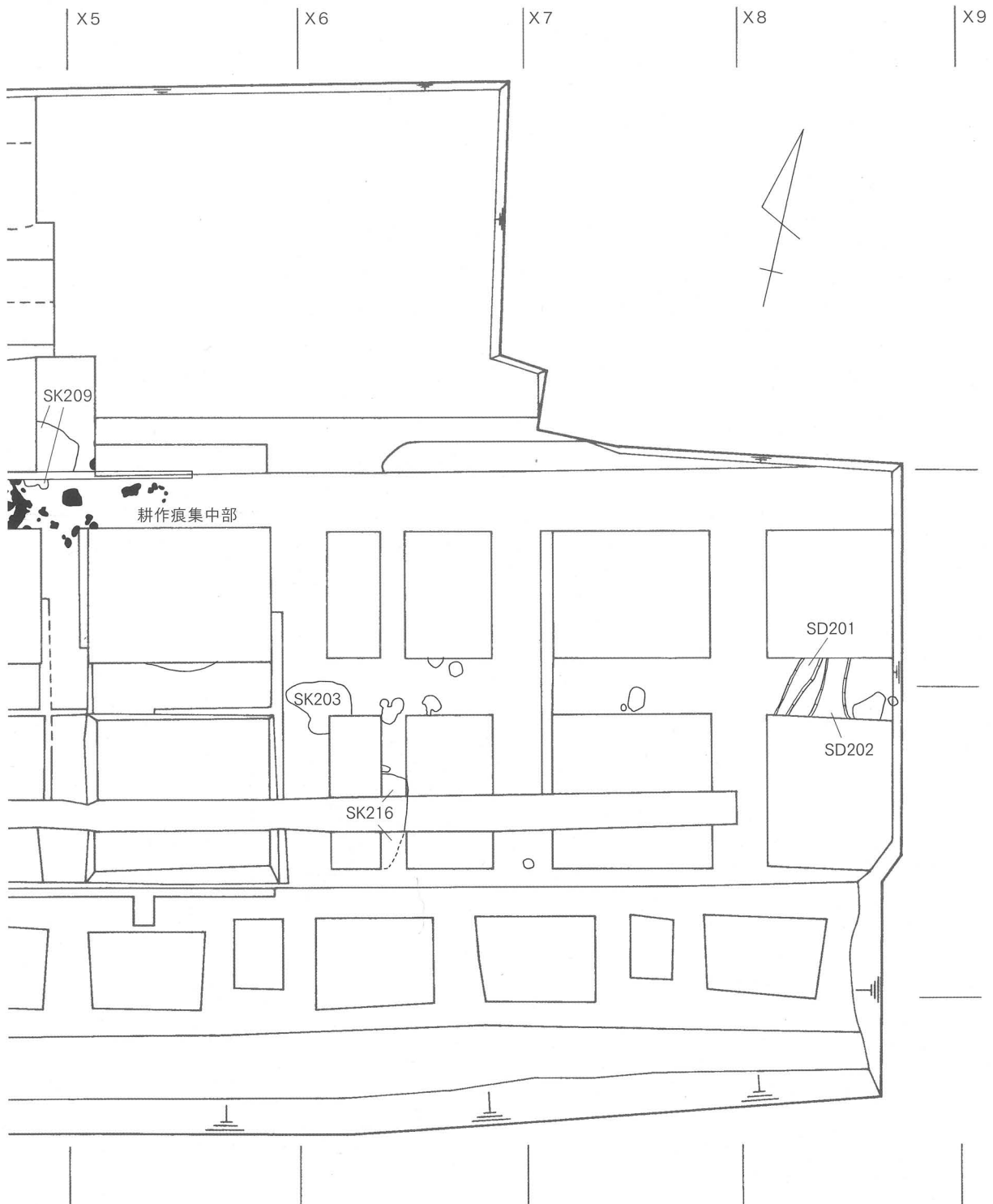
第2遺構面は、東区と西区、北区南端、南区北端において、2層下面で検出した遺構面である。遺構面のベースは、S R201の位置するX 4ライン付近を除き、概ね3層である。東区の遺構面検出レベルは、北東部が約11.8m、北西部が約11.5m、南東部が約11.6m、南西部が約11.4mで、東から西に緩傾斜するとともに、北から南にも緩傾斜している。西区の遺構面検出レベルは、北西部が約11.3m、南西部が約11.0mで、北から南に緩傾斜している。



第20図 第2遺構面遺構配置図(1/200)

第2遺構面で検出した遺構は、土坑16基、溝4条、ピット12基、流路1条と、耕作痕集中部1箇所である（第20～22図、図版8・9）。遺構の分布は散発的で、検出遺構の相互の関わりについてはほとんど不明である。なお、これらの遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器であるが、その多くが細片である。

この内、特徴的な遺構として、土坑3基（SK203・209・216）、溝3条（SD201・202・203）、流路1条（SR201）と、耕作痕集中部について述べる。



S K 203は、東区Y 3ラインとX 6ライン交点付近で検出した（第20・21図、図版8）。東西2.10m、南北1.53m、深さ0.35mの不定形の遺構である。S K 203のベースは大半が3層であるが、S X 501の縁辺部に当たっているため、埋土は、3層起源の粗砂質土と5層起源の黄褐色粘土が入り混じった状態を呈する。遺物の出土はなく、埋土の様子からも、人為的な遺構のほかに樹木痕跡の可能性が考えられる。

S K 209は、東区Y 5ラインとX 5ライン交点付近で検出した不定形の遺構である（第20・22図、図版8）。北西部が未掘部分に広がるため全容は不明であるが、東西約3.2m、南北約2.0mが検出できた。深さは0.38mである。埋土は褐灰色～明黄褐色（第22図④層）を呈する砂質土で、3層に、6層起源の粘性砂質土ブロック（褐灰色～灰褐色粘性砂質土）が混じったものである。X 5ライン西壁では、明瞭な縞状堆積が観察でき、開放状態であったS K 209が徐々に埋没していった様子が観察できる（図版8）。埋土の中には明らかな水成層も観察できることから、S R 201からオーバーフローした土砂の流入もあったようである。S K 209の埋土は、後述する耕作痕の埋土と共通しており、双方の遺構が関連していた可能性が指摘できる。また、その埋積状態から、S K 209は耕作面に設けられた水溜や肥料溜であったと想定する。出土遺物は土師器と瓦器の小片なので、中世の遺構と考えられる。

S K 216は、東区Y 3ラインより南、X 6ライン—X 7ライン間南北調査区で検出した遺構である（第20・35図、図版8）。S K 216は、確認調査時に第2トレンチ東部で検出されており（第17図）、その時にはS K 108と呼称していたが、本発掘調査時に第2遺構面に伴う遺構と考えるに至ったことから、S K 216と改称した。S K 216は、南側がすでに損壊を被り、未掘部分にも広がるため、全容は不明であるが、南北約2.5m、東西約4.0mにわたって確認され、最深部の深さは0.5mを測る。東肩と北肩が直線的に掘り込まれ、最深部が北東寄りに位置しており、西側や南側は緩やかに上昇している。埋土は、3層や6層を起源とする黄灰色礫混じり砂質シルト（第35図X 6ライン—X 7ライン間南北調査区西壁①層）や灰オリーブ色シルト混じり粗砂である（第35図X 6ライン—X 7ライン間南北調査区西壁②層）。最深部の床面は3b層と6層に達するが、南側や西側には5層も見られる。S K 216からは中世の土師器細片が出土しており、耕作に伴う土坑と考えられる。

S D 201とS D 202は、東区Y 3ライン東端で検出した溝で、ほぼ南北方向を指向する（第20図、図版9）。S D 201は検出長1.8m、幅0.75～0.92mで、S D 202は検出長1.6m、幅0.43～0.65mである。埋土は褐灰色（7.5YR6/1）～明黄褐色（10YR6/6）粗砂混じり粘性砂質土で、断面形は浅い皿状である。深さは0.10mほどしか残っておらず、上部は削平されたと考えられる。S D 201、S D 202ともに耕作に伴う溝と推定する。どちらからも土師器の小片が出土しているが、時期を特定するには至らなかった。

S D 203は、西区Y 5ライン西端で検出した遺溝である（第20・32図、図版9）。南北方向に走る溝で、幅0.7～0.5m、深さ0.12m、検出長2.0mを測る。埋土は浅黄色～にぶい黄色粗砂（第32図Y 5ライン南壁②⑩層）の水成層で、ベースは2層に似た黄灰色粘性砂質土（第32図Y 5ライン南壁②⑪層）である。断面形は浅い皿状で、耕作に伴う溝と推定する。人や牛が踏み込んだようで、底面や肩部は不規則である。

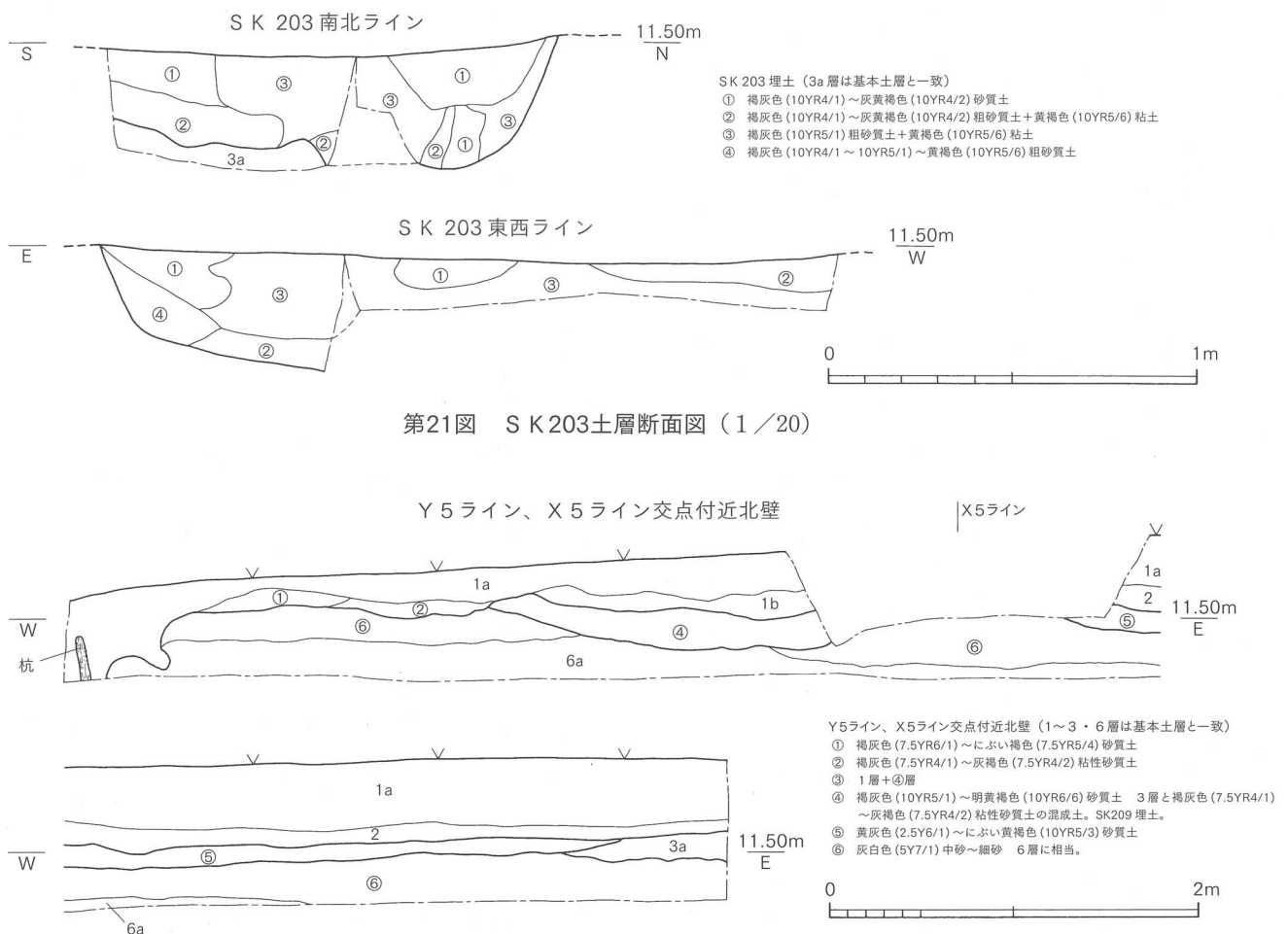
S R 201は、前項で述べた通り、X 4ラインを中心とする東区と西区の境部分において、S R 101の下位で検出したもので、走行方向はS R 101と同じと捉えている（第19・20図、図版9）。S R 201の最大検出幅は約5.2m、残存長は約11.5mである。ただし、底面は凹凸があり、埋土にも細かい差異があることから、水量によって流路や川幅が常時変化していたことがわかる。埋土はいずれも水成層で、ラミナが顕著に見られるものや土壌化したものが含まれている（第19図④・⑤・⑦～⑨層）。つまり、検出幅とした数値は、流路が最も東寄りを行っていたときの東岸から最も西寄りを行っていたときの西岸まで

の距離である。S R201の西岸には、灰黄褐色～にぶい黄褐色細砂質土を高さ0.1mほど盛り上げたブロックがあり、畦畔と推測する（第32図Y 5ライン南壁②層）。Y 5ラインにおける東岸上端の検出レベルは11.35m、西岸上端の検出レベルは11.30mで、最も深いところの底面レベルは11.12mなので、深さは0.23mである。ただし、S R201の本来の東岸がS R101と同じであるなら、深さは0.40mになる。

S R201からは、弥生土器・土師器・須恵器とともに瓦質土器（第40図83・84）が出土しているので、最終埋没段階が中世後半以後に下ることは明らかである。S R101がS R201を踏襲していると考えられることや、S R201を掘り込んで構築されたS K101の年代を考慮すれば、S R201は近世後期近くまで機能していたと言えよう。ところで、S R201の下位に第3遺構面以下の遺構が存在している。S K501やS K503のように弥生時代後期後半から古墳時代初頭と言った極端に古い遺構とともに中世の遺構と捉えられるS P329が存在しているが、S R201の掘開時期は特定できなかった。

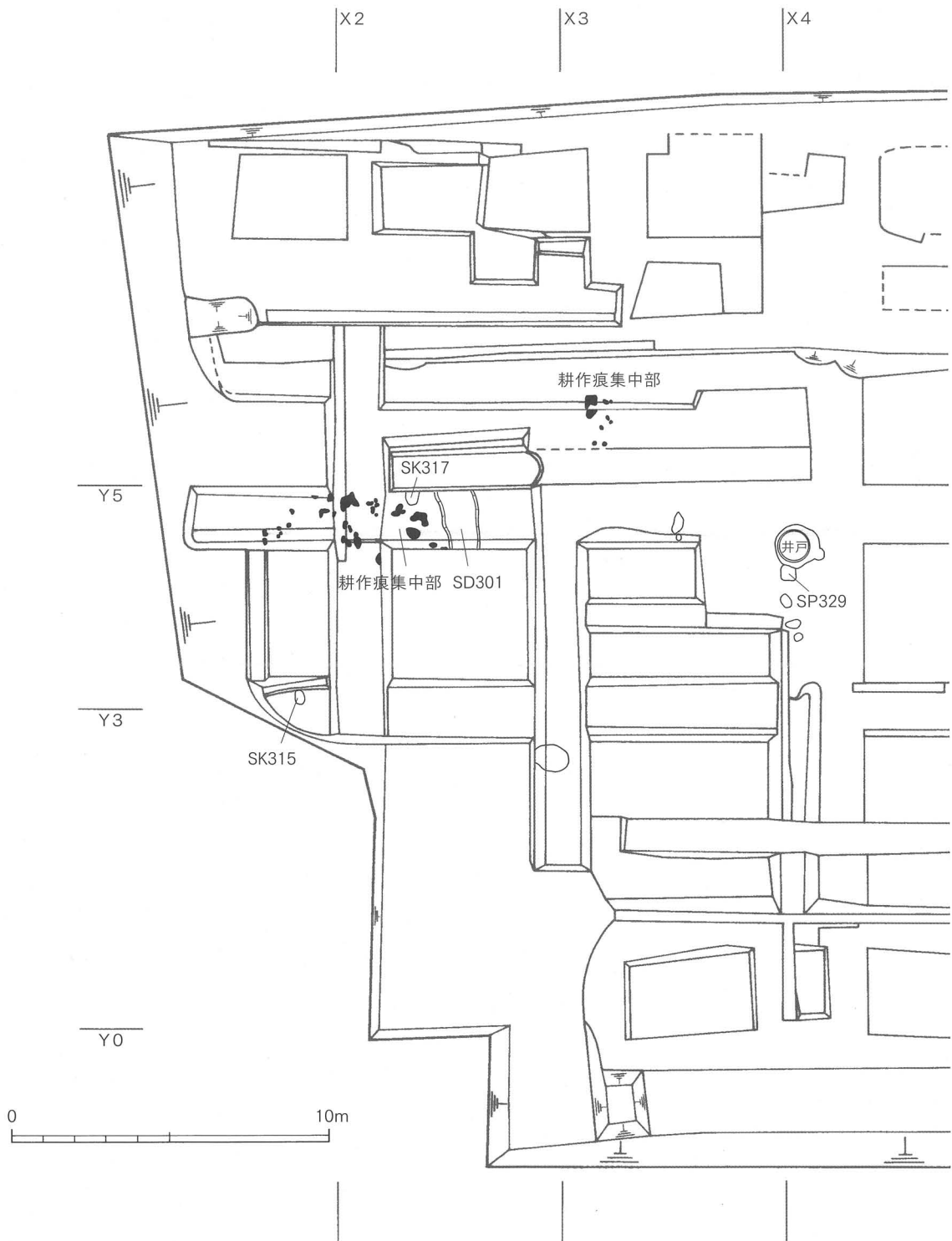
耕作痕集中部は、東区のY 5ライン西部を中心に、S R201の東岸から東に東西約8m、南北約3mの範囲で検出したもので、耕作に伴う人や牛の足跡と犁痕が入り交じった状態であった（第20・22図、図版8）。埋土は、2層や3層とは異なる色調を呈しており、4群に分けられた。S R201の肩部付近が褐灰色～にぶい褐色砂質土（第22図①層）、それより東側が褐灰色～灰褐色粘性砂質土（第22図②層）、S K209のすぐ南側が、S K209と同じく、3層と褐灰色～灰褐色粘性砂質土の混成土（第22図④層）、X 5ラインから東側が黄灰色～にぶい黄褐色砂質土（第22図⑤層）である。

以上のように、第2遺構面で検出した遺構は、土坑や溝、耕作痕集中部など、耕作に伴うと見られるものが大半を占める。また、出土遺物から、これらは、概ね中世の遺構と言えよう。（白谷）



(3) 第3遺構面 (第23・24図、図版10・11)

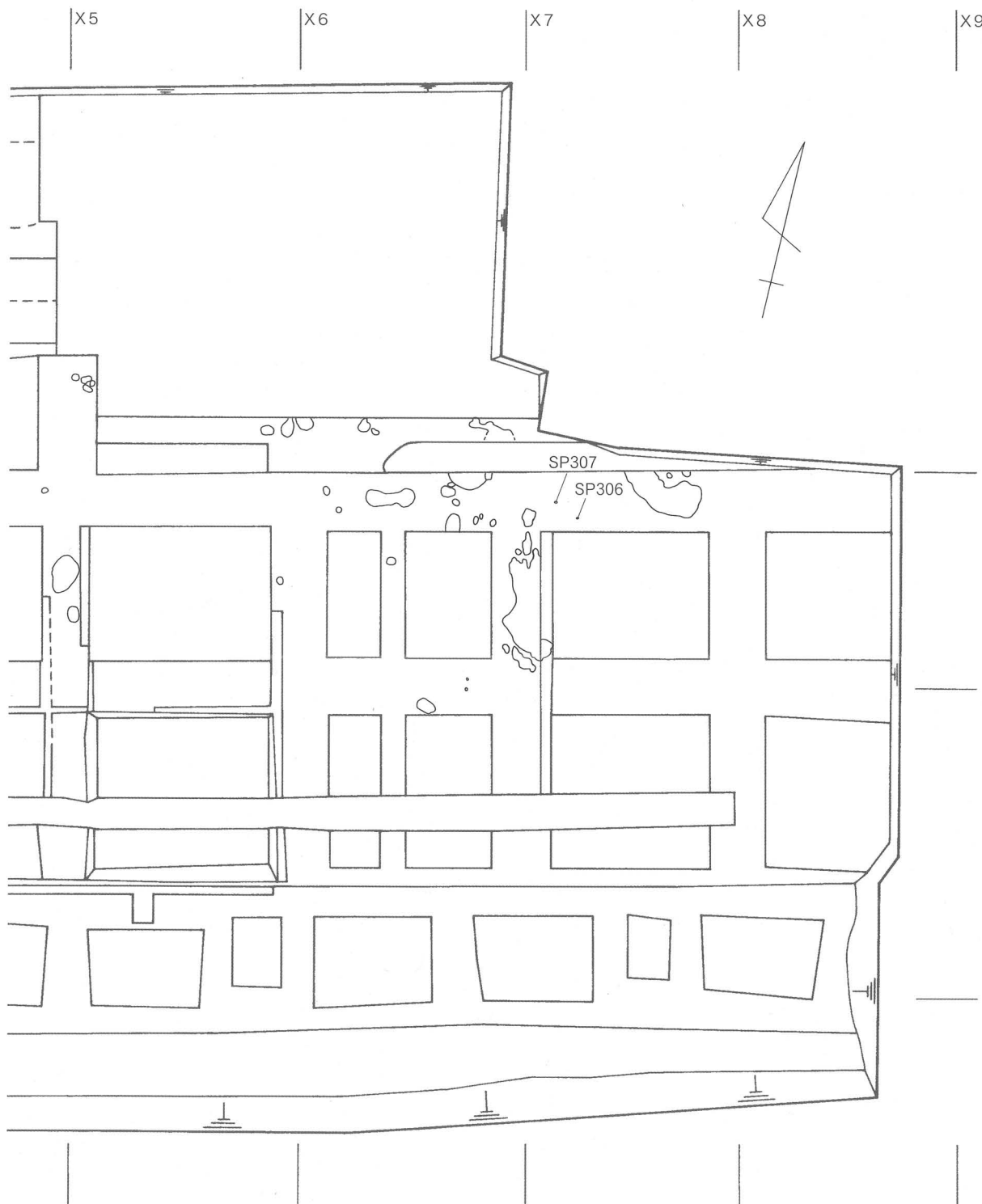
第3遺構面は、東区と西区、北区南端、南区北端において、3層下面で検出した遺構面である。ただし、東区東部は3層が上下2層に分かれたので、3層上部(3a層)を除去したところで確認された遺構面を第3遺構面としている。よって、第3遺構面のベースは、東区東部が3層下部(3b層)、東区西部から西区にかけてが4層である。東区の遺構面検出レベルは、北東部が約11.7m、北西部が約11.5m、南東部が約11.5m、南西部が約11.3mで、東から西および、北から南に緩傾斜している。西区の遺構面



第23図 第3遺構面遺構配置図 (1/200)

検出レベルは、北東部や南東部が約11.1m、北西部や南西部が約10.9mなので、南北方向はほぼ水平で、東から西に緩傾斜している。なお、東区北東部は、第3遺構面が最終検出遺構面となった。

第3遺構面で検出した遺構は、土坑25基、溝1条、ピット25基と、耕作痕集中部2箇所である（第23・24図、図版10・11）。遺構の分布はかなり散発的であるが、東区のY5ライン、X6ライン以東と、西区のY5ライン・X2ライン交点周辺に、遺構の集中が認められる。よって、第3遺構面で検出した遺構の内、東区のY5ライン、X6ライン以東で検出した遺構群と、西区のY5ライン・X2ライン交



点周辺で検出した遺構群について述べる。ちなみに、第3遺構面で検出した遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪の小片である。

東区のY5ライン、X6ライン以東で検出した遺構群は、不定形の土坑とピットにより構成されている(第23図、図版10)。これらの遺構の形態や法量は多様であるが、その中にあって、SP306・307とX5ライン東壁検出のピットは灰黄褐色(10YR5/2)砂質土が充填しており、ともに直径7cm程度の杭の痕跡であることが判明した。他の遺構の埋土は、褐灰色(10YR6/1)～灰黄褐色(10YR4/2)砂質土や灰白色(2.5Y7/1)～明黄褐色(10YR6/6)粘質土、明黄褐色(10YR6/6)～黄褐色(10YR5/6)粘質土である。これらはいずれも3b層起源で、酸化鉄粒の混入が見られる。総じて遺物の包含は乏しいので、この遺構群は、耕作に伴う土坑やピットと植物痕跡と考えられる。

西区のY5ライン・X2ライン交点周辺で検出した遺構群は、土坑(SK317)や溝(SD301)、耕作痕集中部により構成されている(第23・24図、図版10・11)。ここで検出した耕作痕は、その多くが人や牛の足跡で、中には人の足形であることがはっきりわかるものが含まれている(図版10)。

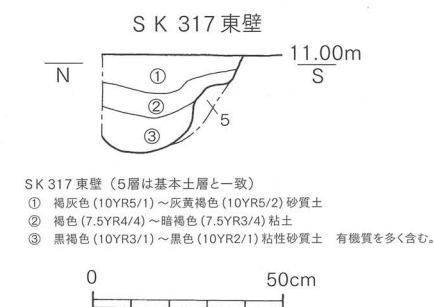
1トレンチ南壁に掛かるSK317は、東西検出幅約0.4m、南北検出幅約0.36m、深さ約0.26mの土坑である。埋土は、上から順に、褐灰色～灰黄褐色砂質土(第24図①層)、褐色～暗褐色粘土(第24図②層)、有機質を多く含む黒褐色～黒色粘性砂質土(第24図③層)で、最上層以外は5層に類似する。

SD301は、南北方向を指向する溝で、幅1.0～1.2m、深さ約0.1m、検出長約1.8mを測る。埋土は、中砂を主体とする褐灰色砂(第32図Y5ライン南壁②②層)である。この埋土は、SD301の西側に展開している耕作痕埋土と共通なので、同時に埋没したものと考えられる。ただし、X2ラインより西側で検出した足跡埋土は他とは異なり、にぶい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)粘性砂質土である。

なお、X3ライン、Y5ライン以北にも、同様の耕作痕が広がっている(図版11)。

ところで、4層は、褐灰色～灰黄褐色粗砂混じり粘土を主体とする土壌層で、その性格は、5層上面の覆土であるとともに、耕作土と推定されるものである。X2ライン周辺は、一見、4層が厚く堆積しているように見える状態であったが、つぶさに観察すると、4層の下に、レンズ状に堆積した褐灰色～にぶい黄褐色～明黄褐色砂質土(第32図Y5ライン南壁③③層・第34図X2ライン西壁①層)を挟んで、層厚が0.3mを越える4層に似た土壌層がもう1枚検出された。この下位の土壌層は、シルト～粘土が主体となる褐灰色～灰黄褐色粘性砂質土(第32図Y5ライン南壁④④層・第34図X2ライン西壁②層)である。そこで、この土壌層は、第4遺構面の埋土として扱い、次項で述べることにする。

以上のように、第3遺構面で検出した遺構は、第2遺構面の遺構と同様に、耕作に伴うものが大半を占める。SK315から土師器皿片(第40図85)が、SP329から東播系須恵器鉢片(第40図86)が出土していることから、第3遺構面に伴う遺構は、概ね古代末期から中世の遺構と捉えることができよう。(白谷)



第24図 SK 317土層断面図(1/20)

(4) 第4遺構面(第25～28図、巻頭図版4、図版12～15)

第4遺構面は、東区西部と西区、北区および南区D区以西において、4層下面で検出した遺構面である。遺構面のベースは概ね5層であるが、X4ライン周辺と調査区西端部は5層が分布していないので6層である。東区の遺構面検出レベルは、南東部が約11.4m、南西部が約11.3mで、東から西に緩傾斜している。西区の遺構面検出レベルは、北東部が約11.1m、南東部が約11.0m、北西部が約10.8m、南西部が約10.7mなので、南西方向へ緩傾斜している。

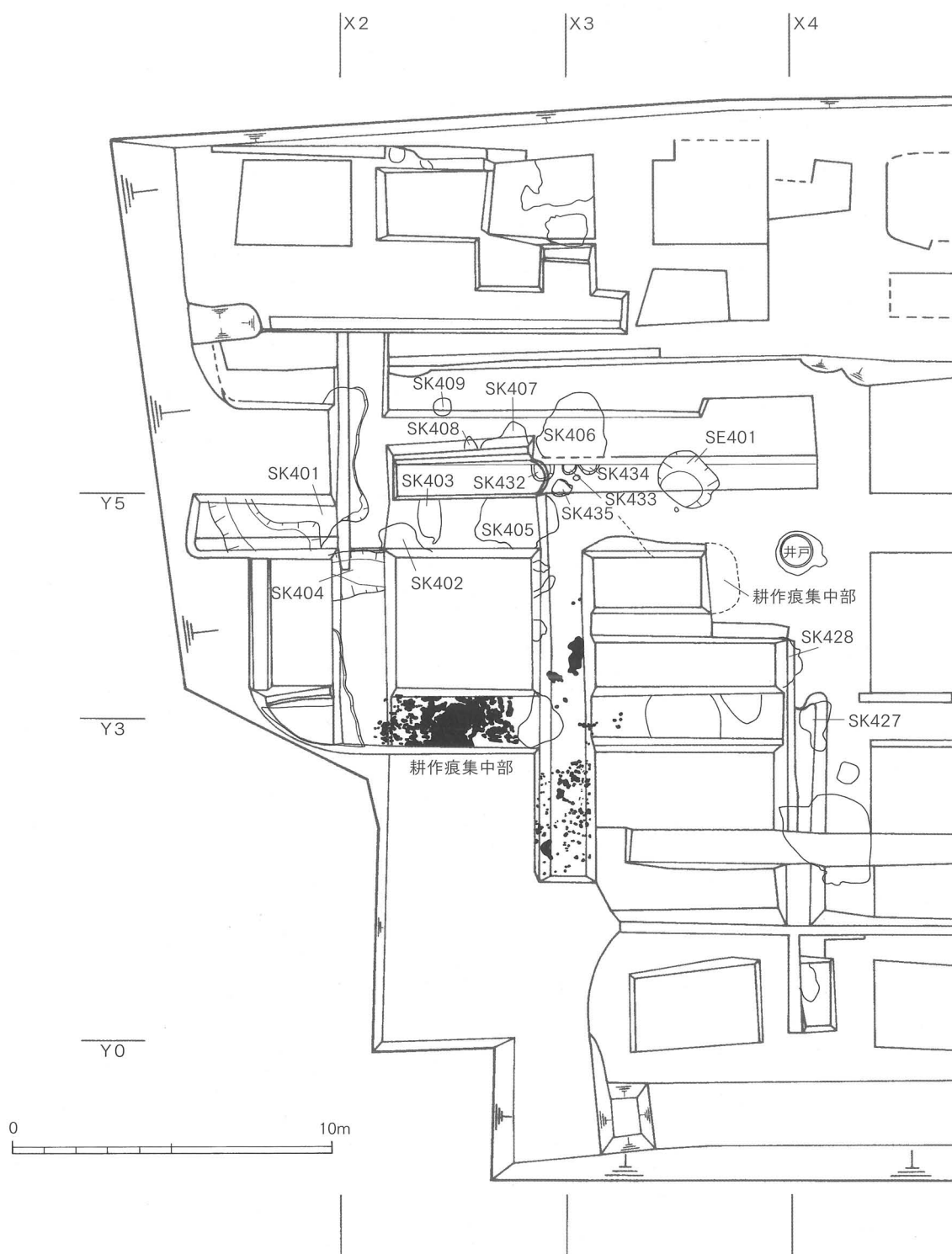
第4遺構面で検出した遺構は、確認調査時に検出した遺構と合わせて、土坑45基、溝1条、ピット9基、井戸1基、および耕作痕集中部3箇所である(第25図、図版12～15)。この内、特徴的な遺構として、土坑10基(S K 401・405～409・411・432～434)、ピット3基(S P 402～404)、井戸1基(S E 401)と、耕作痕集中部について述べる。なお、第4遺構面で検出した遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器であるが、いずれも脆弱な細片で、遺存状態は極めて悪かった。これらは、各遺構に本来的に帰属するものではなく、5層に含まれていたものが偶発的に混入したものと考えられる。

S K 401は、前項で触れたように、4層に似た褐灰色～灰黄褐色粘性砂質土(第32図Y5ライン南壁⑭層・第34図X2ライン西壁②層)の分布範囲を指しており、X2ラインの西側に広がる(第25図、図版12)。検出長は、南北約11.1m、東西約5.0mで、Y3ラインよりさらに南方に延びている。S K 401のベースは東肩部では5層であるが、中央部から西部にかけては5層ではなく、6層の上に堆積した水成層と考えられる灰白色～にぶい黄橙色の砂質土～シルト(第32図Y5ライン南壁⑰層)や中砂～細砂(第32図Y5ライン南壁⑱層)となっている。Y5ラインにおける東西方向の断面形は浅い皿状で、深さは約0.3mを測る。S K 401埋土は上面が土壌化しており、5層上面の覆土にも見えるが、その分布域が5層の分布域より西側に展開していることから、単純に5層上面の窪みに堆積した流入土と捉えることはできない。4層の分布域即ちS X 501の西肩部付近に新たに掘られた土坑ないし溝の埋土と考えたい。なお、Y5ライン・X2ライン以東で検出したS K 402～404なども、S K 401と同様の埋土を有することから、S K 401と同時期に存在していた土坑であろう(第25図、図版12)。これらの遺構の性格は、4層上面で検出した第3遺構面と同じく、耕作に伴うものと推測される。

S K 405～409をはじめ、5層上面に掘られた土坑やピットの埋土は、5層起源の褐灰色(10YR5/1)～灰黄褐色(10YR5/2)粘性シルト(以下、「第4遺構面A層」と呼称する。)や黒褐色(7.5YR3/1)～黒色(7.5YR2/1)粘土(以下、「第4遺構面B層」と呼称する。)を主体としており、S K 401や後述する耕作痕集中部の足跡等とは異なる。ところで、有機質を多く含む、第4遺構面B層を主体とする遺構は、北区や南区の西部でも検出された。これらは、ピットや不定形の土坑である(第25図、図版13)。S K 405はX3ライン・Y5ライン交点付近に、S K 406はS K 405の北側に展開する遺構で、どちらも平面形は円形に近い(第25・26図、図版13)。また、遺構中央部分の埋土は黄橙色(10YR7/3)粘土(第26図S K 405①層・S K 406①層。以下、「第4遺構面C層」と呼称する。)で、周囲が褐灰色～灰黄褐色粘性砂質土(第26図S K 405②層・S K 406③層。第4遺構面A層に相当。)の同心円状を呈する点も共通である。法量は、S K 405が北側を1トレンチで切られているが、東西約2.5m、南北約1.8m、S K 406が南側を1トレンチで切られているが、東西約2.0m、南北約2.0mを測る。深さは、S K 405が0.2m、S K 406が0.15mで、どちらも断面形は浅い皿状である。両遺構からは、弥生時代後期後半の弥生土器ないし古墳時代初頭の土師器の細片が出土しているが、本来5層に含まれていたと考えられる。遺構中央部分に見られる第4遺構面C層は、第4遺構面A層が酸化して変色したものと推測している。

S K 407～409は、S K 406の西側に検出した遺構である（第25・26図、図版13）。平面形はS K 407とS K 408が不定形、S K 409が円形で、深さは0.3～0.4m程度である。埋土は5層起源の第4遺構面A層を主体とする不均質なもので、S K 407のように中間層に有機質を多く含む黒色シルト（第26図S K 407③層）が堆積するものもある。これは、S K 407の埋没過程で植物遺体が面的に堆積したものであろう。これらの遺構からも弥生時代後期後半の弥生土器片ないし古墳時代初頭の土師器片が出土している。

S K 411は、X 5ライン・Y 3ライン交点付近に位置しており、隅円方形に近い二段掘りの遺構であ

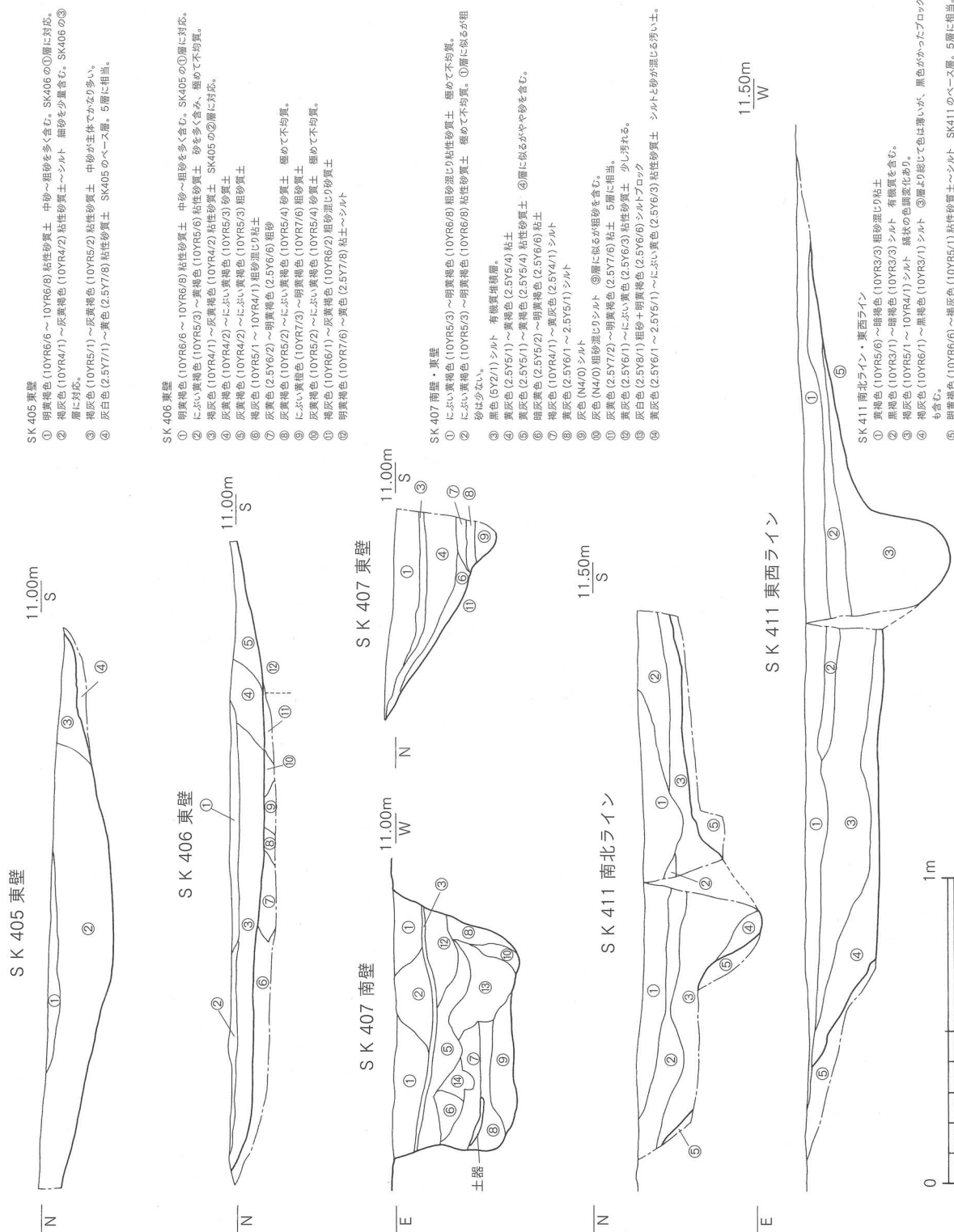


第25図 第4遺構面遺構配置図（1／200）

る（第25・26図、図版14）。南北長、東西長ともに約3.0m、深さは約0.5mを測る。埋土は黄褐色や褐灰色、暗褐色を呈するシルト（第26図S K411①～④層）でレンズ状堆積が観察できる。埋土とベースとなる5層（第26図S K411⑤層）の層界において弥生時代後期後半の弥生土器片ないし古墳時代初頭の土師器片が出土している。平面形や断面形の形態から、溜井と考えることもできよう。

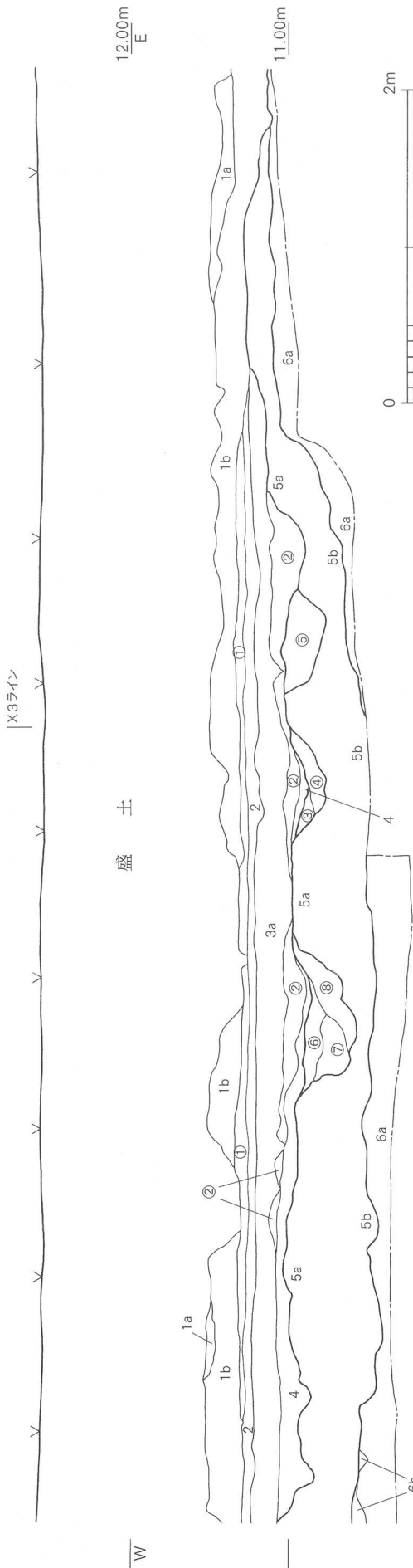
その他、S K432～435は、確認調査時に1トレンチで確認した遺構である（第25・27図、図版2）。確認調査時にはS K101～104と呼称したが、第4遺構面に伴う遺構に相当するので、本報告では、S K





第26図 S K 405・406・407・411土層断面図 (1/20)

1 トレンチ西部北壁



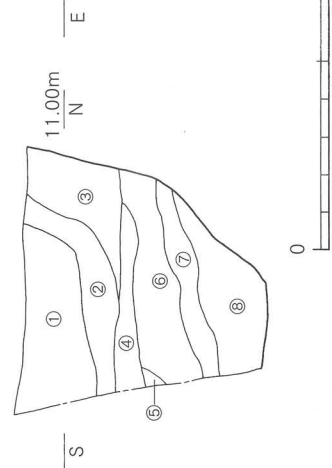
1 トレンチ西部北壁 (1~6層は基本土層と一致)

- ① 明黄褐色 (2.5Y6/6) 凝湿じりシルト質細粒砂 2層のブロックを含む近世耕作土。1層に相当。
- ② 明黄褐色 (10YR6/6) 凝湿じり粘土 2mm以下の白色粒を中量含む。炭化物チップが散見される。4層に相当。
- ③ 灰青色 (2.5Y6/2) 凝湿じりシルト質粘土 2mm以下の白色粒を少量含む。5層を母材とした堆積土。SK433 (確認調査時)にはSK102と呼称。埋土。
- ④ 灰色 (5Y4/1) 凝湿じり極細粒砂~シルト 層の含有状況は③層と同じ。底面に有機質泥が溜まる。SK433 (確認調査時)にはSK102と呼称。埋土。

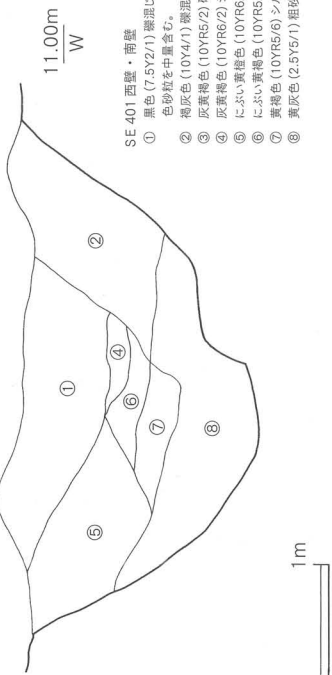
- ⑤ 灰白色 (5Y6/2) 凝湿じり中粒砂 上位に2~4mmの層を含む。SK434 (確認調査時)にはSK103と呼称。埋土。
- ⑥ 黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂湿じり粘土 SK432 (確認調査時)にはSK101と呼称。最終埋積土。
- ⑦ 黄褐色 (2.5Y6/1) 凝湿じり中粒砂 5mm以下の層をブロック状に含み、鉄分沈着が強い。5層・6層を母材とするシルト質粘土ブロックを含む。SK432 (確認調査時)にはSK101と呼称。埋土。
- ⑧ 灰白色 (5Y7/1) 凝湿じり粘土 5層を母材とする流入土。SK432 (確認調査時)にはSK101と呼称。埋土。

第27図 1 トレンチ西部北壁土層断面図 (1/40)

SE 401 西壁



SE 401 南壁



- SE 401 西壁・南壁
- ① 黒色 (7.5Y2/1) 凝湿じり粘性シルト~極細粒性砂質土 有機質土壌で、粘性を帯びる。3mm以下の白色砂粒を中量含む。
 - ② 褐灰色 (10Y4/1) 凝湿じりシルト~中砂 3mm以下の砂粒を多く含む。炭化物のチップ散見。
 - ③ 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂礫 2mm以下の凝湿じりシルトから成る。
 - ④ 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質粘土 3mm以下の凝湿じりシルトから成る。
 - ⑤ にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂礫 3~5mm以下の凝湿じりシルトから成る。
 - ⑥ にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂礫 3~5mm以下の凝湿じりシルトから成る。1mm以下の粘土ブロックを多く含む。
 - ⑦ 黄褐色 (10YR5/6) シルト~細砂 粘土ブロックを若干含む。6層を母材とする埋土。
 - ⑧ 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂湿じりシルト質粘土 6層を母材とする埋土。

第28図 SE 401土層断面図 (1/20)

432～435と呼び変えた。これらの内、1トレンチ北壁におけるS K432～434の埋土を観察すると、明らかに5層上面から掘り込まれていることや、上面が完全に4層に覆われていることが観察できる（第27図）。また、埋土は5層起源の土が流入堆積した様子が観察できる。

S P402～404は、X6ラインのY3ライン以南で検出したピットで、断面形はいずれも逆台形である（第25図、図版14）。これらは5層を掘り込んでおり、埋土は4層に類似した褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR4/2）砂質土である。S P402は長軸35cm、短軸18cm、深さ6.8cmを測る楕円形のピットである。S P403とS P404は円形のピットで、S P403が直径25cm、深さ6.5cm、S P404が直径21cm、深さ7.3cmを測る。また、S P402—S P403間が1.0m、S P403—S P404間が1.1mで、S P402とS P403を結ぶ線と、S P403とS P404を結ぶ線がほぼ直交する。よって、法量や形態の共通性および位置関係から、有機的な関連が想定できるので、掘立柱建物の柱穴と考える。

S E401は、確認調査時に1トレンチでその北半分を検出した遺構である（第25・28図、図版15）。確認調査時にはS E101と呼称したが、本報告では、4層直下で検出されていることが追認できたことから第4遺構面検出の遺構として扱い、S E401と呼び変えた。S E401は長軸1.80m、短軸1.50m、深さ0.68mを測る隅円方形の土坑で、断面形はU字状を呈する。S E401埋土は、最上層が特徴的な有機質土壌の黒色礫混じり粘性シルト～極細粘性砂質土（第28図S E401①層）で、その他、灰色や灰黄褐色などのシルトや砂礫（第28図S E401②～⑥層）が見られる。下位には、6層が再堆積した黄褐色シルト～細砂（第28図S E401⑦層）や黄灰色粗粒砂混じりシルト質粘土（第28図S E401⑧層）が見られ、人為的な遺構であることが明らかである。埋土は総じて砂礫を多く含み、最上層が有機質土壌である。ちなみに、S E401の南東約6mには近現代の井戸が遺存していることや、S E401が明らかに湧水層を掘削していることから、井戸と考えた。

ところで、S E401のベースは、にぶい黄色～にぶい黄橙色粗砂（第35図X4ライン西壁⑥層）である。この層は、X4ライン付近において、第1遺構面で検出したS R101や第2遺構面で検出したS R201とほぼ同じ位置にその分布が確認されたものである。この粗砂は、南区北壁で確認したオリーブ灰色～オリーブ色砂礫土（第32図南区北壁⑩層）に対応すると考えられる、極めてしまりのよい土層であり、6層に相当すると考えられる。この層の分布域には、S E401の他に2基の土坑（S K427・428）が認められる。これらの遺構の埋土は褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂混じり粘性シルトで、第4遺構面A層より幾分砂を多く含むが、極端な違いは認められない。

第4遺構面で確認した耕作痕集中部は、X3ライン・Y3ライン交点周辺と、X3ライン・Y5ライン交点周辺およびX4ライン・Y5ライン交点付近に認められた（第25図、図版15）。人と牛の足跡に加えて、Y3ライン、X3ライン以西には犁痕も認められる（図版15）。ベース層はほとんどが5層であるが、X4ライン・Y5ライン交点付近は6層である。ただし、埋土はベース層の違いに関わらず、4層の土壌化の弱い部分と見ることができる、中砂を主体とする褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR6/2）砂質土が圧倒的に多く、灰白色（2.5Y8/1～2.5Y7/1）シルトが若干見られる。埋土の共通性から、それぞれの耕作痕集中部について、あまり時期差を考える必要はないだろう。また、いずれの耕作痕集中部も牛の足跡を伴うことから、中世に下るものと考えられる。

以上のように、第4遺構面で検出した遺構は、耕作に伴うものが相当量認められる。これらは、5層形成直後ないし併行期のものと、5層形成から一定の時間を経てからのものとが混在していると推測されることから、古墳時代から中世のものが含まれていると言えよう。（白谷）

(5) 第5遺構面(第29～35図、巻頭図版5～8、図版16～25)

第5遺構面は、東区西部と西区、北区および南区D区以西において、6層上面で検出した遺構面である。ただし、当該地南西部を中心に、第2節の基本土層で述べた5層を埋土とする大規模土坑群(SX501)が展開しているため、SX501の範囲外に検出された遺構は、X6ライン周辺の土坑3基(SK501・502・503)のみである。また、SX501の底面において、土坑13基(SK504～516)、ピット12基(SP501～512)を検出している(第29～35図、巻頭図版5～8、図版16～25)。だが、大規模土坑群としたSX501は、小規模な土坑を一定の範囲に繰り返し掘り続けた土坑群と解釈しており、SX501の底面で検出した土坑やピットはSX501に先立って掘開された遺構ではなく、SX501を構成する個々の土坑の最下部と考えられる。よって、便宜上遺構番号を付したが、SX501と併せて記述する。なお、X4ライン周辺は、第4遺構面調査時にすでに6層が検出されていたが、遺構の切り合い関係や埋土の様相から、より下位に検出された遺構を第4遺構面の遺構と分離して第5遺構面に伴う遺構として扱った。このような遺構の検出状況なので、第5遺構面の検出レベルは第4遺構面とほぼ同じである。

ところで、第5遺構面で検出した遺構から出土した遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の弥生土器・土師器である。これらは、出土時点では良好な遺存状態を保っているように見えたが、実際には包含層中での劣化が甚だしく、極めて脆弱であったため、いずれも器表の剥落や器体の崩壊が著しく、原形を留めて取り上げることができなかった。

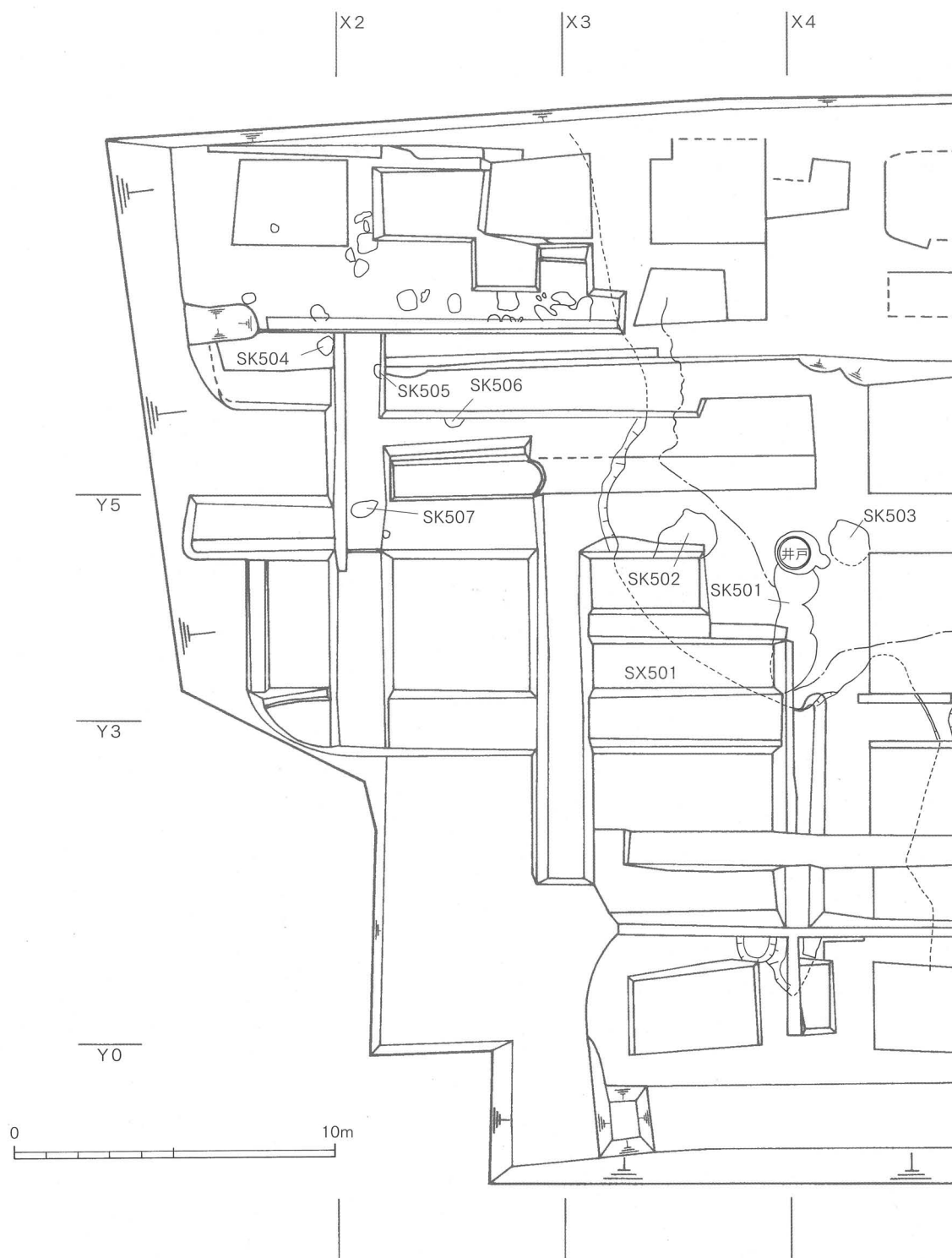
以下に、土坑3基(SK501・502・503)と大規模土坑群(SX501)について述べる。

SK501は、X4ラインのY3ライン・Y5ライン間で検出された遺構で、北端が近現代の井戸で壊されている。また、南西部分が未掘部分に広がっている(第29・31図、図版16)。遺構検出時の平面形が溝状であったので単一の遺構として扱っているが、掘削の結果は楕円形の土坑が2基連なった状態であった。北側の土坑は、東西幅1.34m、深さ0.3mで、南北長は1.50m程度と推定される。南側の土坑は東西幅1.30m、南北長は2.8mの範囲が確認されており、深さは0.31mを測る。埋土は北側、南側ともに共通で、上半が褐灰色～にぶい黄橙色粗砂混じり砂質土(第31図SK501①・②層)、下半が6層起源の粘土や粗砂が混在した、5層に似た粘性砂質土である(第31図SK501③～⑥層)。埋土の様相から、一挙に埋められたものではなく、徐々に流入堆積した状態が確認できた。北側、南側の両土坑からは、底面から浮いた状態で、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての弥生土器・土師器片が出土している。出土層位から考えて、これらの遺物はSK501の埋没の過程で流入したものと考えられる。実測できた遺物(第40図88・89)は、SX501出土遺物(第41図91～101)と比較して、著しい時期差は認められないので、SK501とSX501とが同時期の遺構の可能性も考えられる。

SK501の掘削された位置は、6層の砂礫層(第31図SK501⑦層)とシルト～粘土層(第31図SK501⑧・⑨層)の入り交じった部分に当たっている。あるいは、SX501を構成する土坑群と同様の性格を有する土坑を土坑群からやや離れた位置に掘削したものの、6層の中でも砂礫層部分に当たったために、引き続いて周辺に土坑が掘削されることがなかった結果として、単独の土坑と言える形態を有することになったのかもしれない。

SK502はX4ライン・Y5ライン交点のすぐ西に、SK501から約2m離れて検出された遺構で、南端は未掘部分に含まれる(第29・31図、図版17)。また、SX501の東肩からわずか2mほどの距離にある。平面形は楕円形に近い不定形で、東西長は2.32m、深さ0.4mで、南北の検出長は1.40mである。ベースは、灰白色～明黄褐色粗砂～シルトでラミナが見られる6層である(第31図SK502⑩層)。SK

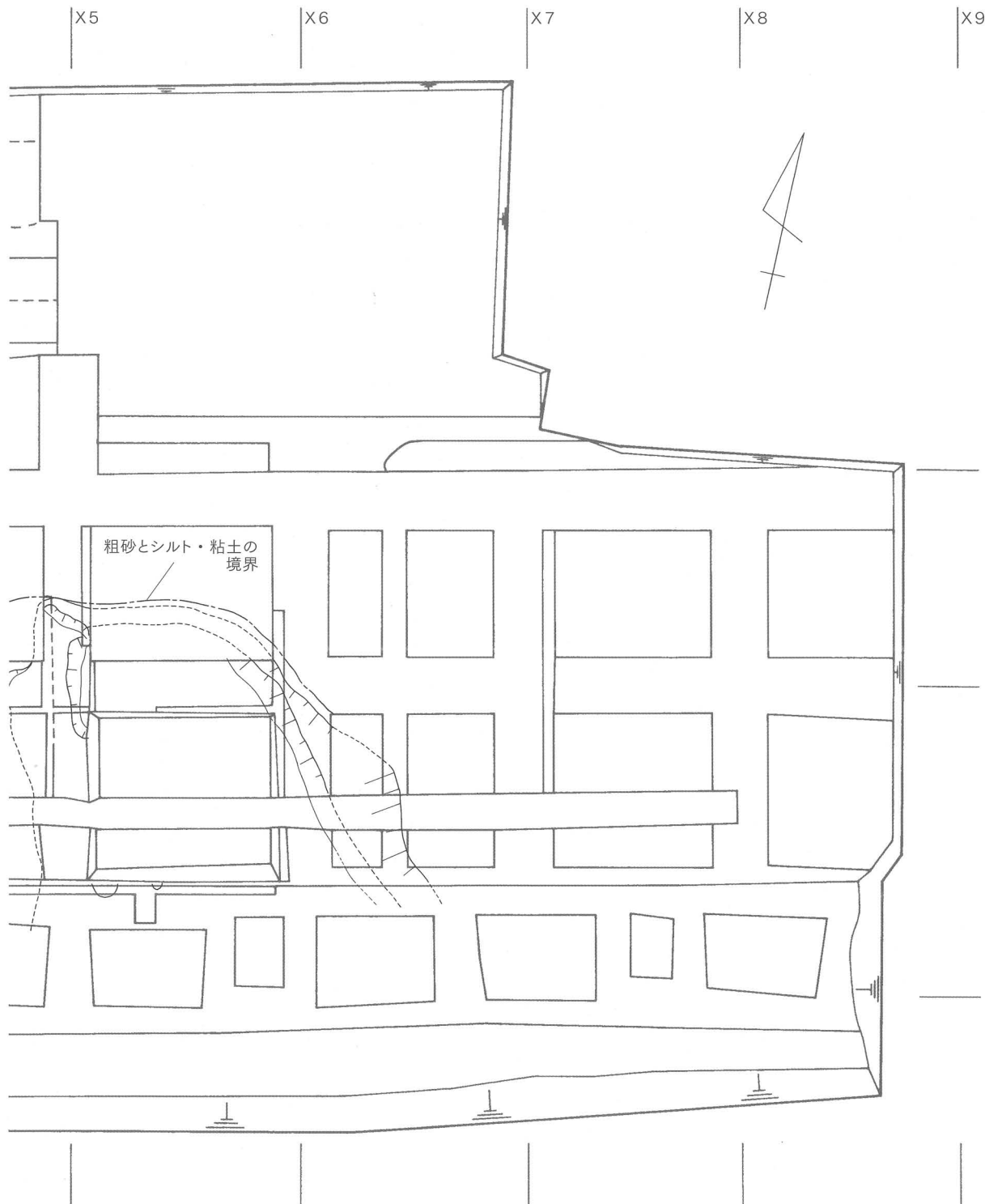
502の埋土は、この6層起源と考えられる、灰白色～灰黄色～明黄褐色粘性砂質土（第31図S K 502⑦層）である。この埋土は、粗砂混じりのシルト～粘土で、5層に似ている。調査区の北壁に掛かるように、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての弥生土器・土師器が出土している。しかし、この遺物も遺存状態が悪く、実測することができなかった。とはいえ、S X 501出土遺物と明確な時期差は見出せないで、S K 501と同じく、S X 501とほぼ同じ時期の遺構であり、その性格も、S K 501と同様にS X 501を構成する土坑群と同質の土坑と考えたい。なお、S K 502の底面で検出した2基のピットは、その



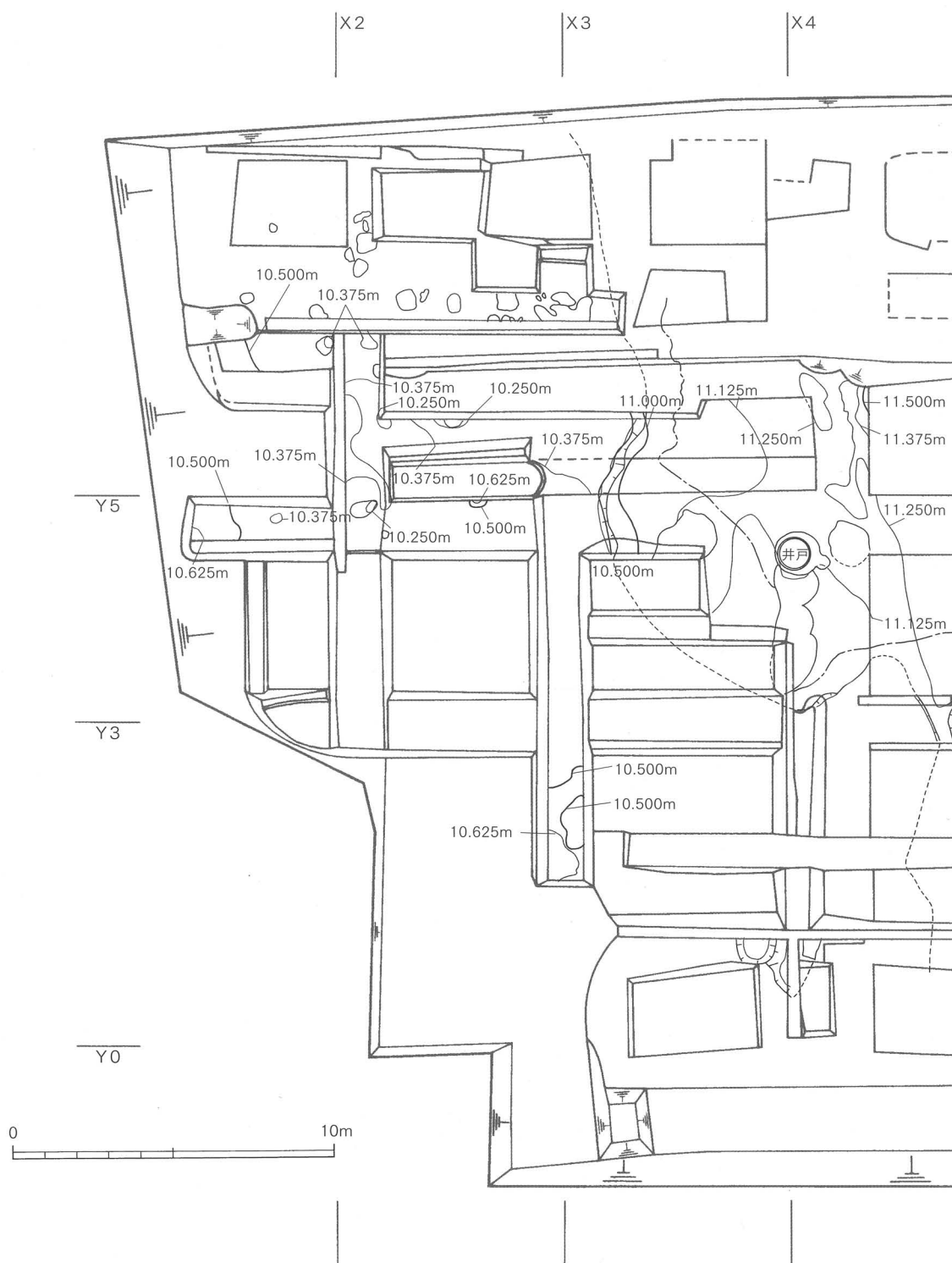
第29図 第5遺構面遺構配置図（1／200）

埋土が、S K 502の埋土に有機質を含む黒色粘土ブロックが混ざったもので、5層と同質のものと捉えることができる。このことから、平面的にはS K 502上面で把握することができなかったが、S K 502よりも新しい遺構であり、S X 501が小規模の土坑を何度も掘り返したものであるように、S K 502の位置を再度小規模に掘り返したものであろう。

S K 503は、X 4ライン・Y 5ライン交点のすぐ東で検出された遺構で、この上には、S K 101やS R 101・201が位置している（第19・29・31図、図版18）。S K 503は、南端が未掘部分に位置するが、平



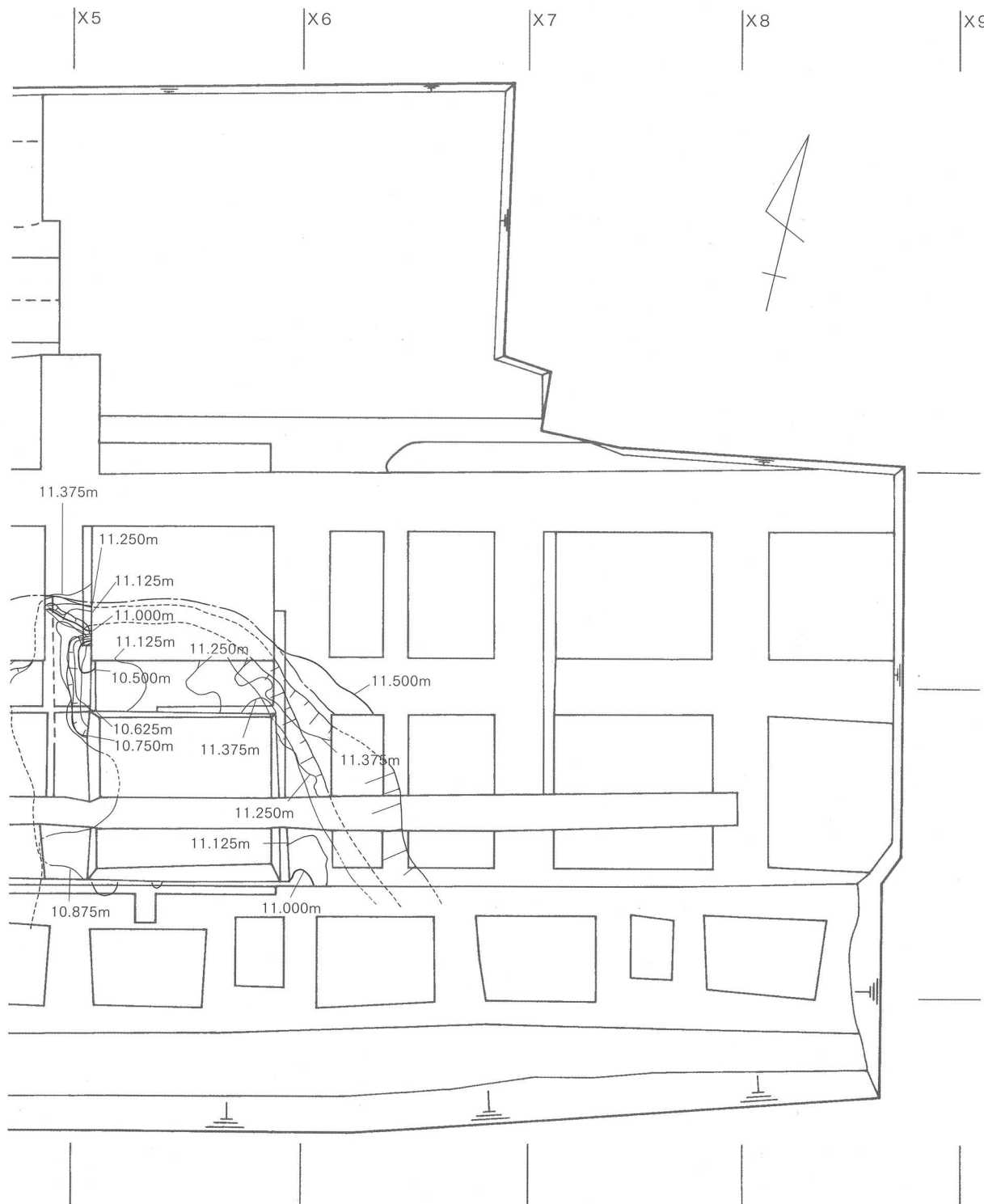
面形は直径1.4m程度の円形と考えられる。深さは約0.2mを測り、断面形は皿状である。埋土は、6層起源の灰白色～黄橙色粘土と灰白色砂の混成土である（第19図⑪層）が、S K 503のベースが6層でもラミナの顕著な灰白色砂（第19図⑮層）であるためか、S K 501・502と違って砂質分の強い埋土と言える。S K 503からは、弥生時代後半後期から古墳時代初頭にかけての弥生土器・土師器が出土している。これらの遺物はいずれも灰白色を呈する破片で、同一個体の破片と考えられる。また、S K 503底面に貼り付くように出土しており、S K 501・502の遺物の出土状況とは異なる。だが、図化した第40図90か

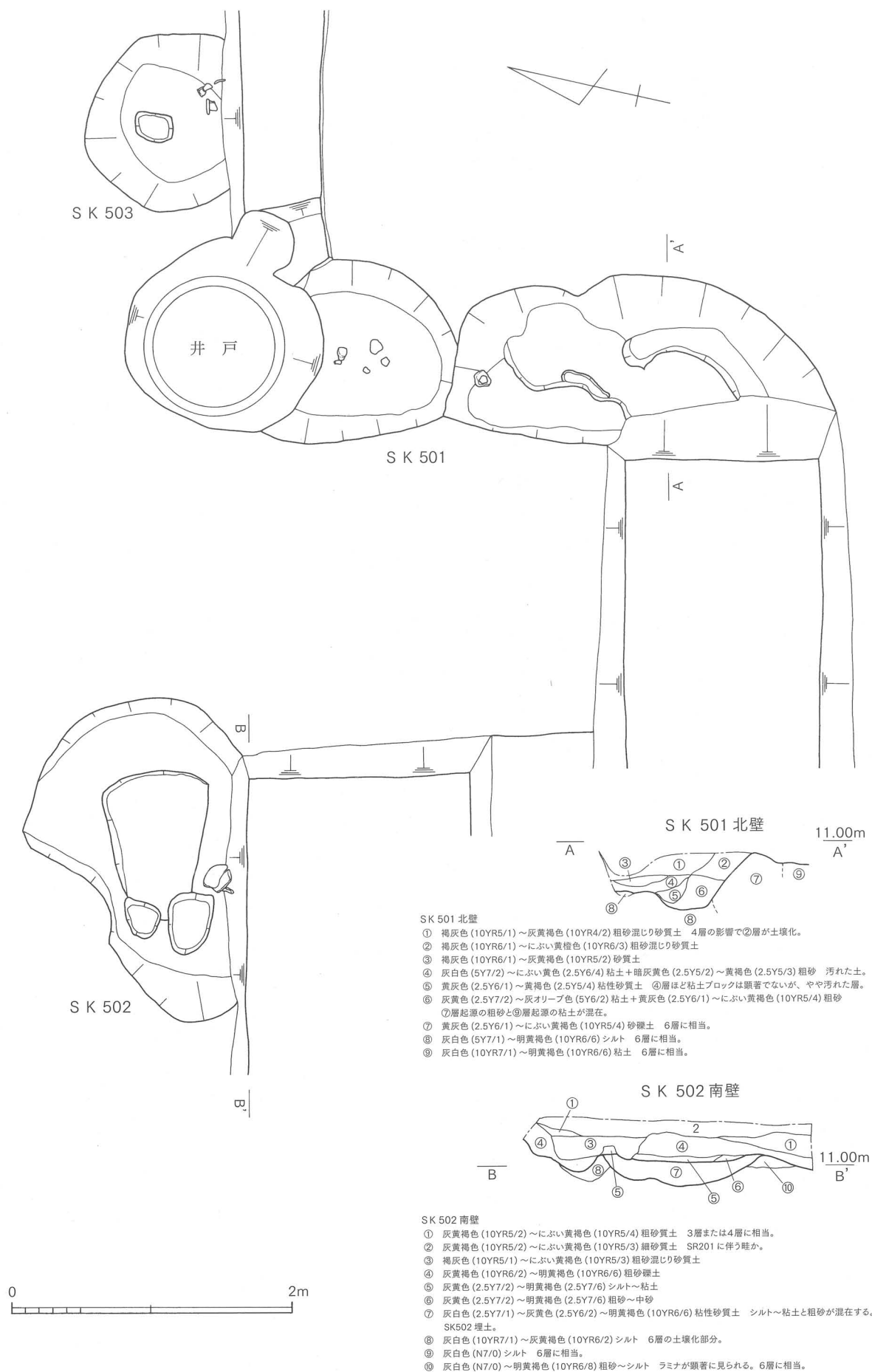


第30図 第5遺構面等高線図（1／200）

らは、S K 503と第5遺構面の他の遺構との間に、明確な時期差や異なる性格を指摘するのは難しい。

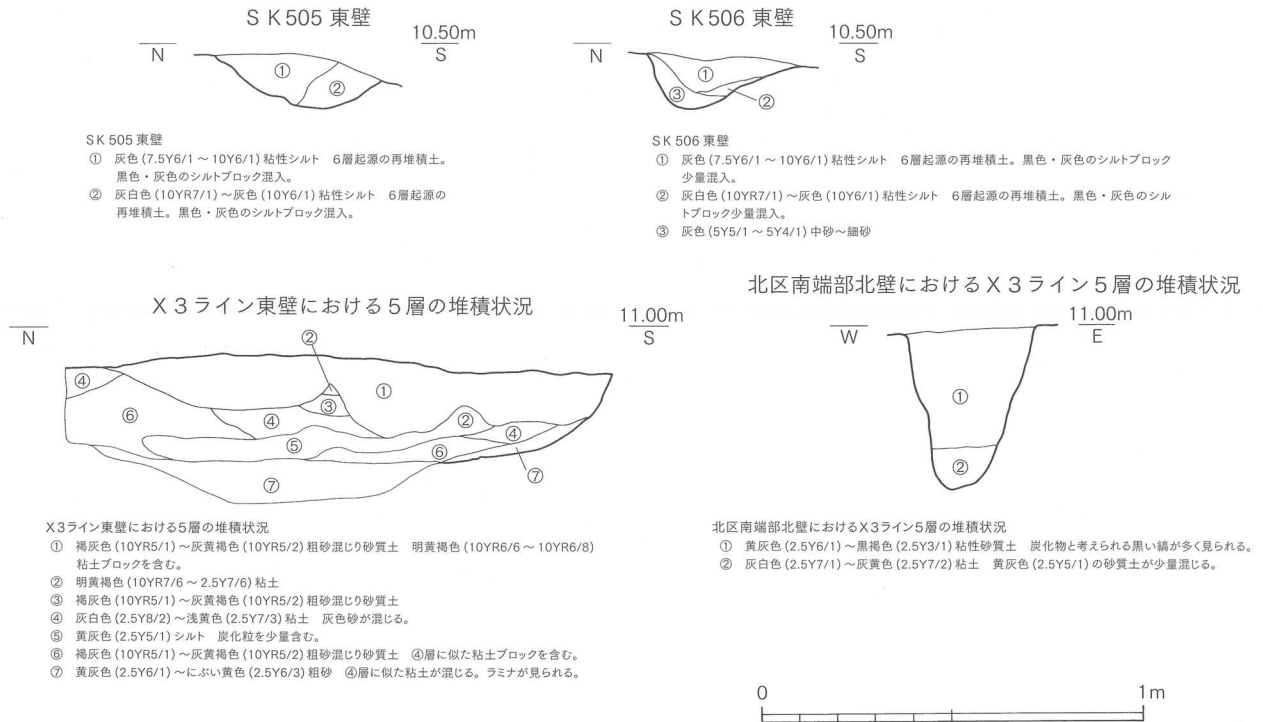
S X 501は、当該地南西部を中心に大規模に展開する遺構である（第29・30・32～35図、図版19～21）。検出範囲は、北区西部、西区のほぼ全域、東区のX 6ライン付近から西でY 3ライン付近より南、南区D区以西にわたっており、東西約35m、南北約30mに及ぶ。ただし、S X 501の掘開範囲のベース層は専らシルトや粘土を主体とする層で、ベースである6層が砂礫を中心に構成されている部分、具体的には、Y 5ライン・X 4ライン交点付近から北側および東側や、Y 3ライン・X 6ライン交点付近より東



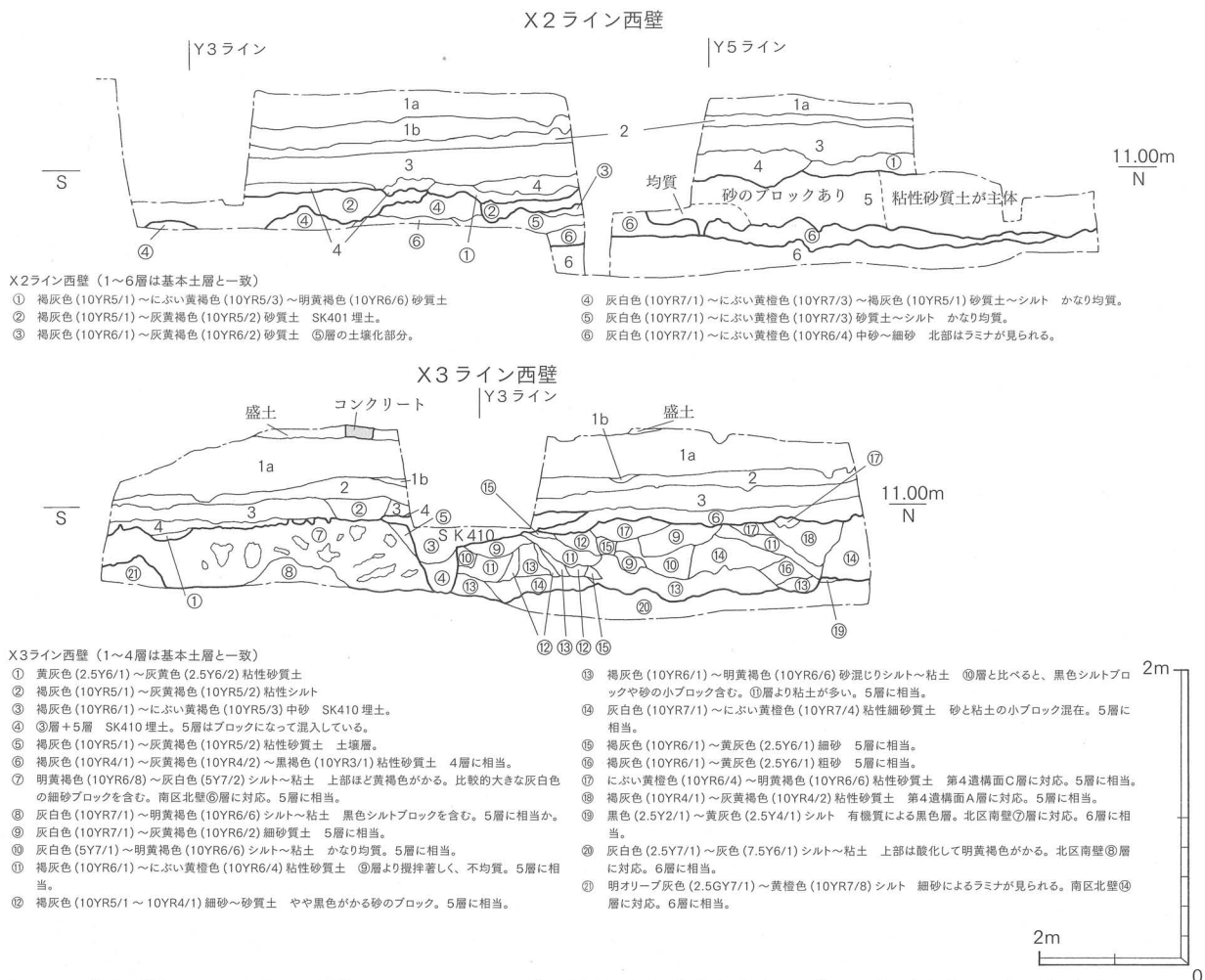


第31図 S K 501~503平面図 (1/40) ならびに S K 501・502土層断面図 (1/40)

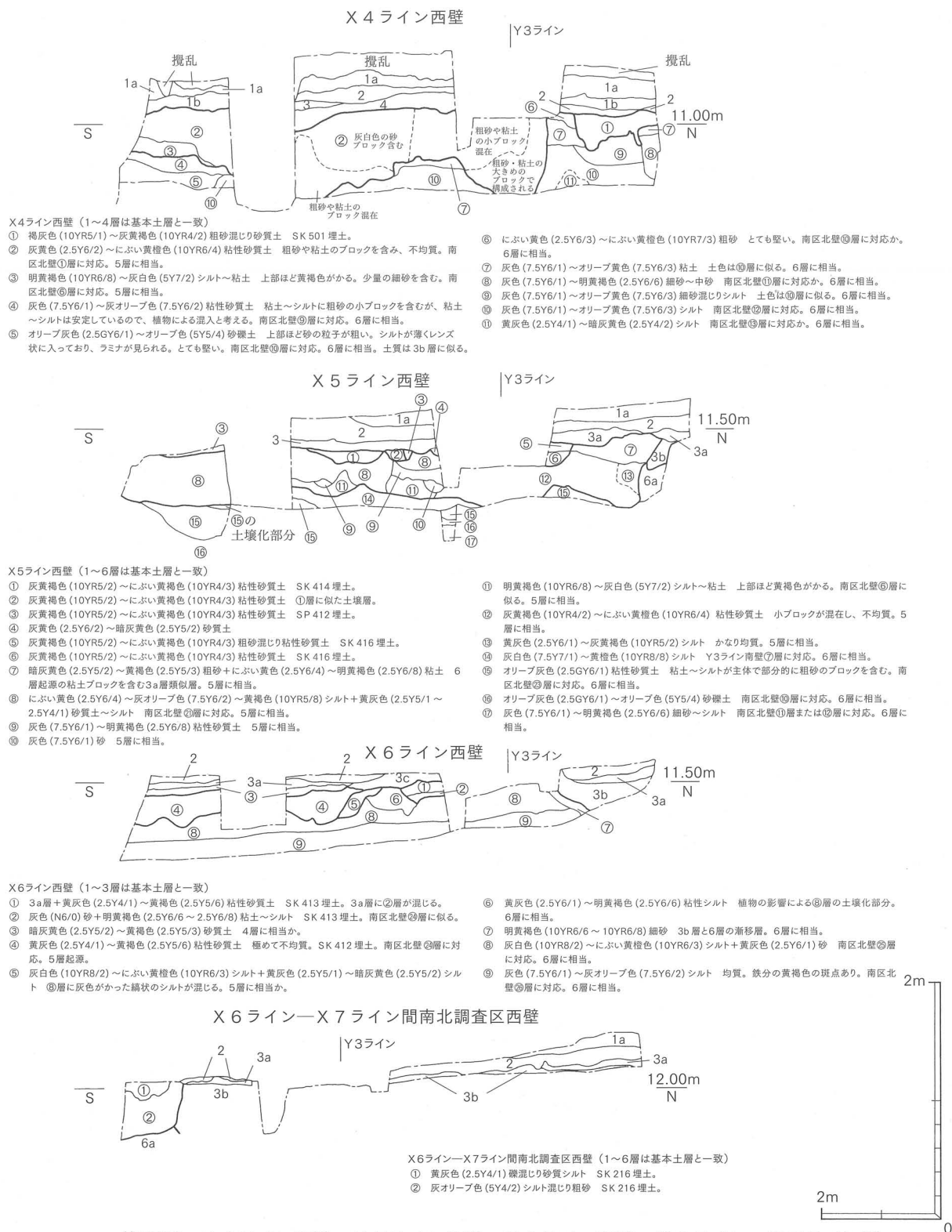
第32図 北区南壁・北区西壁・Y5ライン南壁・Y3ライン南壁・南区北壁土層断面図（垂直方向1/50・水平方向1/100）



第33図 S X 501内土坑状部分土層断面図 (1/20)



第34図 X 2 ライン西壁・X 3 ライン西壁土層断面図 (垂直方向 1/50・水平方向 1/100)



第35図 X 4 ライン西壁・X 5 ライン西壁・X 6 ライン西壁・X 6 ライン—X 7 ライン間
南北調査区西壁土層断面図 (垂直方向 1/50・水平方向 1/100)

側は、掘削の対象から外されている。また、X 4 ライン—X 5 ライン間には、幅約0.5～2.0mの掘削されていない部分が南北方向に延びているが、これも、6層が砂礫を中心に構成されている部分である。また、前項でも述べたように、調査区西端には5層は分布していない。北区西壁でも、S K 401埋土の分布が南部を中心に確認され、そのベースは6層になっており、北区西端における5層の分布は極めて限定的である (第32図 Y 5 ライン南壁土層断面図、図版23)。これは、S X 501の西肩の立ち上がり部

分を削平するようにS K 401が設定されたためと考えられる。おそらく、本来のS X 501の西肩部は調査区西端付近であろう。その一方で、北区北壁では広範囲に5層が確認された(図版22)ことから、S X 501の北端は調査区北端よりもさらに北側に想定せざるを得ない。S X 501の南端も、調査区内で終結していないので、調査区南端より南側に位置しているものと考えられる。

Y 5ラインとX 4ラインの交点の西側や、X 5ラインとY 3ラインの交点の北側で観察できたS X 501の壁面はかなり急である(第30・32・35図、巻頭図版8、図版19)。また、X 4ラインとY 3ラインの交点の北側のように、壁面がほぼ垂直であったり、オーバーハングしている部分もある(図版19)。各壁面の土層断面図にも見られるように、S X 501の断面形は概ね逆台形ないし矩形である(第32・34・35図)。ただし、掘削深度の制限のためにS X 501底面が平坦に見える状態で掘削を完了した範囲が多いことに留意しなくてはならない。S X 501底面には灰色や灰白色の粘性シルト、あるいは灰色の中砂～細砂の部分があり、これらは、6層内のブロックのように見えるものであった。しかし、これらを細かく観察すると、黒色や灰色のシルトブロックが混入しており、6層起源の再堆積土であることが判明した。そこで、これらを掘削したところ、北区南端のX 2ライン以西で検出したS K 504やX 2ライン・Y 5ライン交点付近で検出したS K 507から、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の弥生土器・土師器が出土した。このように、S X 501の底面には、灰色や灰白色の粘性シルト、灰色の中砂～細砂を埋土とする、径0.2～0.4m程度の円形や楕円形の掘り込みが多数存在しており、平坦ではない(第29・33図、図版20・21)。さらに、北区南壁(第32図、巻頭図版8、図版21・22)のように、断面台形状の掘り残し部分があることも確認された。これらは、裁頭円錐形に6層が残されているが、土坑群の掘削範囲を区切る境界等を示すものとして計画的に掘り残したものではなく、偶然この部分に土坑が掘られなかったことによる掘り残しと考えられる。このように、S X 501の範囲が均等に掘られたのではない。

あらためて、調査区各壁面で詳しく土層を検討したところ、5層中においても土坑状に土質が変わる部分が認められた。X 3ライン西壁(第34図、巻頭図版7、図版23)やX 3ライン東壁(第33図、図版21)、X 3ライン付近北区南端部北壁(第33図、図版21)などで観察できたこれらの土質変化から、5層内に掘り込まれた土坑が埋没した後に、土坑の上面がさらに掘り直されている様子が観察できる。つまり、S X 501は何度も掘り返しと埋没を繰り返した結果としての、遺構の集合体なのである。

S X 501から出土した遺物は劣化が著しく、器種や器形を詳細に検討することはできなかったが、掘削時に目にした土器片は比較的大きく、体部外面にタタキの残る甕片が多かった。また、煤の付着するものも認められた。このことから、S X 501出土の土器は供膳形態のものを含まず、概ね煮炊した甕や壺に限られると言える。これらは、S X 501の掘削時に、選択的に用いられていた弥生時代後期後半から古墳時代初頭の弥生土器・土師器の甕や壺のうち、破損して放置されたものが、S X 501に流入した蓋然性が高いと言えよう。このような特徴から、S X 501は、粘土採掘土坑群の可能性が考えられる。

ところで、基本土層5b層の下端に有機質黒色粘土が見られるが、これに相当すると考えられる北区南壁⑦層やX 3ライン西壁⑨層が、水平に面的な広がりを見せている様子が確認されたので、「黒色ブロック」と呼称した(図版21)。X 3ライン西壁⑨層は、S X 501の底面に藁や筵と言った有機質を敷設したことによるS X 501の最下層にも見えるが、北区南壁⑦層が6層内に堆積したのと考えられることから、植物遺体の自然堆積によるものとする。ちなみに、南区北壁⑨層のように、明らかに6層中にある、人間活動に関与しない有機質土の面的広がりが形成されていることから、黒色ブロックを遺構に伴う人為層と捉える必要はなからう。(白谷)

第4節 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦・石器・鉄製品などで、コンテナ6箱を数える。これらは、旧石器時代から近代にかけての多様な遺物である。この内、一定量出土しているのは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の弥生土器・土師器、古墳時代中期の埴輪、奈良時代後半から平安時代前期の須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器、戦国時代の瓦質土器・陶器・磁器である。

以下、包含層出土遺物と遺構出土遺物に分けて記述する。なお、打出小槌古墳の埴域推定の指標となる埴輪は、出土層位よりも出土位置に重きを置いたため、各包含層出土遺物とは区別して別項で述べる。

(1) 包含層出土遺物(第36・37図、図版26・27)

1層からは、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦・石器・鉄製品などが出土した。これらの遺物は年代・種類ともに実に多様であるが、いずれの個体もあまり残存率の高い破片である。出土遺物の下限年代は近世後半である。

1層出土遺物として図示したのは、合計18点である(第36図1～18、図版26)。この内訳は、土師器4点(1～4)、須恵器5点(5～9)、瓦質土器2点(10・11)、陶器3点(12～14)、磁器2点(15・16)、鉄製品1点(17)、石器1点(18)である。

1～4はいずれも土師器皿である。これらはいずれも手づくね成形で、1がにぶい黄橙色、2～4が灰白色を呈する。1は口縁部が肥厚し、端部はやや面をもつ、2段ナデの皿で、京都系土師皿Aに該当する〔中井2007〕。2は直線的に外に開き、口縁端部は面をもつ。極めて精良な胎土である。京都系土師皿Hに該当しよう〔中井2007〕。3は内彎気味に立ち上がる皿で、明確なナデ調整は見られない、在地的な土器である。4は板状の粘土の端部を折り曲げてナデ調整によって短い口縁部を作り出したもので、底部外面には指オサエ痕が明瞭に残る。これらは、平安時代末から室町時代のものが混在している。

5は壺の口縁部、6は高杯の杯部、7は小壺の頸部から体部、8は壺の底部、9は鉢である。5は直線的に外に開く口縁部の端部が玉縁状を呈する広口壺である。6は外面に櫛描き波状文が見られる無蓋高杯である。胎土、焼成ともに極めて良好で、外面は自然釉により光沢を帯びる。口縁部と杯部の境の段が明瞭である。7は体部下半にヘラケズリを施し、肩部以上は丁寧なナデ調整で仕上げている。5～7は古墳時代中期に位置づけられよう。8は推定底径5.4cmの小型壺の底部である。外面周辺部に貼り付け高台が付く。外面は工具による丁寧なナデ調整を行っており、奈良時代後半から平安時代前期のものであろう。9は口縁端部が断面三角形を呈する東播系須恵器の鉢で、口端部外面に自然釉が付着する。森田編年第三期第1段階に比定し得る、13世紀代のものと見られる〔森田1995〕。

10は羽釜の口縁部から鰐部、11は土鍋の脚部である。10は短い口縁部が直線的に外に開き、端部は面をもつ。河内を中心に分布する、16世紀代のものと見られる〔奥井2006〕。一方、11は磨滅しているがかすかに面取りが残る。残存長は9.65cmである。10よりは幾分古いものである。

12は瀬戸・美濃焼の小皿、13は唐津焼の碗、14は備前焼の播鉢である。12は折縁のソギ皿で明黄褐色から黄褐色の灰釉が掛かる。大窯4期(1590～1610年頃)のものであろう〔藤澤2001〕。13は外底面や外面体部下半が露胎の唐津焼である。灰白色の長石釉を施し、胎土目が3つ確認できることから、1590年代後半～1610年代のものであることがわかる〔村上2006〕。14は、描目が不明だが、口縁帯をもち、

端部を丸く収める特徴から、15世紀後半のものであることがわかる〔乗岡2000〕。

15は白磁皿、16は白磁紅皿である。15は口ハゲの中国製白磁で、13世紀後半頃によく見られるものである〔山本1995〕。16は肥前系の型押し成形の紅皿で、近世後期に大量生産されたものである。

17は鉄釘である。断面形は1辺0.7cm程度の方形で、長さは3.8cmを測る。

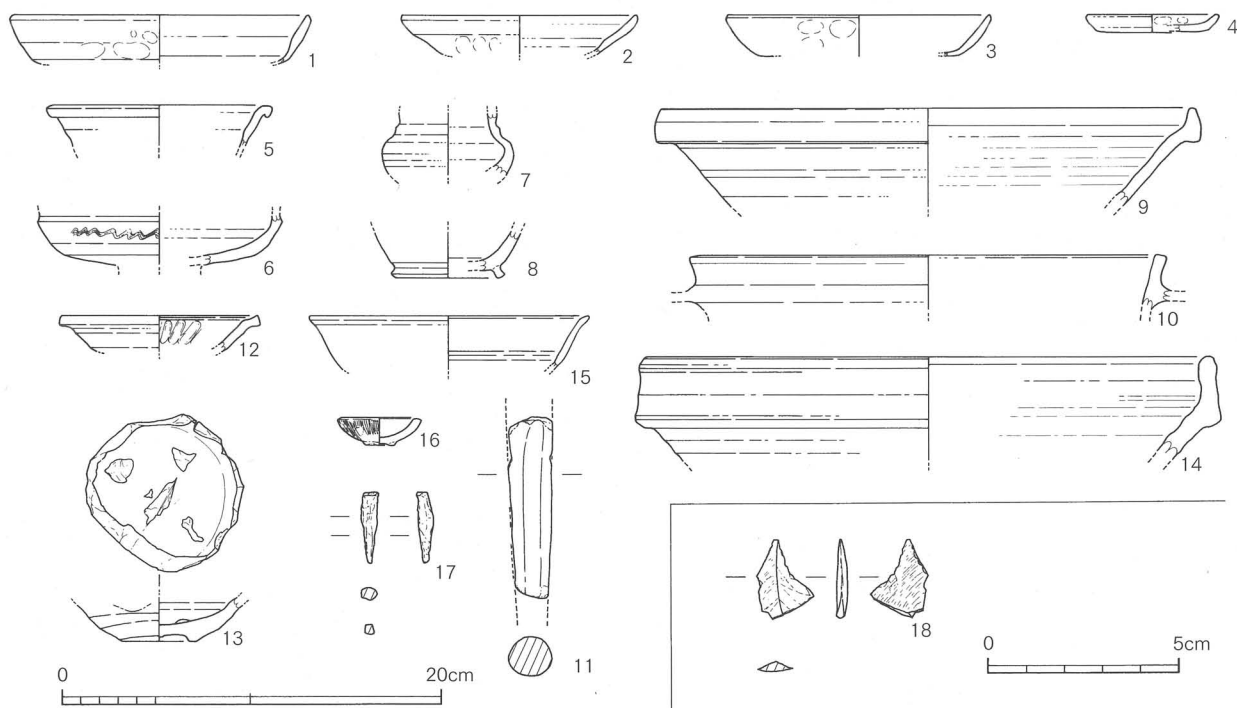
18はサヌカイトの剥片である。長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。二上山産のサヌカイトと見られる。旧石器時代のものであろうか。

2層からは、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器・埴輪・瓦・土製品などが出土した。その主たる帰属年代は古代後半から中世前半で、近世に下るものはほとんど見られなかった。なお、東区東端において奈良時代から平安時代前半のものが偏在する傾向が看取された。

2層出土遺物として図示したのは、合計19点である（第37図19～37、図版26・27）。この内訳は、土師器2点（19・35）、須恵器9点（20～26・33・34）、緑釉陶器1点（27）、瓦器5点（28～32）、瓦1点（36）、土製品1点（37）である。

19は脚部の剥離痕と見られる窪みがあるので、高杯の杯部と考えた。一方、35は土鍋である。直線的に外に開く「鉄かぶと形」の鍋で、口縁部外面が幾分肥厚していることから、15世紀後半から16世紀前半頃のものと考えられる〔岡田・長谷川2003〕。

20は杯蓋のつまみ、21は杯身、22～24は杯の底部、25は壺の頸部、26は播鉢、33・34は捏鉢である。20は高さ0.7cmの扁平な宝珠つまみである。21はやや内彎気味に立ち上がる、精良な胎土の杯身である。いわゆる播磨産であろう。22～24はいずれも断面が方形の小さな貼り付け高台を有し、体部下半は丸みを帯びる。これらの胎土は21と異なり、白色や灰色の砂粒を多く含む。なお、22・23の外底面はヘラ切り未調整である。25はやや外反する頸部をもつ細頸壺である。極めて精良な胎土を用いており、焼成は良好。頸部と体部の接合は2段接合と見られる。26は厚い円盤状の底部外面に多数の刺突文を施している。20～25は、奈良時代後半から平安時代前期のものであるが、26は古墳時代中期のものである。



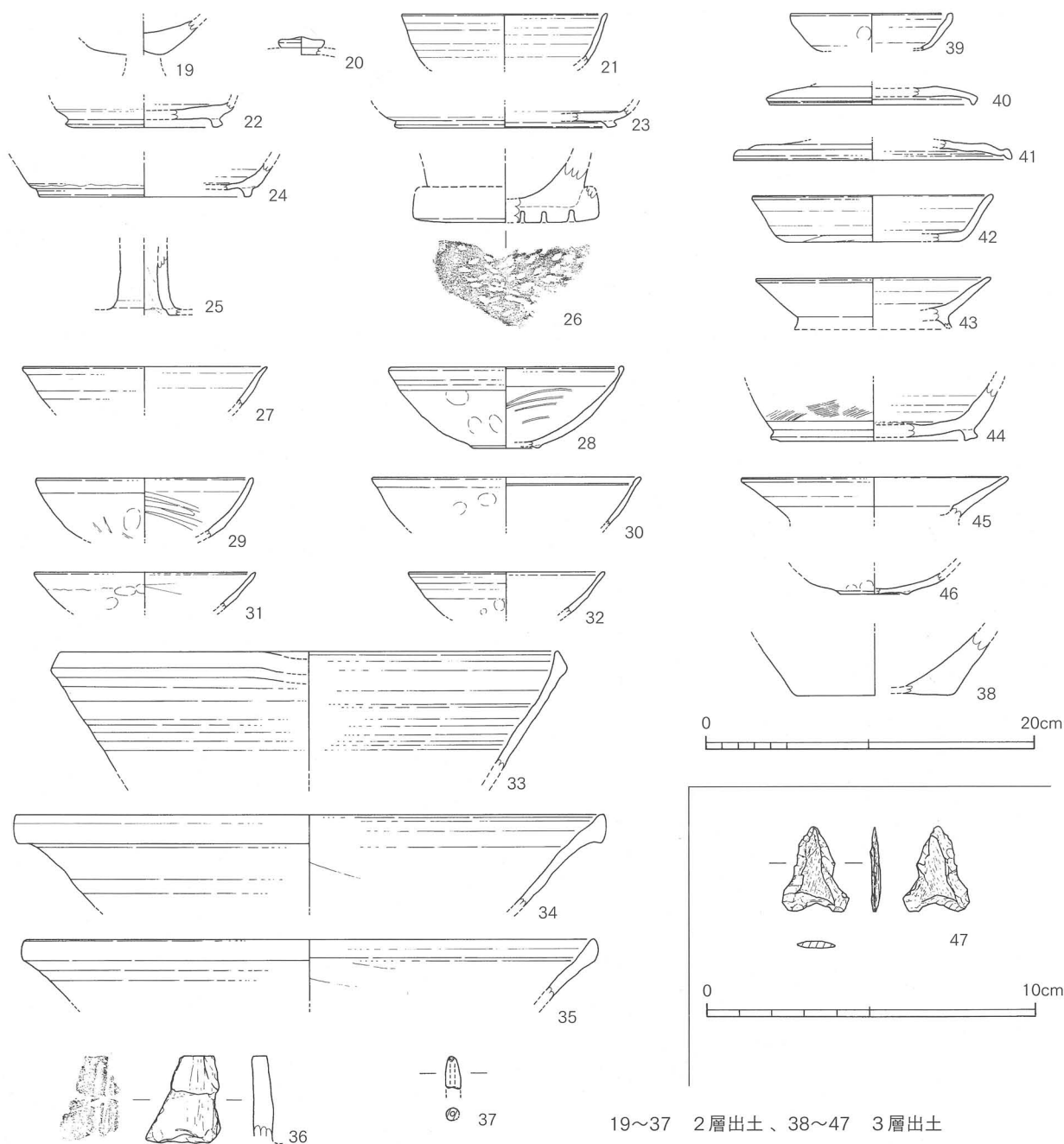
第36図 1層出土遺物実測図（1／4、18のみ1／2）

33と34は東播系須恵器の鉢である。口縁部形態から、33が12世紀末葉～13世紀初頭、34が13世紀前半～後半のものと考えられる〔森田1995〕。

27は口縁部が外反する碗皿類である。胎土は精良で、やや軟質の須恵質焼成のため、断面が灰白色を呈する。黄緑色の薄い釉薬が施されており、概ね9世紀後半の京都産と考えられる〔高橋2003〕。

28～32はいずれも碗である。内面に細い暗文が見られる28と、内面に幅広の暗文が観察できる29は比較的炭素の吸着がよいが、他は炭素がほとんど残っていない。いずれの個体も外面は暗文が確認できず、指オサエ痕が顕著である。これらは概ね12世紀後半から13世紀代の和泉産と見ることができる〔森島1995〕。

36は土師質焼成の丸瓦の玉縁部分である。凹面には布目痕が残り、凸面はナデ調整である。



第37図 2・3層出土遺物実測図（1／4、47のみ1／2）

37は土師質焼成の細い管状土錘で、直径0.8cm、残存長1.95cm、孔径0.35cmを測る。

3層は、上下2層（3a・3b層）に細分したところ、3a層からは、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・石器が出土した。一方、調査区東部で確認した3b層からは遺物の出土は認められなかった。

3層出土遺物として図示したのは、合計10点である（第37図38～47）。この内訳は、弥生土器1点（38）、土師器1点（39）、須恵器5点（40～44）、灰釉陶器1点（45）、瓦器1点（46）、石器1点（47）である。

38は底径の大きい壺の底部である。弥生時代中期のものであろう。

39は小形の皿で、二段のナデ調整が明瞭である。劣化が著しいが、へそ皿であらう。

40・41は杯蓋、42は杯身、43は台付皿、44は壺底部である。40・41は返りをもたない器高の低い蓋である。どちらも頂部を欠損しているが、天井部はヘラケズリの後、ナデを施している。40は天井部がやや丸みをもつ笠形であるが、41は天井部が平坦で、口縁部が屈曲するもので、ともにつまみを有する段階のものと考えられる。42は高台をもたない杯である。体部下半は丸みを帯びており、底部外面にもナデ調整を施している。43は、高台が底部の周縁に接着され、体部が高台脇から斜めに立ち上がる。このような皿は、兵庫県加古川市の志方窯跡群では8世紀後半代の操業と考えられる投松6号窯が初出とされる〔森内2001〕。また、兵庫県相生市の相生窯址群では、9世紀後半代には、台付皿の高台が平高台に変化することが知られている〔森内1995〕ので、43の帰属年代は8世紀後半から9世紀前半と捉えることができよう。44は底部外周部分に比較的しっかりした高台が付く。体部外面下端にハケ目が認められ、外底面はナデ調整が施されている。40～44は、奈良時代から平安時代前期のものである。

45は内面に薄く灰釉を施した段皿である。口縁部が直線的に外に開き、端部を丸く収める。27の緑釉陶器と同じく、9世紀後半頃のものと考えられる〔山下1995〕。

46は退化した高台をもつ碗である。炭素の吸着もあまく、13世紀代のものであろう〔森島1995〕。

47はほぼ完形の凹基無茎式石鏃で、サヌカイト製である。全長2.6cm、幅2.05cm、厚さ0.25cm、重さ1.1gである。

4層からは、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪が出土した。遺物は、概ね古代末期を下限とするが、いずれも細片であったため、埴輪の他に図化できるものはなかった。

5層からは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器が出土しているが、須恵器や埴輪は検出されなかった。5層はS X501埋土であるので、後の遺構出土遺物の項で述べる。

なお、6層は無遺物層である。

（白谷）

（2）埴輪（第3表、第38図、図版28・29）

今回出土が確認できた40点の埴輪片の内、磨滅の顕著なものを除いて図化できたものは29点である（第3表、第38図48～76、図版28・29）。しかし、これらも多少の磨滅を被っており、当然ながら原位置を保っているものはない。これらの内訳は、円筒埴輪23点（48～70）、形象埴輪6点（71～76）である。円筒埴輪は、口縁部5点（48～52）、突帯部分8点（53～60）、基底部2点（61・62）で、残りは胴部小片である。なお、図化した個体の胎土や色調、調整、焼成状態、出土地点・層位等は第3表に示しているので、ここでは概観した内容を記す。

口縁部は普通円筒埴輪の3点（48～50）とともに、朝顔形埴輪の2点（51・52）が見られた。これらの調整は、外面にはタテハケないしナナメハケが見られる。また、内面はハケ調整が主体であるが、48はヘラナデを用いている。口端部は、強いナデを施すもの（48・52）、丸く収めるもの（49）、平坦に収

めるもの(51)が見られる。

突帯部分8点(53~60)は、いずれも円筒埴輪の部材と考えられる。これらの突帯の断面形は台形状のものが主流である。ただし、54のように低いM字状のものや、57のように三角形に近い台形状のものも見られる。これらの破片の調整は磨滅により観察できないものが多いが、口縁部の破片と同様に、外面はタテハケが主流のようである。ただし、54は突帯より上側がヨコハケ調整、下側が斜め方向の板ナデに一部ヨコナデを加えたものである。また、内面の調整はほとんどがヘラナデやナデである。

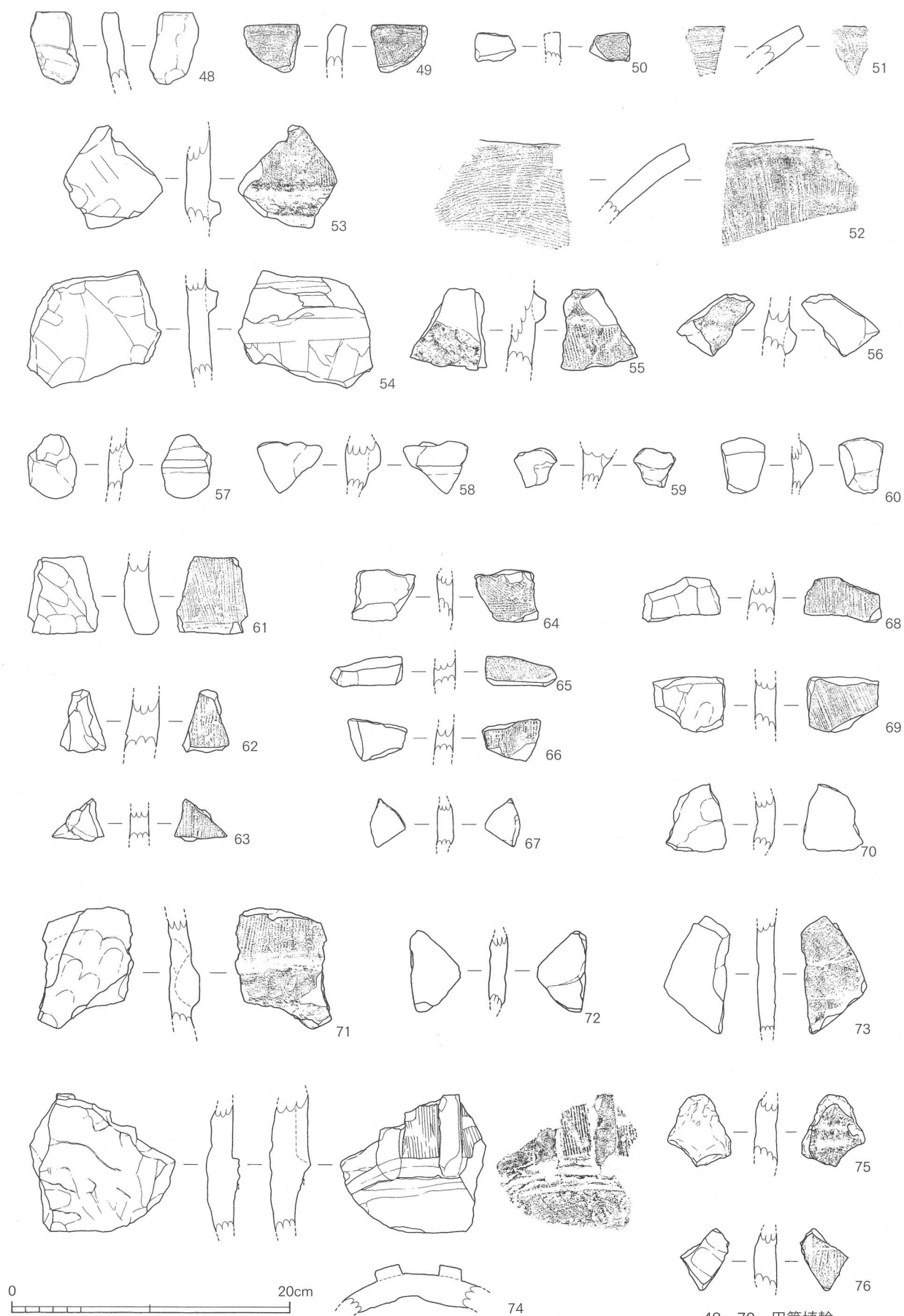
基底部2点(61・62)はどちらも器壁が厚く、須恵質焼成である。調整は外面がタテハケ、内面が粗いナデである点も共通している。61の基底端部は工具または指によるオサエがあり、端面は平坦である。胴部8点(63~70)は、外面がタテハケないしナナメハケで仕上げられたものが多く、ヨコハケが見られるものは、64のわずかに1点のみである。また、内面調整についても、ハケを用いていることが確認できるのは64のみで、ヘラナデやナデのみのものが主流となっている。なお、64は調整だけでなく、器壁も他の個体よりやや薄い。

形象埴輪6点(71~76)は、本来の形が復元できるものはない。

71は、低く幅広の突帯から、形象埴輪と判断した。内面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。72・75は磨滅が著しいが、板状を呈していることから形象埴輪と判断した。73も板状の破片である。外面を細かい丁寧なハケ調整で仕上げてから線刻を施し、さらに、黒色変化を伴う顔料も塗布されていることから、形象埴輪であることが明らかである。平行線や弧状を呈する線刻から、盾形埴輪の可能性が指摘できる。74は他の形象埴輪片が概ね板状であるのに対し、筒形に復元できる。外面にハケ調整を行ってから突帯状の粘土帯を貼り付け、さらにこの粘土帯に直交するように角柱状の粘土を2本平行に貼り付けている。この2本の角柱状の粘土帯は端部をヘラで垂直に整形し、この粘土帯を中心に黒色変化を伴う顔料が塗布されている。現状では、初めに貼り付けた粘土帯より下の部分すなわち図面の下半部は、灰色を呈する剥離面になっており、この部分に別の部材が貼り付けられていて、何らかの装飾が施されていたのは明らかである。一方、内面は指オサエやナデで成形されているが、粘土紐接合痕が明瞭に残っている。74は筒形に復元できることや粘土紐を貼り付ける装飾から、人物埴輪の腰や足の部分、あるいは、馬形埴輪の馬の背や鞍の部分ではないかと推測している。76は線刻の存在から形象埴輪としているが、外面のハケ調整の様相や器壁の厚さから考えると、ヘラ記号をもつ円筒埴輪の最上段とも考えられる。

以上のように、円筒埴輪については、外面調整は1次調整のタテハケないしナナメハケのみのものが多く、2次調整のヨコハケを施すものは少なかった。内面調整も、最上部を除くと、ヘラナデやナデによる調整が多く、ハケ調整で仕上げたものは乏しい。このような調整技法の傾向は、打出小槌遺跡第2・3地点〔第23集〕や第31地点〔森岡・辻2006〕の調査によって従来から知られている打出小槌古墳の埴輪の特徴と一致している。また、口縁部のヨコナデ調整や、台形を主体とし、若干M字状のものが見られるという突帯の断面形態も、打出小槌古墳の埴輪の特徴と一致している。よって、今回出土した埴輪については、打出小槌古墳に伴う埴輪と見て大過なからう。

また、打出小槌古墳に係る埴輪については、従来の調査において約3~4割が須恵質焼成並びに半須恵質焼成であると報告されている〔森岡・辻2006、第23集〕。今回の調査によって出土した埴輪も、にぶい橙色や橙褐色を呈する土師質焼成のものが主流を占めるが、半須恵質焼成や須恵質焼成で褐灰色や灰褐色、灰色を呈するものが7点(49・52・54・61・62・71・74)あり、須恵質焼成の埴輪が一定量含まれていると言える。土師質焼成のものについても、一見陶器のように見える硬質の焼き上がりを呈す



第38図 埴輪実測図 (1 / 4)

48~70 円筒埴輪
71~76 形象埴輪

第3章 発掘調査の成果

報告番号	実測番号	胎 土 ※	色 調	外面調整	内面調整	焼 成	備 考	出土地点・層位
48	30	A	にぶい橙～橙	磨滅により調整 不明	ヘラナデ	土師質（軟質）	口縁端部に強いヨ コナデ	X6ライン・Y3ライン 交点付近、3層上面
49	31	B	褐灰～灰褐 (断面) 褐灰	タテハケ	ヨコハケ	半須恵質	口縁部はヨコナデで 屈曲、端部は丸い	表土
50	58	B	にぶい橙	磨滅により調整 不明	ナナメハケ	土師質（硬質）	口縁部内面欠損	西区Y5ライン、1層
51	2	Aに似るが、シャ モットも多く含む	橙	ナナメハケ	ヨコハケ	土師質（硬質）	端部は平坦	西区Y5ライン、1層
52	101	3mm以下の白色 粒を多く含む	褐灰～にぶい橙	タテハケの後、端 部ヨコナデ	ヨコハケの後、端 部ヨコナデ	半須恵質	口縁端部に強い ヨコナデ	X5ライン・Y3ライン 交点付近、3層
53	91	C	浅黄橙	タテハケ	ナナメナデ	土師質（軟質）	台形の突帯	Y3ライン・Y3ライン 以西、2層
54	95	2mm以下の白色 ・黒色・赤色粒 を含む	灰～にぶい橙	(上段)ヨコハケ (下段)ナナメ板ナ デ後、一部ヨコナデ	ナナメ板ナデ	半須恵質	低いM字状の突帯	X5ライン・Y3ライン 交点付近、3層
55	1	C	橙～褐灰	タテハケ	ヘラナデ・ナデ	土師質（硬質）	台形の突帯	Y5ライン、1層
56	3	C	浅黄橙～にぶい 黄橙	磨滅により調整 不明	ヘラナデ・ナデ	土師質（軟質）	台形の突帯	X3ライン・Y3ライン 以西、3層
57	10	C	浅黄橙～にぶい 黄橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	三角形に近い台 形の突帯	X5ライン・Y2ライン —X3ライン間、4層
58	88	A	浅黄橙～にぶい 黄橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	台形の突帯	X3ライン・Y3ライン 以西、2層
59	82	A	浅黄橙～橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	突帯の上部欠損	西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
60	86	A	にぶい橙～橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	台形の突帯	西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
61	11	B	灰 (断面)にぶい赤褐	タテハケ	粗いナデ	須恵質	端部は指または工 具によるオサエ	X5ライン・Y3ライン 以西、2層
62	12	B	灰褐～褐灰	タテハケ	粗いナデ	須恵質		西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
63	80	D	にぶい橙～橙	タテハケ	粗いナデ	土師質（硬質）		X3ライン・Y3ライン —Y5ライン間、3層
64	104	B	にぶい橙～橙	ナナメハケ・ヨコ ハケ	タテハケ・ナナメ ハケ	土師質（硬質）		西区Y5ライン、2層 上面検出(1層)
65	87	3mm以下の白色 ・赤色・灰色粒 を含む	にぶい橙～橙	ナナメハケ	ナデか	土師質（硬質）		Y5ラインSR101、主 に1層
66	13	A	橙	タテハケ	ナデか	土師質（軟質）		西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
67	59	A	にぶい橙～にぶい 黄橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	胎土に縞状の文 様が見える	西区Y5ライン、2層 上面検出(1層)
68	103	D	にぶい橙～橙	タテハケ	ヘラナデ	土師質（硬質）		X5ライン・Y3ライン 交点付近、3層
69	78	D	橙	ナナメハケ	ヘラナデ・ナデ	土師質（硬質）	内面に粘土紐接 合痕	西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
70	85	D	橙～明黄褐	磨滅により調整 不明	ナデか	土師質（軟質）		西区Y5ライン・X3 ライン以東、2層
71	4	D	にぶい橙～褐灰	タテハケ	指オサエ	半須恵質	低い台形で幅広 の突帯・内面に 粘土紐接合痕	東区2層
72	55	D	にぶい橙～橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（硬質）	板状	西区Y5ライン、2層 上面検出(1層)
73	60	A	にぶい黄橙～橙	細かいハケ	指オサエか	土師質（硬質）	板状、線刻あり、 外面を黒色に彩色	西区Y5ライン、1層
74	102	Dに似るが、白色 粒は5mm大の ものを含む	にぶい橙～褐灰	ハケ	粗いナデ・指オサエ	半須恵質	粘土紐の貼り付け、 外面を一部黒色 に彩色、内面に 粘土紐接合痕	X3ライン・Y3ライン —Y5ライン間、2層
75	45	D	にぶい橙～にぶい 黄橙	磨滅により調整 不明	磨滅により調整 不明	土師質（軟質）	板状	X7ライン—X8ライ ン間・Y3ライン—Y 5ライン間、3層
76	73	A	にぶい橙～橙	ハケ	指オサエ	土師質（硬質）	線刻あり	西区Y3ライン・X3 ライン以東、2層

※胎土 A（2mm以下の白色・赤色粒を含む）
B（2mm以下の白色・黒色粒を含む）
C（5mm以下の白色粒と石英を多く含む）
D（細かい白色粒を多く含む。細かい黒色粒と石英も含む）

第3表 調査地点出土土輪観察表



第39図 埴輪出土分布図 (1/400)

るものが11点 (50・51・55・63～65・68・69・72・73・76) ある。どの個体も胎土は密で、白色粒を含む。ただし、この白色粒の大きさや量には違いがある。その他、赤色・黒色・灰色粒や石英を含んでおり、六甲南麓部に見られる土器の胎土と共通である。この点も、打出小槌古墳の埴輪の特徴を表していると言えよう。

ところで、各埴輪の出土地点を見ていくと、明らかな偏在性が指摘できる。第39図は、XラインやYラインのどの辺りから何点の埴輪片が出土しているかを示したものである。第39図に示したものに加えて、さらに、3点の埴輪片が西区Y5ラインにおいて出土している。このように、明らかに西区に埴輪片の出土が偏っていることがわかる。また、埴輪の出土層位は、1層が14点、2層が13点、3層が8点、4層が4点、S K315埋土が1点で、4層が他の土層より少ない傾向が見て取れるものの、3層以上に

についてもそれぞれに著しい差異は認められない。このことから、4層が耕作土として活用される段階ではすでに当該地に埴輪片が混入する状態になっていたことがうかがえるとともに、それよりも上位の土層が形成される過程においても埴輪の混入があったことがわかる。

これについては、4層より上位に堆積した土層が耕作土として活用される際に、4層形成時に流入していた埴輪片が掘り起こされて上位の層にも包含されるようになったとする考え方が成立する。一方、4層より上位に土層が堆積する過程でも、埴輪片が他所より流入し続けた可能性も考えられる。当該地に埴輪が供給される要因は、本来埴輪が樹立されていた打出小槌古墳の外表部の崩壊または削平による流入、ないし打出小槌古墳の外表部を削り取って当該地への移動などが考えられる。出土層位と出土地点の傾向から考えた場合、まず、調査区北東側の丘陵部から継続して埴輪が供給され続けたとは考えられない。また、調査区より標高が下がる南側や西側から継続して埴輪が流入し続けたと考えるのも適切ではあるまい。おそらく、4層形成時に打出小槌古墳の外表部も整地層として用いられ、この段階でまとまった量の埴輪が混入したのであろう。上位の耕作面が形成される段階でも打出小槌古墳の墳丘部分が整地層として用いられた可能性はあるが、この段階には埴輪を含む外表部はほとんど失われ、埴輪を含まない墳丘封土が用いられたと考えても大過なからう。このように類推した結果、4層形成次に混入した埴輪が起因となり、より上位に耕作地が営まれるようになってからも、当該地の耕作土には埴輪が混入することになったと考えるに至った。(白谷)

(3) 遺構出土遺物(第40・41図、図版27・30)

遺構から出土した遺物は合計25点を図示した(第40・41図77~101、図版27・30)。第1遺構面遺構出土遺物が5点(77~81)、第2遺構面遺構出土遺物が3点(82~84)、第3遺構面遺構出土遺物が2点(85・86)、第4遺構面遺構出土遺物が1点(87)、第5遺構面遺構出土遺物が14点(88~101)である。

第1遺構面に伴う遺構から出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪・瓦など多様である。図示したものは、77・78が犁痕から、79がS K 101から、80・81がS R 101から出土した。

77は土師器小皿である。口縁部が外反する小形の皿で、15世紀頃のへそ皿である。78は龍泉窯系青磁碗である。内面に劃花文を施しており、12世紀末~13世紀初頭頃の資料と考えられる。犁痕から出土した遺物で図示した2点は中世に遡る資料であるが、犁痕からは、近世の陶磁器片も出土しているので、これらは近世に下る耕作痕と考える。

79は、ほぼ完形の施釉陶器の脚付灯明皿である。外面に灰オリーブ色の釉薬が掛かり、露胎の脚台部外面には回転糸切り痕が認められる、近世後期以降の資料である。S K 101からは須恵器片や土師器片も出土しているが、79や瓦の存在から、S K 101は近世後期以降に下る遺構と言える。

80は龍泉窯系青磁蓮弁文碗の底部である。蓮弁は粗い片切り彫りで、外底面の一部を除き高台にも施釉されていることから15世紀代のものと考えられる〔山本1995〕。81は備前焼播鉢の底部である。放射状の櫛描きの播目が認められ、良質の胎土を用いて暗赤褐色を呈することから、15世紀後半から16世紀のものと考えられる〔乗岡2000〕。80・81はS R 101から出土した遺物であるが、S R 101からは近世後半に下る陶器や瓦も出土しているので、近世後期以後の遺構であることは明らかである。よって、80・81は本来S R 201に含まれていた可能性が指摘できる。

第2遺構面に伴う遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器などである。図示したものは、82がS K 208から、83・84がS R 201から出土したものである。

82は瓦器碗の底部である。断面三角形の高台を有しているので、12世紀後半～13世紀のものであろう。S K 208からは土師器片と須恵器片も出土しているが、遺構の年代として82の年代を充てたい。

83・84は瓦質土器羽釜である。どちらも、口縁部外面に2条の凹線を有し、ほぼ水平に伸びる短い鰐部の端部が丸く収まる。内面は、口縁部に粗い原体によるハケ調整、体部に細かい原体によるハケ調整が見られる。ケズリが施された体部外面は、煤が付着している。兵庫津遺跡出土の羽釜形タイプB系列のⅢA類〔岡田・長谷川2003〕と見られることから、15世紀後半～16世紀初頭のもものと判断した。S R 201から出土した遺物は、この他に弥生土器・土師器・須恵器の破片があるが、83・84やS R101出土の80・81の存在から、S R 201が中世後半にすでに機能していた可能性が考えられる。

第3遺構面に伴う遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪などである。図示したものは、85がS K 315から、86がS P 329から出土したものである。

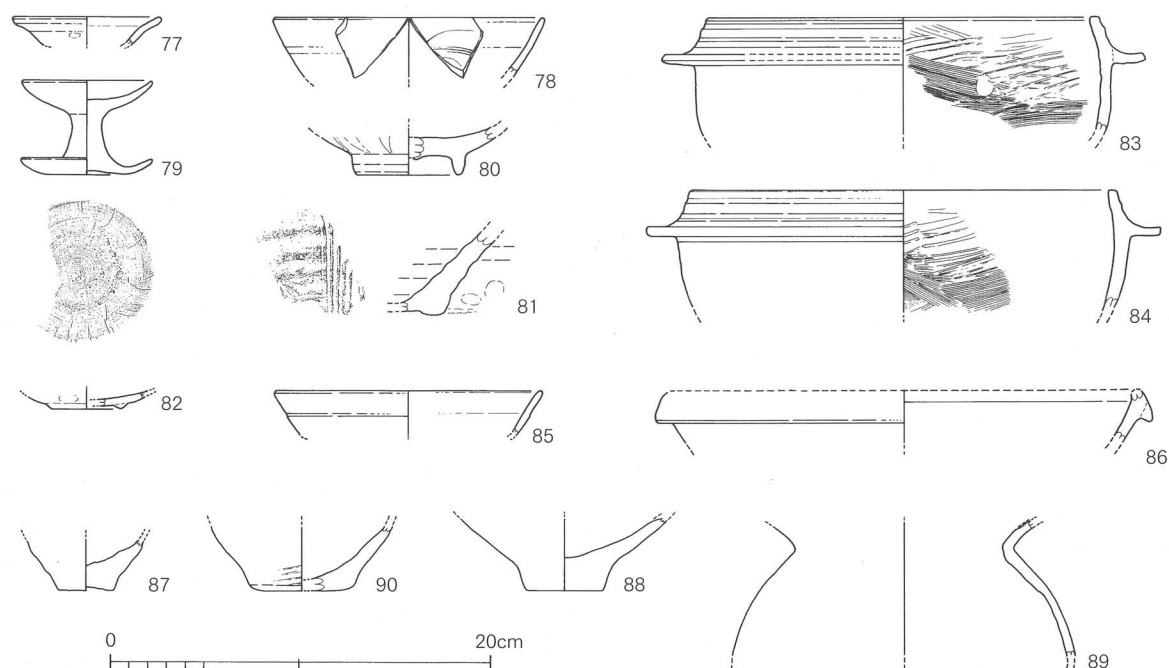
85は口径13.8cmに復元される土師器中皿である。橙色を呈し、丁寧なナデ調整を施すⅠタイプの皿〔伊野1995〕と判断できるので、15世紀代のもものといえる。S K 315から出土した遺物は85と埴輪の微細片なので、遺構の年代を85に求めると、戦国時代の遺構と言うことになる。

86は東播系須恵器鉢の口縁部である。口縁端部内面は欠損しているが、口縁端部が上下に拡張して縁帯を形成している様子がわかるので、森田編年第Ⅲ期第2段階以降、即ち14世紀前半以降のものと言える〔森田1995〕。S P 309から出土した遺物は86のみなので、S P 309は14世紀前半以降の遺構となる。

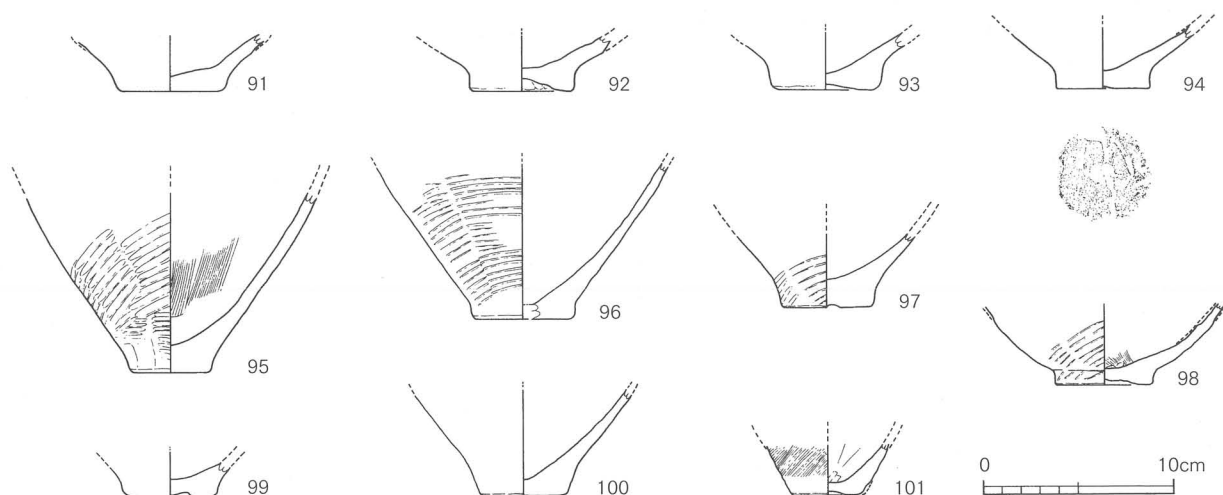
第4遺構面に伴う遺構から出土した遺物は、弥生土器・土師器などである。図示したものは、S K 412から出土した底部片1点（87）である。87は底径が小さいので鉢と考えられる。赤褐色を呈するが、磨滅と剥離が著しいため調整は不明である。弥生時代後期後半から古墳時代初頭と考えられるものであり、5層に由来するものであろう。このため、87をもって、S K 412の年代を決めることはできない。

第5遺構面に伴う遺構から出土した遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器である。図示したものは、88・89がS K 501から、90がS K 503から、91～101がS X 501から出土したものである。

88・89は灰白色を呈する甕であり、同一個体の可能性が大きい。底部が突出し、体部が丸みを帯びた



第40図 遺構出土遺物実測図(1)(1/4)



第41図 遺構出土遺物実測図(2)(1/4)

ものである。90も甕である。88と比べると底部の突出があまく、体部の膨らみが弱い。これらは、S X 501出土遺物とほぼ同時期のものと考えられる。

S X 501からは27ℓ容量のコンテナ1箱分の遺物が出土した。出土遺物は弥生土器もしくは土師器に限られ、須恵器は認められなかった。これらの土器は包含されている粘土に密着してしまっており、器形がわかるような大きな破片で出土したものでも、取り上げる際に粉々に壊れてしまうものがほとんどであった(第42図)。そのため図化できたものは少ない(第41図91~101)。

91~94は壺の底部と考えられる。いずれも器表が磨滅しており、調整は不明であるが、その多くがナデ調整であろう。94の底面には、木葉痕が認められる。

95~97は甕の底部と考えられる。いずれも右上がりのタタキが施されている。95には底部あたりに水平のタタキ、内面には斜め方向のハケが認められる。95の外面には炭化物が若干付着しており、96にも炭化物が付着している。

98~101は鉢の底部と考えられるが、甕が含まれているかもしれない。98には外面に右上がりのタタキ、内面にハケが施される。101には外面に右に上がる斜め方向のハケ、底部内面にはへら状工具による圧痕が認められる。



第42図 X 5ライン東壁面における土器検出状況
(西から)

これらの土器をはじめとして出土土器の大半が、森岡・竹村編年の西撰2~4様式におさまると考えられる〔森岡・竹村2006b〕。このことから、S X 501は弥生時代後期後半~古墳時代初頭のものとして推測される〔森岡・西村2006〕。

器種構成では、出土土器すべてを検討した結果、壺・甕・鉢が確認される一方で、高杯が欠落していることが特色として挙げられる。加飾されたものも認められなかった。色調は、全体的に淡黄灰色~淡灰黄色を呈する傾向がある。

(白谷・竹村)

第4章 まとめ

第1節 時期的検討による調査成果

(1) 検出遺構から見た成果

今回の発掘調査によって検出された遺構は、中世から近世にかけて営まれた第1～4遺構面検出の耕作面と、第5遺構面検出の弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものに大別できる。前者は、土坑やピット、流路を伴い、犁痕や足跡の残る耕作面である。一方、後者は、S X501をはじめとする粘土採掘土坑群である。

第1～4遺構面検出の耕作面は、翠ヶ丘丘陵から宮川へ下っていく段丘端斜面地に経営され、東から西へ下る雛壇状を呈する。この耕作地の段差に伴って、流路S R101・201やS K401のように、耕作地を潤す水路が南流している。これらの耕作面には明確な洪水痕跡は乏しく、調査地点が安定した耕作地として連綿と営まれていた様子が確認できる。

なお、第5遺構面のS X501については、次節で考証する。

(白谷)

(2) 出土遺物から見た成果

次に、出土遺物から、当該地やその周辺の土地利用の変化について言及する。

打出小槌遺跡では、既往の調査で旧石器時代や縄文時代の遺物・遺構が確認されている。しかし、当該地では、後期旧石器時代に遡る可能性のあるサヌカイト片を除くと、これらの時期の遺物がほとんど出土していないため、不明である。

弥生時代については、先述した弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺構に先立つ資料の出土は極少量である。また、これらの遺構に続く、古墳時代前期のものは見られない。これに対して、打出小槌古墳が築造された古墳時代中期に関連する遺物は確認されている。ただし、これらの量は限られており、打出小槌古墳に関する情報は乏しい。また、これに続く古墳時代後期から奈良時代前期の資料は確認されなかった。

奈良時代後期から平安時代前期の遺物は一定量認められる。当該地では、この時期の遺物は東区東端部に偏在する傾向が看取されるので、当該地北東部から東部にかけて集落が展開したものと推測する。しかも、この中には緑釉陶器や灰釉陶器が含まれているので、単なる一般集落が展開しただけではなく、官衙的な色彩を帯びていると言えよう。当該地は翠ヶ丘丘陵の南西縁辺部に位置しており、現状地形でも当該地の北東側がさらに一段高くなっており、比較的平坦な丘陵頂部となっている(第13図)。この部分は、近代以前の海岸線からは1 km程度の距離であり、海岸平野との比高差が数mあるので、平野部や大阪湾を広範囲に見渡すことができる。加えて、丘陵の後背部の傾斜は緩やかであり、自然災害の怖れが極めて低いと言った良好な立地条件を備えている。また、丘陵の南縁辺部には、打出付近で分岐する西国街道の本街道と浜街道が走っている。ちなみに、昭和2(1927)年に開設された国道2号線は、丘陵部分を東西に貫いているが、古代山陽道の推定ルートとして幾通りか復元提示されている案も、概ね、国道2号線付近から西国街道(浜街道)付近の間を通る[森岡2003a]。このように、調査区北東側の丘陵部は、古代においても東西交通の便の極めて良い地点であったと言える。

ところで、古代山陽道や西国街道を1 km余り西に辿ると芦屋川右岸に至る。芦屋川右岸には葦屋郷が展開していたと推定されるとともに、扇状地の高位部と末端の低位部に古代の「官衙ブロック」の存在が想定されている〔森岡2001b・2003b〕。とくに、古代山陽道が近接するとされる低位の官衙ブロックには、「驛」の墨書土器を出土したことにより葦屋駅家等の想定地として注目されている神戸市深江北町遺跡をはじめとして〔山本編2002、兵庫県立歴史博物館2002、森岡2003b〕、特徴的な遺跡が確認されている。奈良～平安時代の瓦や土器を出土し、字名から古代山陽道の通過が想定される前田遺跡〔森岡2002c〕、奈良時代末～平安時代の大規模な掘立柱建物群の検出された津知遺跡〔阿部1993a・1993b、森岡1999a〕、12世紀代の園池や井戸を検出した六条遺跡〔第41集〕等が挙げられる。

一方、当該地は宮川流域に展開した賀美郷に含まれると推定されている〔森岡2003b〕。宮川流域は芦屋川右岸と比べると、墨書土器や円面硯、緑釉陶器、古代瓦などの官衙的な色彩を帯びた資料の出土は少ない。このような条件下で、緑釉陶器や灰緑釉陶器を伴う、一般集落とは様相を異にする遺跡の性格としては、郷に関わる郷家や郷寺を想定することも可能であろう。ただし、打出小槌遺跡やその周辺部では古代瓦の存在がほとんど確認できないことから、郷寺の可能性は低いと思われる。

しかし、平安時代中期に普遍的に出土する「て」の字状口縁の土師器皿や平底の須恵器碗、黒色土器等がまったく認められないことから、平安時代中期になると丘陵上の官衙的な色彩を帯びた集落は姿を消したようである。

その後、平安時代末期から鎌倉時代になると、牛馬耕を行う耕作地が一面に広がり、遺物も一定量見られるようになる。ただし、特殊な遺物は認められないので、一般的な農村であったと考えられる。その後も、多少の量の増減はあるが、中世、近世を通じて遺物が出土しており、当該地には常に人間の営みがあったことがわかる。とは言え、当該地は西国街道沿いから北に外れており、集落本体ではなく、集落に近接する耕作地であったと考えられる。ちなみに、大正期から昭和初期頃の打出春日地区における西国街道周辺の景観でもその様子はほとんど変わっていないようであり〔第9集〕、近代に至るまで、当該地には久しく田園風景が広がっていたと言える。

ところで、既往の調査により、打出小槌古墳の周濠の埋没や墳丘の削平の時期を中世後半に求める見解が提示されている〔森岡1993〕。これに加えて、平安時代末期から鎌倉時代に打出小槌遺跡の立地する低位段丘上で耕作地が経営されるようになった段階にも、打出小槌古墳の墳丘や周濠に改変が加えられたと考えられる。

(白谷)

第2節 S X501の性格について

第5遺構面検出のS X501は、前章でも報告したとおり、東西約35m、南北約30mの範囲に検出され、深さは最大で0.6mを測る。調査区内で確認したS X501の面積は約550㎡で、掘り起こされた土量は180 m³を超えると推測される。ここでは、前章で粘土採掘土坑群と推定するに至った経緯を述べる。

遺構の性格については、まず、当該地に墳域が及んでいると推測されていた打出小槌古墳に関連する遺構であるかどうかが焦点となった。打出小槌古墳に関連する遺構であると捉えるならば、周濠に関わるものか墳丘に関わるものと考えざるを得ないので、両者の可能性について検討を加えた。

周濠に関わる可能性、即ち、S X501埋土が周濠埋土である可能性については、埴輪の破片も葺石に用いられた円礫もまったく出土しなかったことから、容易に否定することができた。一方、墳丘の可能

性については最後まで否定することが難しかった。

前方後円墳の構築の際には、墳裾部や一段目は基盤層を削り出して成形し、その上に盛土を施して上部を構築することが知られている。この点から考えると、S X 501が明らかに基盤層を掘り込んでいることから、この掘り込み自体が墳丘一段目の基盤層の削り出しであり、S X 501埋土とした5層が墳丘盛土に該当するのではないかという仮説が提示できる。墳丘盛土であるならば、埴輪や葺石に用いられた円礫が含まれていないことも十分説明がつく。しかし、墳丘を削り出すと言うことは、当然その周辺は削り出した墳丘よりさらに低く造成されるはずであるのに、S X 501の北側や東側は基盤層が削られずに高いまま残されているので、この考えも成立しないことになる。さらに、5層内に砂の流入が認められることから、通常の墳丘盛土とは考え難い。

そこで、新たに提示された仮説は、S X 501が墳丘構築時に行われた地盤改良の痕跡ではないかというものであった。この考えの背景には、S X 501の掘開がシルトや粘土を主体とする層をベースとする範囲に限られており、砂礫を中心に構成されている部分は掘削対象から外されていることがあった。つまり、堅くしまっていて安定している砂礫層は古墳の基盤としてそのまま利用するが、シルトや粘土を主体とする、古墳の基盤としては軟弱な部分については、一度掘削を行い、砂を混入して突き固めることにより、基盤としての強度をもたせようとしたのではないかと言うものである。この考え方も、埴輪等の混入がないこととの整合性を保てると言える。しかし、墳丘構築のための地盤改良であるならば、当然そこには範囲を区切る企画性や、掘削方法に関する規則性が存在するはずである。にもかかわらず、S X 501の底面の凹凸や、所々に断面台形の島状の掘り残しがあると言った無秩序な掘削の仕方と、土坑状の掘り込みが錯綜する状態から、S X 501の掘削に計画性があったとは考えられない。よって、S X 501を墳丘基盤形成のための地盤改良の痕跡と考えることもできない。このように、S X 501は打出小槌古墳に関連する遺構とは考えられないことが明らかになった。

そこで、改めてS X 501の特徴について考える。S X 501からは弥生時代後期後半の弥生土器ないし古墳時代初頭の土師器の甕や壺等のみが出土するので、S X 501の年代はこの時期と考えたい。この場合、S X 501がシルトや粘土を主体とする層をねらって、何度も掘り返しと埋没を繰り返した遺構の集合体と考えられる点に着目する。また、出土した遺物の器種構成は、高杯のような供膳用のものを含まないといった特色が挙げられる。以上の点から、S X 501の性格は、シルトや粘土を採取することを目的とした土坑群、つまり、粘土採掘土坑群と考える。この場合、S X 501の周辺に展開していたS K 501～503にも同様の性格を付与したい。ちなみに、粘土採掘土坑群については、兵庫県下では最近、朝来郡和田山町（現朝来市）の筒江浦石遺跡で検討されている〔荒木2001〕。ここでは、良質の灰色粘土層を掘り込んだ、不整円形の土坑が密集して検出されている。一見溝状に見えるこの土坑群は、シルトブロック土を埋土としており、木製品と土師器が出土している。ちなみに出土土器の9割以上が甕であり、遺構の年代は古墳時代初頭に限られる。良質の粘土部分に集中して土坑が掘られていることや、土器の多くが容器であること、遺構の年代など、S X 501に共通する点が多い。

芦屋市域では、S X 501と同時期の集落跡が数多く展開している〔第40集ほか〕。打出小槌遺跡周辺では、小松原遺跡や若宮遺跡が知られるので、当該地は、このような近在の集落に土器の材料となる粘土を供給する場であったと考えられる。さらに、芦屋川の右岸地域にも、当該期の集落が多く展開している。ところで、芦屋市内出土の弥生土器や土師器については、鈹物組成の違いや色調から、芦屋川水系諸遺跡の「褐色系土器群」と宮川水系諸遺跡の「灰色系土器群」に区分する考え方が提示されている。

〔森岡1980、森岡・辻2007〕。また、若宮・打出岸造り・寺田遺跡の土器の胎土剥片観察では、土器胎土に含まれる鉱物片・岩石片の種類にほとんど差異はないものの、胎土に含まれる粒度組成に関しては芦屋川水系と宮川水系では違いが認められる〔辻・矢作・辻本・田中・パリノ2003〕。ただし、母材となった土器材料の由来については今のところ不明であるので、芦屋川右岸地域の集落からも、当該地に粘土を求めて人々が訪れた可能性について、今後検討していく必要があるだろう。

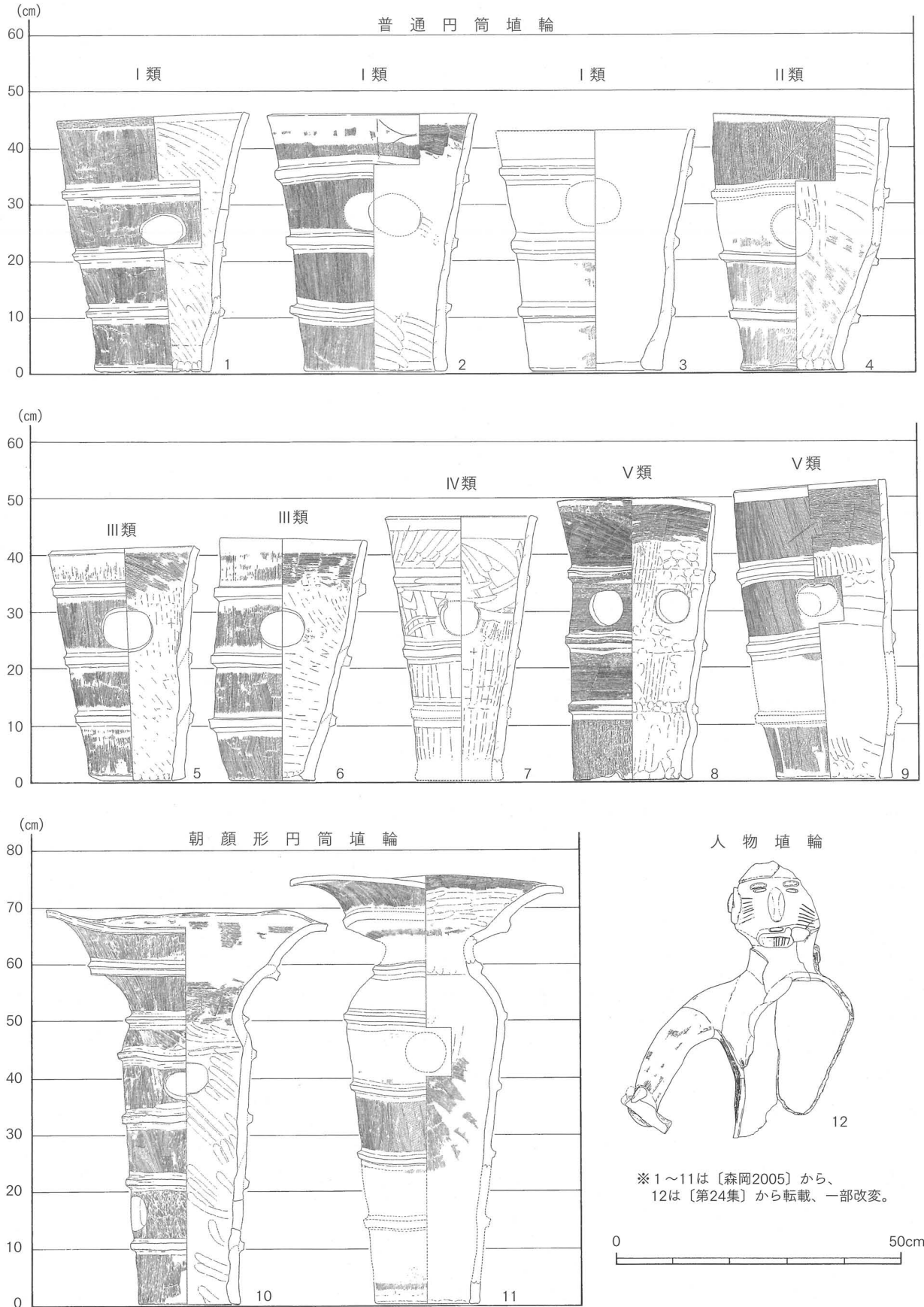
また、S X501から出土した土器は、採取した粘土を収めるために持ち込まれたのではなく、粘土採掘時に、飲み水や作業に用いる水を供給するために用いたものと考えられるものもあながち無理ではあるまい。
(白谷)

第3節 打出小槌古墳の墳域について

今回発掘調査を実施した調査地点は、これまでに実施された周辺調査の成果に基づき、打出小槌古墳の周濠が巡ると推定された地点である〔第40集〕。しかし、今回の発掘調査では、周濠や墳丘の痕跡はまったく検出されず、古墳に関わる遺物の出土も極めて限定的なものであった。埴輪の出土は確認されたもののそのほとんどが小片であり、極小片を加えて辛うじて40点を数えるのみであった。また、打出小槌古墳では花崗岩円礫を中心とする拳大の礫を葺石として用いていることが知られているが〔森岡・辻2006、第23集ほか〕、本発掘調査では葺石の可能性をもつ礫は1点も検出されなかった。さらに、打出小槌古墳が築造された古墳時代中期の土師器や須恵器の出土も乏しかった。

以上の結果から、当該地と打出小槌古墳の位置関係について、次に挙げる三案が考えられよう。第一案は、当該地はまさしく打出小槌古墳の周濠が掘られた位置であったが、墳丘のみならず、周濠までもが完全に失われてしまい、まったく何の痕跡も残していないと言うものである。第二案は、打出小槌古墳自体が大きく、周濠は当該地よりさらに北側に位置しており、当該地は打出小槌古墳の墳丘構築部分に含まれていたが、墳丘や墳丘築造時の整地面はすでに削平されてしまったと言う見方である。第三案は、これとは逆に、打出小槌古墳が小さく、当該地が墳域外である、即ち打出小槌古墳の墳丘や周濠が、当該地より南側に収まると言う見方である。この三つの可能性について、それぞれの当否を述べたい。

まず、第一案の検証として、これまでに検出された周濠の検出レベルとの比較を行う。打出小槌古墳の周濠が検出された地点として、打出小槌遺跡第1地点、第3地点、第31地点がある。この内、第1地点では、前方部前面の南端付近の周濠が検出されており、第1地点のすぐ西側の第31地点では、前方部南側面の周濠が確認されている。両地点で確認された周濠の検出レベルならびに周濠の底面レベルは、第1地点が約10.4mと約9.2m（〔第23集〕所収の「昭和61年打出小槌古墳調査区北壁（一部）」からの読み取り）、第31地点が約10.0mと約9.2m（〔森岡・辻2006〕所収の「D区堆積層断面図」からの読み取り）である。ところで、今回調査を実施した調査区における5層検出レベルは約11.0mであり、第1・第31両地点で検出した周濠の検出レベルよりも明らかに高い。5層が打出小槌古墳構築以前に形成されたものであることが明白である以上、当該地に周濠が位置していたならば、その底面レベルは11.0mよりも高いことになる。『芦屋市下水道台帳図（汚水）』によると、現在の道路面に設置されている下水道マンホールの上面レベルは、第1地点や31地点の南面道路では10.30mや9.65mを測るのに対して、当該調査区西面道路では10.14mや10.68mであり、道路面レベルは最大で1mほど異なる。このような地形的な制約の影響を受けて、周濠の底面レベルが前方部南側と後円部北側で異なることは十分に考えられる。



打出小槌遺跡第1地点出土埴輪 8・10・12、打出小槌遺跡第31地点出土埴輪 1～7・9・11

第43図 打出小槌古墳出土の埴輪実測図 (1/10)

しかし、道路面の比高差を考慮すると、周濠底面レベルが11.0mより高いとは考えがたい。仮に、古墳築造時の傾斜が現在推測するものよりも遙かに急であったとしても、S X 501が深さ0.6mも残されていることを勘案すると、墳丘だけでなく周濠の底面までも完全に削り取ってしまうような大規模な地形改変が行われたとは考えられない。

また、葺石と考えられる円礫がまったく出土しなかったことも重要である。古墳の墳丘削平の目的が、耕作地の確保であった場合、企画性のある円礫は、水田段差や水路の肩部の補強用に現地で再利用されるものである。それにも関わらず、このような礫が1点も出土しないと言うことは、元々当該地にこのような礫は存在していなかったと見るべきであろう。よって、第一案は成立しないものとする。

次いで、第二案については、実際に墳丘部分に相当した第2地点の調査記録との比較が有効であろう。第2地点では20㎡余の調査区において、多くの埴輪が出土するとともに、室町時代末を前後する頃のものとして推測される溜池状の遺構が検出されており、この頃には墳丘が失われていたことがわかる〔第23集〕。今回の調査地点出土の埴輪に対して、第2地点で出土した埴輪の破片がより大きい傾向が認められる。また、調査面積に比して埴輪の点数が多い点も指摘できる。この背景には、溜池状遺構に埴輪片が埋没したために、埴輪片が比較的良好な状態で保存されたと言ったことがあったかもしれない。しかし、当該地と第2地点では、墳丘の中軸線より南側と北側といった違いや、前方部側と後円部側といった違いがあるにしても、出土した埴輪の量に圧倒的な格差が認められる。この点から考えたとき、当該地に墳丘が存在していたとは考えにくい。

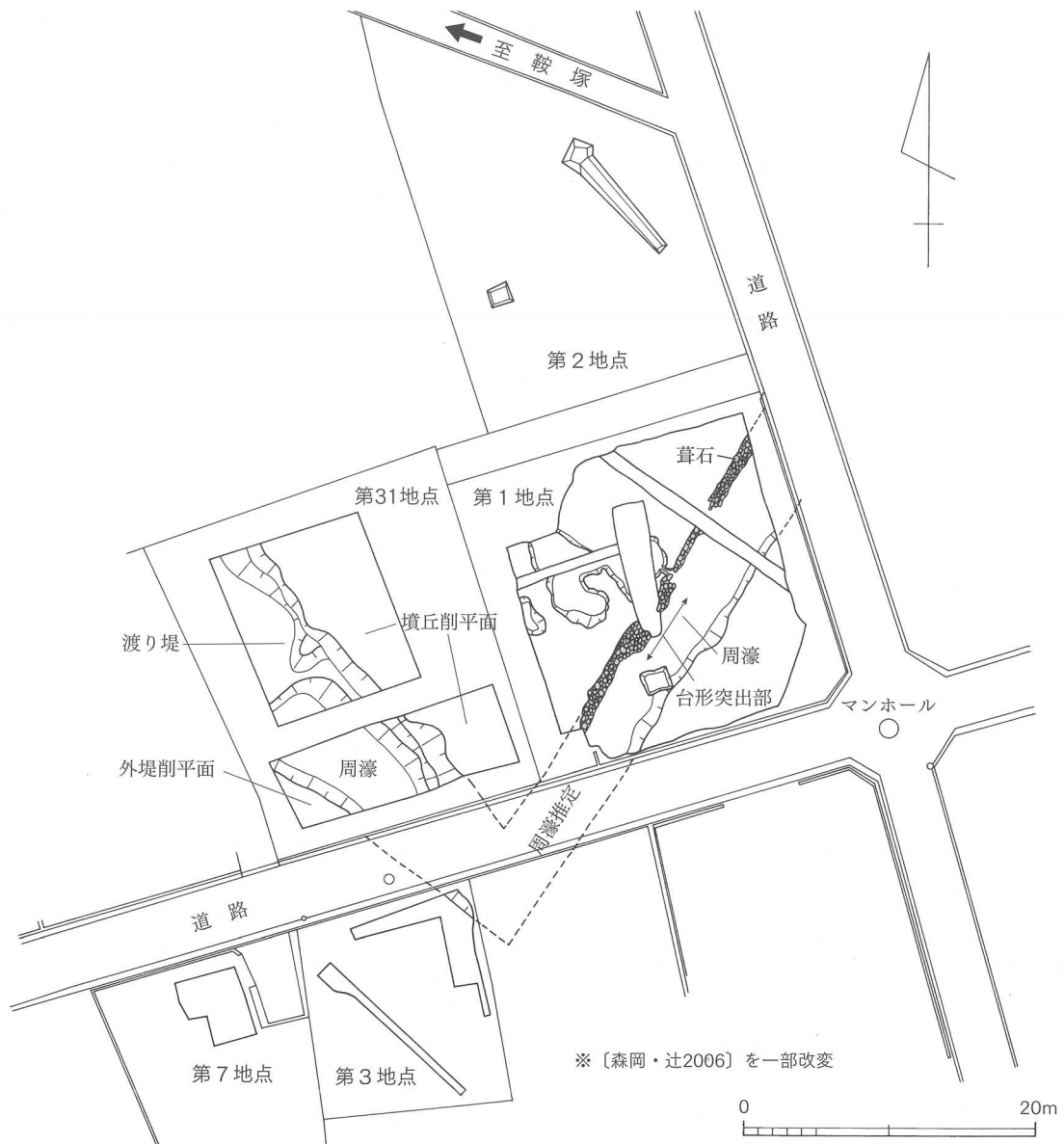
さらに、今回の調査地点の東隣接地である第36・37地点の調査においても、埴輪の出土は極めてまれであり、古墳の墳丘や周濠に関わる遺構はまったく検出されていない（第2表）。

よって、当該地について、第二案を採るのは難しいと結論付けられる。

最後に第三案について検討する。打出小槌古墳は丘陵の西縁辺部に構築されており、古墳構築時の本来の地形は、墳丘部分よりも墳丘外である北部や東部が高くなっていたと考えられるので、丘陵部分から墳丘を切り離すべく、北側周濠が構築されたと推測される。この場合、周濠や外堤を越えて標高の高い方向に遺物が散布する可能性はかなり限定されよう。仮に外堤部に濃密な埴輪の樹立があったとしても、墳丘構築部分より北部や東部に広がる遺物は決して多いとは考えられない。当該地から出土した埴輪の僅少性は、まさにこの推測と合致すると言えよう。よって、第三案の蓋然性が高いものとする。

ところで、当該地の南接地に鞍塚と呼ばれる一角があり、祠や石仏が安置されている。また、この鞍塚に取り付く道路は、等高線に沿うわけでもなく、周辺道路や土地割ともまったく異なる方向を示している。この道路の方向性が何に起因しているかについては、打出小槌遺跡第1地点の調査段階から問題視されていた。調査参加者の間では、打出小槌古墳が前方後円墳であるなら、鞍塚と呼ばれる位置に遅くまで墳丘の一部が残存しており、この道路は、前方部北側面の名残ではないかと臆炙にのぼっていた。今回の調査から、打出小槌古墳の北側周濠が当該地より南側に位置しているとする推論の上に立つならば、鞍塚に至る道路が、墳丘前方部北側面の痕跡と言うよりも、打出小槌古墳の北側外堤部分の痕跡と考える案が浮上して来る。ただし、この場合でも、盾形周濠をもつ、墳丘長90m程度の方後円墳とみる打出小槌古墳復元案〔森岡・辻2006〕に大幅な変更は生じない。

翠ヶ丘丘陵には、打出小槌古墳に先立つ古墳として、打出小槌古墳から東南東150mの翠ヶ丘丘陵の南端に、金津山古墳が存在している。金津山古墳は前方部をすでに失っているために円墳状を呈するが、全長55mを測る前方後円墳であることが判明している〔森岡・和田・後神1990〕。さらに、三角縁神獣



第44図 既往調査で検出された打出小槌古墳前方部周濠（1／500）

鏡が5面以上埋納されていたことで知られる阿保親王塚古墳が、打出小槌古墳から北に600m、標高25m付近の翠ヶ丘丘陵の南西斜面に立地している。この古墳は、江戸時代の毛利氏による改修工事のために大きく墳形改変を受けており、現在は方墳のように見えるが、宮内庁書陵部の実測図によると、径36m、高さ約3mの円墳のようである〔武藤・有坂・末中・村川編1971〕。しかし、「毛利家文書」の記載から西面する前方後円墳の可能性も指摘されている〔森岡1992b〕。翠ヶ丘丘陵で知られる古墳では、この阿保親王塚古墳が最も古く、古墳時代前期に遡る。阿保親王塚古墳よりさらに高所には、後期古墳である駒塚古墳や古代の古墓を含む四ツ塚が存在していたが、今はすでに失われている〔武藤・有坂・末中・村川編1976〕。これら、前期から後期の古墳は合わせて「翠ヶ丘古墳群」と称されている〔藤岡・勇1976〕。また、近年、打出小槌遺跡の南方に展開する若宮遺跡において、埴輪や葺石と見なせる礫が検出されている。とくに第34地点では、14世紀に築かれたと考えられる護岸状遺構の盛土を中心に、比較的大きな円筒埴輪片や円礫が出土している〔辻・森岡2002〕。この調査区は、現在の標高が4m程度で、宮川氾濫原に当たるが、埴輪については単なる流入とは考えられない状態であり、「近在の地に遺存した有力な古墳が中世段階に破壊され」て、もたらされた可能性が指摘されている〔森岡2002b〕。な

お、埴輪は概ね5世紀代のものである。その他、第42地点では、古墳時代中期末に比定される、底部を穿孔し、口縁部を真上に直立した甕や完形の甕を埋納した土坑も検出されている〔第58集〕。これらの知見を受けて、古墳時代中期の墓域が、翠ヶ丘丘陵縁辺部からさらに低位の沖積地低地にも広がっていた可能性が推測されるに至った。加えて、2500分の1地形図を基に作成した宮川中・下流部左岸地域微地形復元（第13図）には、打出小槌古墳の東北東約150mの打出天神社付近に、前方後円墳形の高まりが認められる。また、国道2号線の工事の際に、打出天神社の北西側から円筒埴輪が出土したと伝えられている〔紅野1940、竹村2005〕など、この近辺にさらに前方後円墳が眠っている可能性がある。

このような点を勘案すると、翠ヶ丘古墳群は、長期にわたって古墳が築造されたという特徴に加えて、打出地域には古墳時代中期を中心にして、現在知られている以上にさらに多くの大型古墳が築造されており、これらが未だ地中に埋没していると言った特徴を指摘することができよう。（白谷）



第45図 打出小槌遺跡・古墳周辺における古墳関連遺構および埴輪を検出した調査地点（1／3000）

引用・参考文献

- 浅岡俊夫編 1993 『芦屋市 月若遺跡—第10地点・第13地点—』 六甲山麓遺跡調査会
- 芦屋市 1991a 『芦屋今むかし—市制施行50周年記念写真集—』
- 芦屋市 1991b 『芦屋のうつりかわり—市制施行50周年記念写真集—』
- 芦屋市 1997 『阪神・淡路大震災 芦屋市の記録 '95～'96』
- 芦屋市 2001 『復興への歩み 阪神・淡路大震災 芦屋市の記録Ⅱ 1996.4～2000.3』
- 芦屋市教育委員会 1994 『津知遺跡 第4地点 現地説明会ノートⅡ』
- 芦屋市教育委員会 2001 『＜公開展示説明会資料＞「寺」字刻印土器と芦屋廃寺跡—第75地点発掘調査の成果から—』
- 芦屋市教育委員会 2005a 『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞
- 芦屋市教育委員会 2005b 『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞
- 芦屋市教育委員会 2006 『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞
- 芦屋市教育委員会・関西大学山芦屋遺跡調査団 1983 『兵庫県芦屋市 山芦屋遺跡S4地点 現地説明会資料』
- 芦屋市広報課 2007 『広報あしや』No.957 平成19年（2007年）2月1日号
- 芦屋市立美術館 1991 『芦屋の歴史と文化財—歴史資料展示室常設展示図録—』
- 阿部嗣治 1993a 「津知遺跡の発掘調査（1）」『のじぎく文化財だより』17 淡神文化財協会
- 阿部嗣治 1993b 「津知遺跡の発掘調査（2）」『のじぎく文化財だより』18 淡神文化財協会
- 網干善教・米田文孝・山口卓也 1985 「山芦屋遺跡（S4地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会
- 荒木幸治 2001 「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動—朝来郡和田山町筒江浦石遺跡の調査—」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 石井明美・大喜多知子・岡田好子・寺田佳子・三宅敦子・山田悦子・安田博幸・森岡秀人 1984 『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』 武庫川女子大学考古学研究会
- 泉 武編 1988 『東安堵遺跡』＜奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊＞ 奈良県立橿原考古学研究所
- 伊野近富 1995 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 魚住惣五郎編 1956 『芦屋市史』本編 芦屋市教育委員会
- 大川勝宏・半澤幹夫 1997 「打出小槌遺跡（第22地点）」『平成8年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財

調査事務所

- 大川勝宏・半澤幹夫 2005 「打出小槌遺跡（第22地点）実績報告書（1997年3月）」『平成8年度国庫補助事業
芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書
集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 岡田章一・長谷川眞 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教
育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 岡野慶隆 2001 「西摂地域の弥生集落」『みずほ』第35号 大和弥生文化の会
- 奥井智子 2006 「畿内における土製煮沸具の様相」『第25回中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』日本
中世土器研究会
- 及川良彦・山本考司 2000 「土器作りのムラと粘土採掘場—多摩ニュータウンNo.248遺跡の関係—」『日本考
古学』第11号 日本考古学協会
- 紅野芳雄 1940 『考古小録』 西宮史談會
- 佐藤公保 1999 「耕作痕の分布からみた芦屋の農耕地の開墾の推移」『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査
報告書—震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前
調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第30集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋廃寺跡建物基壇に関わる地震痕跡」『日本考古学』第12号 日本
考古学協会
- 重川忠廣 1986 「打出小槌古墳と保存と民衆史」『芦槌』52 芦の芽グループ
- 島 之男 1929 『芦屋の里』
- 清水靖夫編 1995 『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』 柏書房
- 高瀬一嘉編 1997 『芦屋市所在三条九ノ坪遺跡—被災マンション等再建事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告書—』＜兵庫県文化財調査報告第168冊＞ 兵庫県教育委員会
- 高橋照彦 2003 「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究会第7回シンポジウム 古代の土器研究—
平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』 古代の土器研究会
- 高山正久・高山上枝・高山弘也 2001 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡（第135地点）』＜高山歴史学研究所文化財調
査報告書第7冊＞ 高山歴史学研究所
- 高山正久・高山上枝・高山弘也 2003 『兵庫県芦屋市 月若遺跡（第67地点）』＜高山歴史学研究所文化財調
査報告書第10冊＞ 高山歴史学研究所
- 竹村忠洋 2002 「芦屋市域の古墳時代後期から飛鳥時代の遺跡について」『八十塚古墳群の研究』＜関西
大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集＞ 関西大学文学部考古学研
究室
- 竹村忠洋 2005 「元塚と周辺の伝承墳」『元塚発掘調査報告』＜芦屋市文化財調査報告第56集＞ 芦屋市教育
委員会

- 竹村忠洋・辻 康男 2006 「平成12年度国庫補助事業 城山・三条古墳群C地点発掘調査実績報告書（平成13〔2001〕年3月）」『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞ 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・森岡秀人 1999 「まとめ」『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』＜芦屋市文化財調査報告第32集＞ 芦屋市教育委員会
- 田辺真人・位原庸太・渡部永子・岩本昌三・森岡秀人 1979 『芦屋の生活文化史—民俗と史跡をたずねて—』 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2002 「地理的環境」『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第38集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003 「遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第46集＞ 芦屋市教育委員会
- 辻 康男・森岡秀人 2002 「第34地点の調査」『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第38集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 辻 康男・矢作健二・辻本裕也・田中義文・バリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「芦屋市内に所在する考古遺跡の自然科学分析」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 天王寺谷勘太夫 1940 『打出史話』
- 中井敦史 2007 「播磨の中世土師器の様相」『「城館からみた中世の播磨」—城館の実年代と戦国時代研究の課題—』（第8回播磨考古学研究集会資料集） 第8回播磨考古学研究集会実行委員会
- 乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 備前焼研究会
- 橋本 久・浅岡俊夫・姫路真保・古川久雄 1992 『芦屋市 大原遺跡—第3地点—』 六甲山麓遺跡調査会
- 「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウム実行委員会 2001 『震災を越えて「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウムの記録』
- 兵庫県教育委員会 1982 『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』
- 兵庫県教育委員会 1984 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』
- 兵庫県教育委員会 1985 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』
- 兵庫県教育委員会 1986 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』
- 兵庫県教育委員会 1987 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』
- 兵庫県教育委員会 1988 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』

- 兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996 『平成7年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997 『平成8年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998 『平成9年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999 『平成10年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000 『平成11年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001 『平成12年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002 『平成13年度 年報』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003 『平成14年度 年報』
- 兵庫県史編集専門委員会 1992 『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県
- 兵庫県立歴史博物館 2002 『古代兵庫への旅—奈良・平安の寺院と役所—』〈特別図録No.43〉
- 藤井利章編 2001 『業平遺跡第52地点発掘調査報告書』 業平52地点遺跡調査会
- 藤岡 弘・勇 正人 1976 「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 藤川祐作 1979 「採石場としての岩ヶ平」『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』〈芦屋市文化財調査報告第11集〉 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作 1991 「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地—芦屋市呉川町発見の新資料を中心に—」『歴史と神戸』第168号 神戸史学会
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 資料集』 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 古川久雄 1986 「打出小槌古墳の発見・調査を通じて感じた遺跡認識の今昔」『芦樋』52 芦の芽グループ
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』 芦屋史談会
- 松田一義 1986 「打出小槌古墳から」『芦樋』52 芦の芽グループ
- 丸山 潔 2003 「集団の形成—六甲南麓地域の弥生集落—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ 家根祥多さん追悼論集 立命館大学考古学論集刊行会
- 南 博史・山田邦和・大下 明・森下英治 1985 『芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書』 財団法人 古代学協会
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘編 1971 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘編 1976 『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘編 1986 『新修芦屋市史』資料篇2 芦屋市役所
- 村上伸之 2006 「肥前 生産に関わる技術の成立と展開を中心に」『江戸時代のやきもの—生産と流通—記念講演会・シンポジウム資料集』 財団法人 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 『増補 会下山遺跡』 芦屋市教育委員会
- 森内秀造 1995 「相生窯址群における平安期の遺物について」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』〈兵庫県文化財調査報告第139冊〉 兵庫県教育委員会

- 森内秀造 2001 「白沢・志方窯跡群における遺物の特徴」『志方窯跡群Ⅱ—投松支群—』＜兵庫県文化財調査報告第217冊＞ 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1980 「土器からみた高地性集落会下山の生活様式」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』
- 森岡秀人 1984 「旭塚古墳および城山・三条古墳群をめぐる諸問題」『兵庫県芦屋市 旭塚古墳—表六甲城山群集墳中の一巨石墳の測量調査とその考証—』 武庫川女子大学考古学研究会
- 森岡秀人 1985 「城山南麓遺跡A地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986a 「摂津・打出小槌古墳周濠の発掘調査」『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会料』 近畿地方埋蔵文化財担当者研究会
- 森岡秀人 1986b 「打出小槌古墳」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』＜芦屋市文化財調査報告第14集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1986c 「筭塚（伝承墳）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1986d 「城山古墳群第17号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1987 「古墳時代の芦屋地方（上）—近年の遺跡調査をふりかえって—」『兵庫県の歴史』23 兵庫県
- 森岡秀人 1988a 「打出小槌古墳（確認）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988b 『打出小槌古墳第2地点試掘調査記録』＜昭和63年度埋蔵文化財調査概要24＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1990a 「前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 1990b 「摂津の考古学からみた東灘（6）」『史料館だより』15 神戸深江生活文化史料館
- 森岡秀人 1992a 「打出小槌古墳」『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県
- 森岡秀人 1992b 「阿保親王塚古墳」『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県
- 森岡秀人 1992c 「資料紹介 翠ヶ丘・四ツ塚出土の須恵器—謎の四ツ塚の実態に迫る—」『なりひら』Vol. 9 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人 1993 「総括」『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第7次地点 打出小槌遺跡第2次地点 打出小槌遺跡第3次地点』＜芦屋市文化財調査報告第23集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1995 「海辺の古墳」『古墳文化とその伝統』 勉誠社
- 森岡秀人 1999a 「津知遺跡の官衙的性格」『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査—』＜芦屋市文化財調査報告第34集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1999b 「摂津における土器交流拠点の性格—真正弥生時代と庄内式期を比べて—」『庄内式土器研究』XX I—庄内式併行期の土器交流拠点—「摂津・播磨地域」 庄内式土器研究会
- 森岡秀人 2001a 「弥生集落の新動向（Ⅳ）—小特集「兵庫県東南部における集落の様相」に寄せて—」

『みずほ』第35号 大和弥生文化の会

- 森岡秀人 2001b 「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2002a 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集＞ 関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2002b 「時代・時期別にみた若宮遺跡の様相と性格」『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第38集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2002c 「片鱗をみせ始めた六条遺跡と当該調査地点の概括の様相」『六条遺跡発掘調査報告書—芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録—』＜芦屋市文化財調査報告第41集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2002d 「芦屋市津知地区の歴史・地理要説と津知遺跡」『津知遺跡（第198・222地点）発掘調査報告書—芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果—』＜芦屋市文化財調査報告第55集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003a 「古代摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷と寺田遺跡」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書—集落東端部の様相と知見—』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2003b 「考古学と古代史からみた摂津国菟原郡東部の8世紀史と藤ヶ谷古墓の占める位置」『摂津・藤ヶ谷古墓—藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査—』＜芦屋市文化財調査報告第48集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2005 「三条岡山遺跡検出埴輪をめぐる市内出土円筒埴輪の様相と古墳」『三条岡山遺跡第3地点発掘調査報告書（1981発掘記録）—中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物—』＜芦屋市文化財調査報告第53集＞ 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団
- 森岡秀人・木南アツ子 1996 「打出小槌遺跡」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小槌遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』＜芦屋市文化財調査報告第27集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・木許 守 1986 『打出小槌古墳試掘調査概要報告』＜芦屋市埋蔵文化財調査昭和61年度概要1＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1999 「臨海部に立地する本遺跡の性格」『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果

- 一』＜芦屋市文化財調査報告第30集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000a 「芦屋廃寺—芦屋廃寺中枢部の発掘調査」『平成12年度 兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000b 「阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題—芦屋市における5年間をふり返って—」『地震災害と考古学』 日本考古学協会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2005 「平成8年度 寺田遺跡（第90地点）発掘調査実績報告書（平成9〔1997〕年3月）」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006a 「平成11年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡（第62地点）発掘調査実績報告書—震災復興調査—平成12年2月」『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2006b 「摂津地域」『古式土師器の年代学』 財団法人 大阪府文化財センター
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 2005 『打出小槌遺跡（第41地点）確認調査結果報告書』＜平成17年度芦屋市埋蔵文化財調査記録No.7＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・辻 康男 2000 『芦屋の縄文遺跡—震災復興調査の成果から—』（第54回京都縄文文化研究会発表資料）
- 森岡秀人・田中晋作 1990 「摂津（列島各地域の円墳—主として大型円墳をめぐって—）」『古代学研究』123 古代学研究会
- 森岡秀人・辻 康男 2006 「平成11年度国庫補助事業 打出小槌古墳西半部（打出小槌遺跡〔第31地点〕埋蔵文化財発掘調査実績報告書—震災復興調査—）2000年3月」『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2007 「打出岸造り遺跡（第32地点）」『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の成果—城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）』＜芦屋市文化財調査報告第65集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・西村 歩 2006 「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」『古式土師器の年代学』 財団法人 大阪府文化財センター
- 森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例—兵庫県芦屋市呉川町出土の大坂城再築関係石材について—」『阡陵』 関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集 関西大学

- 森岡秀人・村川義典 1996 「摂津国」『兵庫県の考古学』 吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿・明尾圭造 1993 『古墳と伝承—移りゆく“塚”へのまなざし—』 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 1990 「金津山古墳後円部範囲・構造確認調査」『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第19集＞ 芦屋市教育委員会
- 森島康雄 1995 「瓦器椀（2）分類・（3）編年」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 森田 稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶椀」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 山本三郎・久下隆史編 1992 『山陽道（西国街道）』＜歴史の道調査報告第2集＞ 兵庫県教育委員会
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 山本雅和編 2002 『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書—葦屋驛家関連遺跡の調査—』 神戸市教育委員会
- 吉田宣夫・金森安孝 2006 「兵庫県芦屋市所在 共同住宅建設事業に伴う 業平遺跡（第31地点）発掘調査実績報告書（平成8年度）」『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査—実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集 1＞ 芦屋市教育委員会
- 臨川書店 1996 『摂津名所図会』＜版本地誌大系10＞（秋里籠寫著、竹原春朝斎画、寛政8〔1796〕年刊行）
- 和田秀寿 1986 「打出小槌古墳周辺の微地形（雑記）」『芦槌』52 芦の芽グループ
- 和田秀寿・森岡秀人 1989 「打出小槌古墳第4地点」＜芦屋市埋蔵文化財調査簡報＞ 芦屋市教育委員会
- 渡辺 昇 1999 「大原遺跡（第35地点）」『平成10年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 渡辺 昇編 2003 『芦屋市 六条遺跡』＜兵庫県文化財調査報告第256冊＞ 兵庫県教育委員会

芦屋市文化財調査報告集目録

- 第1集 『芦屋市史追録』第1号 有坂隆道編 村川行弘著 1959年4月28日刊行
- 第2集 『大阪城と芦屋』 村川行弘ほか 1962年3月31日刊行
- 第3集 『会下山遺跡』 村川行弘・石野博信ほか 1964年3月31日刊行
- 第4集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 八十塚古墳群』 村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 1966年4月15日刊行
- 第5集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』 村川行弘・佐々木幸雄・藤岡 弘 1967年3月7日刊行

- 第6集 『郷土資料室文化財所蔵目録 石造遺品分布調査報告』 藤岡 弘・芦ノ芽グループ 1968年3月31日刊行
- 第7集 『芦屋廃寺址』 村川行弘・藤岡 弘 1970年3月31日刊行
- 第8集 『朝日ヶ丘縄文遺跡 会下山弥生遺跡』 藤井祐介・森岡秀人 1974年3月31日刊行
- 第9集 「第2章 民家・民具の調査」『芦屋の生活文化史—民俗・史跡をたずねて—』 田辺真人ほか 1979年3月31日刊行
- 第10集 『三条岡山遺跡』 森岡秀人編 1979年8月31日刊行
- 第11集 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』 森岡秀人・古川久雄編 1979年11月30日刊行
- 第12集 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』 森岡秀人編 1980年3月31日刊行
- 第13集 『兵庫県芦屋市六麓荘町174番地所在 八十塚古墳群発掘調査概報—岩ヶ平支群F小支群西地区の緊急調査成果概要—』 森岡秀人編 1983年3月31日刊行
- 第14集 『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』 森岡秀人編 1986年3月31日刊行
- 第15集 『昭和62年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡G・I地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・関野 豊編 1988年3月31日刊行
- 第16集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き』 森岡秀人編 1988年3月31日刊行
- 第17集 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉編 1989年3月31日刊行
- 第18集 『三条九ノ坪遺跡—第2地点発掘調査簡報—』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉編 1990年3月31日刊行
- 第19集 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告』 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉編 1990年3月31日刊行
- 第20集 『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査—古墳損壊に伴う確認調査の結果—』 古川久雄編 1990年12月28日刊行
- 第21集 『平成2年度国庫補助事業 寺田遺跡第23次地点 寺田遺跡第24次地点 寺田遺跡第25次地点 寺田遺跡第27次地点 芦屋廃寺遺跡M地点 芦屋廃寺遺跡N地点 発掘調査概要報告書』 森岡秀人・松村朋世・後神 泉編 1991年3月31日刊行
- 第22集 『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』 森岡秀人・白谷朋世編 1992年3月31日刊行
- 第23集 『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 打出小槌遺跡第7次地点 打出小槌遺跡第2次地点 打出小槌遺跡第3次地点』 森岡秀人・白谷朋世編 1993年3月31日刊行
- 第24集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世編 1993年3月31日刊行
- 第25集 『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町94番地（八十塚古墳群・徳

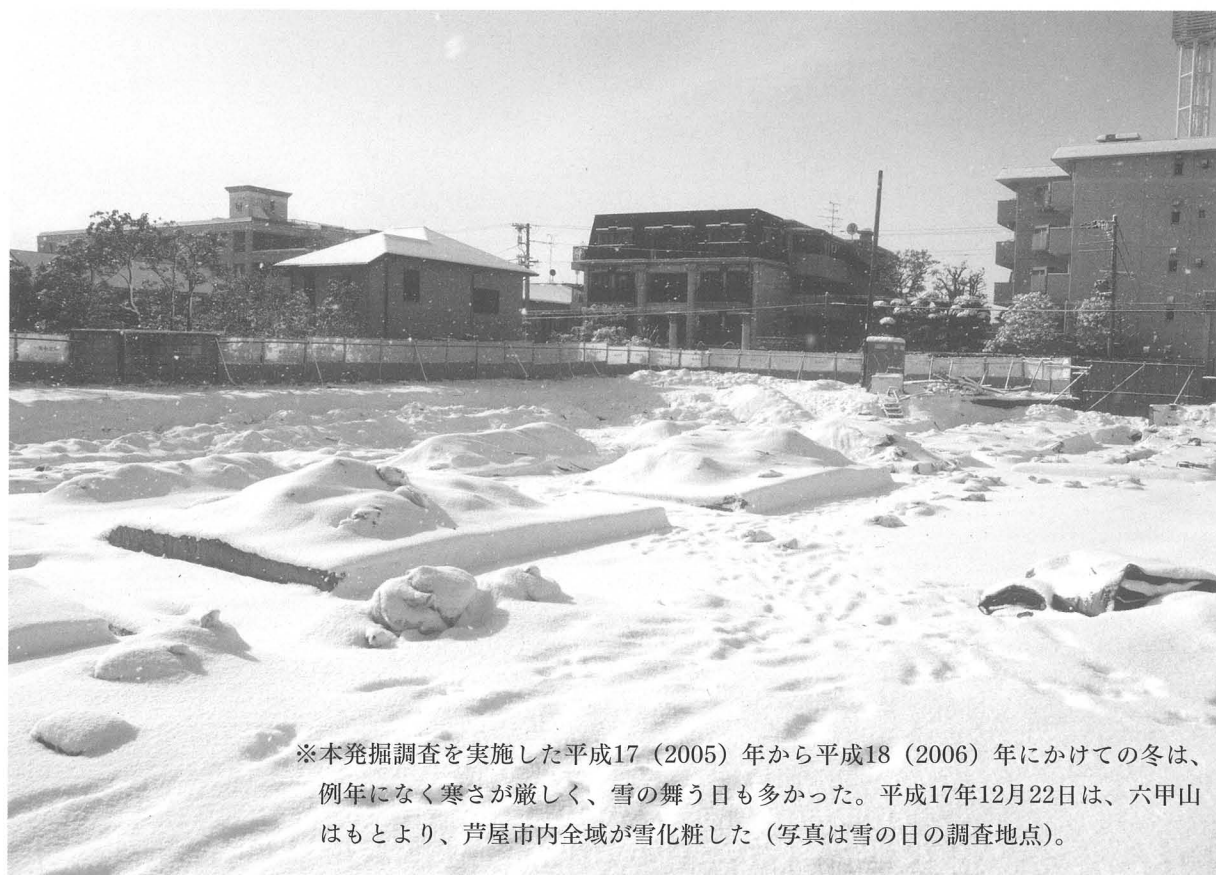
- 川大坂城岩ヶ平採石場』 森岡秀人・白谷朋世編 1994年3月31日刊行
- 第26集 『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡（第19地点）』 森岡秀人編
1995年3月31日刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査—概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小槌遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』 森岡秀人・木南アツ子編 1996年3月31日刊行
- 第28集 『平成7年度国庫補助事業 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡（W地点） 芦屋廃寺遺跡（第29地点） 月若遺跡（第20地点） 月若遺跡（第28地点） 打出岸造り遺跡（第9地点） 久保遺跡（第15地点）』 森岡秀人編 1996年3月31日刊行
- 第29集 『月若遺跡（第18地点）発掘調査報告書』 森岡秀人編 1995年3月31日刊行
- 第30集 『若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書—震災復興住環境整備事業（芦屋市若宮町住宅1号館建設）に伴う埋蔵文化財事前調査の成果—』 森岡秀人・竹村忠洋編 1999年8月31日刊行
- 第31集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ—芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群K地区内の事前発掘調査—』 森岡秀人編 1998年3月31日刊行
- 第32集 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』 重藤輝行・竹村忠洋編 1999年9月30日刊行
- 第33集 『八十塚古墳群の研究』＜関西大学文学部考古学研究第7冊＞ 網干善教・米田文孝・竹村忠洋・太田宏明・海邊博史編 関西大学文学部考古学研究室 2002年3月31日刊行
- 第34集 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査—』 竹村忠洋編 1999年3月31日刊行
- 第35集 『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う確認調査』 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄編 1999年3月31日刊行
- 第36集 『三条岡山遺跡—第11地点発掘調査概要—』 渡辺 昇編 1998年12月15日刊行
- 第37集 『津知遺跡（第19地点）従前居住者用住宅（（仮称）津知町住宅）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—震災復興事業—』 篠宮 正編 2000年3月31日刊行
- 第38集 『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書—若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果—』 竹村忠洋編 2002年3月31日刊行
- 第39集 『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査—震災復興調査—』 山田清朝編 2001年3月31日刊行
- 第40集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』 森岡秀人・竹村忠洋編 2001年3月31日刊行

- 第41集 『六条遺跡発掘調査報告書―芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録―』 森岡秀人・坂田典彦編 2002年2月28日刊行
- 第42集 『平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群（第11次）発掘調査報告書』 古川久雄編 2002年3月31日刊行
- 第43集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査―』 前田佳久・平田朋子・中居さやか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002年3月31日刊行
- 第44集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅲ 岩ヶ平刻印群（第12次）発掘調査報告書―芦屋市六麓荘浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う唐津藩採石場跡―』 古川久雄編 2003年2月28日刊行
- 第45集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点―都市計画道路山手街路事業に伴う発掘調査Ⅱ―』 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003年3月31日刊行
- 第46集 『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書―芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果―』 竹村忠洋・山内芳子編 2003年3月31日刊行
- 第47集 『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書―集落東端部の様相と知見―』 森岡秀人・坂田典彦編 2003年3月31日刊行
- 第48集 『摂津・藤ヶ谷古墓―藤ヶ谷遺跡第五地点・古代火葬墓の調査―』 森岡秀人編 2003年3月31日刊行
- 第49集 『津知遺跡の発掘調査―第157地点における条里地割内の様相―』 森岡秀人・坂田典彦編 2005年3月31日刊行
- 第50集 『津知遺跡（第181地点）発掘調査報告書―共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握―』 森岡秀人・坂田典彦編 2004年5月31日刊行
- 第51集 『月若遺跡（第71地点）発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世編 2004年2月29日刊行
- 第52集 『前田公園建設事業に伴う前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書―弥生前期水田跡の構造と水利動態―』 森岡秀人編 2004年3月31日刊行
- 第53集 『三条岡山遺跡 第3地点発掘調査報告書（1981発掘記録）―中枢地区北部隣接地の様相と出土遺物―』 森岡秀人編 芦屋市教育委員会・三条岡山遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第54集 『山芦屋遺跡S3地点発掘調査報告書―1982・新出の終末期古墳・三条5号墳とその性格―』 森岡秀人編 山芦屋遺跡発掘調査団 2005年3月31日刊行
- 第55集 『津知遺跡（第198・222地点）発掘調査報告書―芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果―』 竹村忠洋編 2004年3月31日刊行
- 第56集 『元塚発掘調査報告書』 竹村忠洋・白谷朋世編 2005年3月31日刊行
- 第57集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点―都市計画道路山手幹線街路事業に

- 伴う発掘調査Ⅲ―』 前田佳久・石島三和・中村大介ほか 芦屋市・芦屋市教育委員会 2004年3月31日刊行
- 第58集 『若宮遺跡（第42地点）発掘調査報告書 須恵器集中遺存地点の調査と成果』 森岡秀人・坂田典彦編 2005年3月31日刊行
- 第59集 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ―』 川上厚志・阿部 功・中村大介 芦屋市・芦屋市教育委員会 2005年3月31日刊行
- 第60集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡―宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果―』 森岡秀人・坂田典彦編 2005年9月30日刊行
- 第61集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅴ 岩ヶ平刻印群（第85地点）発掘調査報告書―長州藩毛利家石切丁場跡における発掘調査の成果―』 竹村忠洋・白谷朋世編 2006年3月31日刊行
- 第62集 『兵庫県芦屋市 業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書―都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ―』 安田 滋編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006年3月31日刊行
- 第63集 『八十塚古墳群（第106地点）発掘調査報告書―八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳と徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査―』 白谷朋世編 2006年12月25日刊行
- 第64集 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点―平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業―』 森岡秀人・竹村忠洋編 2006年3月31日刊行
- 第65集 『平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書―震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の成果―城山南麓遺跡（C・D地点） 西山町遺跡（第7地点） 芦屋廃寺遺跡（第71地点） 六条遺跡（第13地点） 津知遺跡（第24・31地点） 打出岸造り遺跡（第32地点） 四ツ塚（第7地点） うの塚（第1地点）』 森岡秀人・竹村忠洋編 2007年3月31日刊行



写真図版 PLATE



※本発掘調査を実施した平成17（2005）年から平成18（2006）年にかけての冬は、例年になく寒さが厳しく、雪の舞う日も多かった。平成17年12月22日は、六甲山はもとより、芦屋市内全域が雪化粧した（写真は雪の日の調査地点）。



調査地点近景（北西から）



調査地点近景（北東から）



調査地点調査前現況（南東から）



1 トレンチ西部完掘状況（西から）



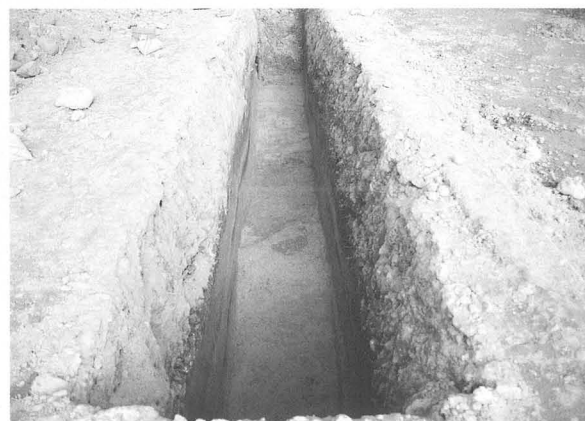
1 トレンチ西部北壁土層断面（南西から）



1 トレンチ東部完掘状況（北西から）



2 トレンチ掘削状況（東から）



2 トレンチ西部完掘状況（西から）



2 トレンチ東部完掘状況（北西から）



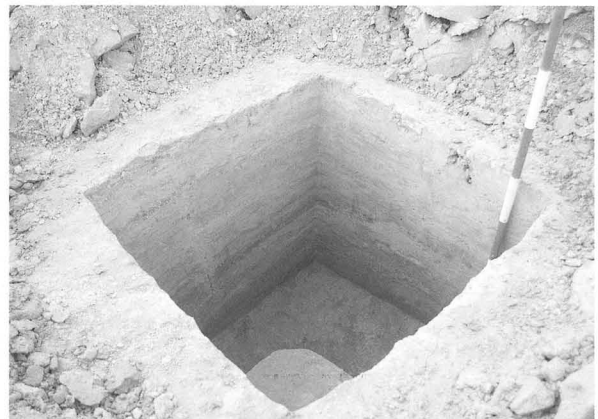
2 トレンチ拡張部掘削状況（南から）



2 トレンチ西部北壁中央部土層断面（南西から）



4 トレンチ完掘状況および南壁土層断面（北から）



5 トレンチ完掘状況および北・西壁土層断面（南東から）



7 トレンチ完掘状況および北壁土層断面（南から）



8 トレンチ完掘状況および南・西壁土層断面（東から）



北区全景（西から）



南区全景（西から）



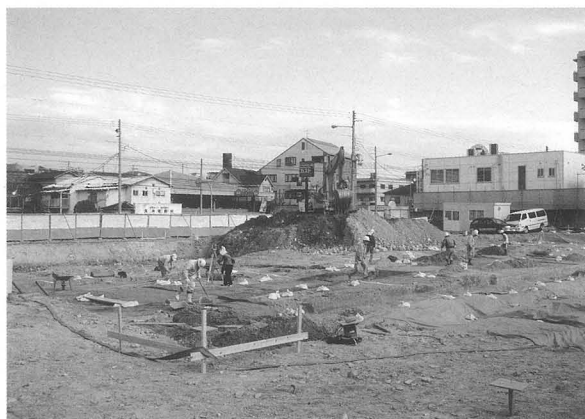
東区全景（南東から）



重機掘削状況



重機掘削状況



残土搬出状況



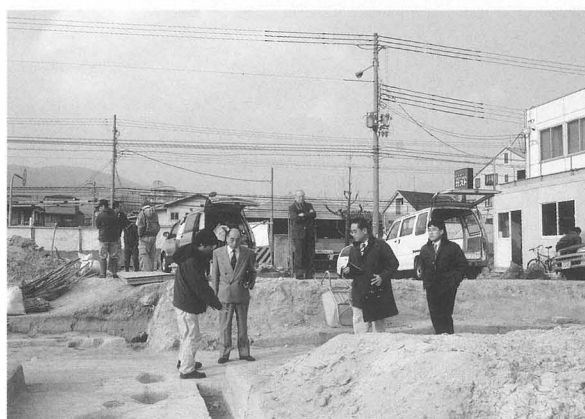
実測状況



人力掘削状況



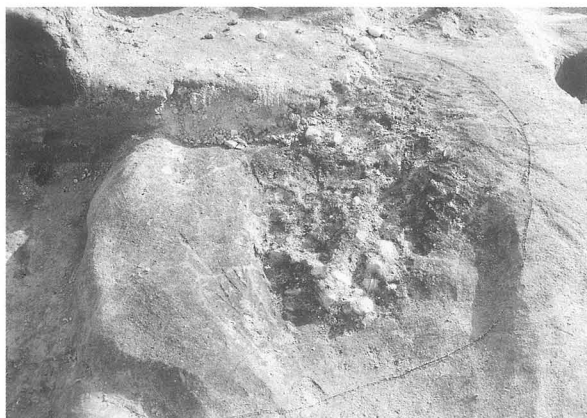
人力掘削状況



終了立会状況



埋め戻し状況



S K 101検出状況（北から）



S K 101掘削状況（北から）



S R 101掘削状況（北から）



S R 101掘削状況（東から）



Y 5ライン、X 4ライン交点付近南壁土層断面（北から）
※上から順に、S R 101、S K 101、S R 201、S K 503を確認した。



西区Y3ライン犁痕完掘状況(東から)



西区X2ライン周辺犁痕検出状況(南から)



西区X2ライン周辺犁痕完掘状況(南から)



西区Y5ライン犁痕検出状況(東から)



西区X3ライン周辺犁痕検出状況(南西から)



東区Y5ライン犁痕検出状況(南東から)



東区X6-X7間南北調査区犁痕検出状況(東から)



S K 203掘削状況（北から）



S K 203完掘状況（北から）



S K 203土層（部分）（西から）



S K 216完掘状況（南東から）



S K 209完掘状況（東から）



東区 Y 5 ライン、X 5 ライン以北壁土層（南東から）



Y 5 ライン・X 5 ライン交点付近耕作痕集中部検出状況（東から）



Y 5 ライン・X 5 ライン交点付近耕作痕集中部完掘状況（東から）



S D 201・202検出状況（南から）



S D 201・202完掘状況（西から）



S D 203検出状況（北から）



S D 203完掘状況（北から）



1 トレンチ以北 S R 201検出状況（東から）



1 トレンチ以北 S R 201完掘状況（東から）



Y 5 ライン S R 201完掘状況（北から）



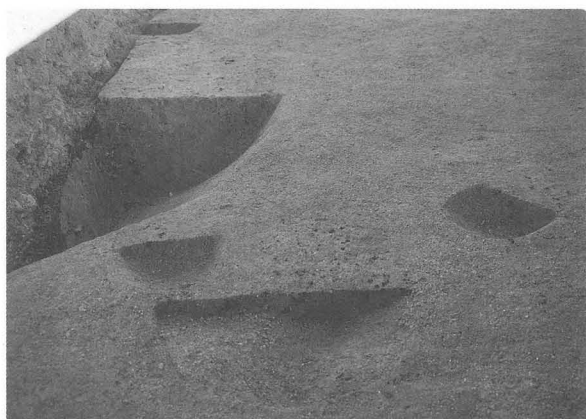
Y 3 ライン S R 201完掘状況（北から）



X 7ライン第3遺構面遺構検出状況（北から）



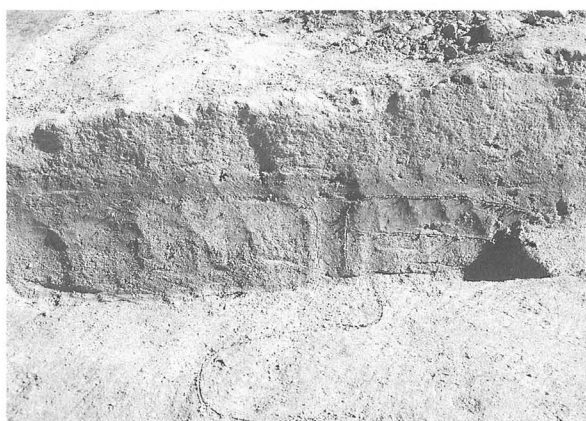
X 7ライン第3遺構面遺構完掘状況（北から）



Y 5ライン、X 6ライン以東第3遺構面遺構半裁状況（西から）



Y 5ライン、X 6ライン以東第3遺構面遺構完掘状況（西から）



X 7ライン東壁杭跡検出状況（西から）



Y 5ライン・X 2ライン交点周辺第3遺構面遺構検出状況（南西から）



Y 5ライン・X 2ライン交点周辺耕作痕検出状況（北から）



Y 5ライン・X 2ライン交点周辺足跡検出状況



Y5ライン・X2ライン交点周辺第3遺構面遺構完掘状況(西から)



S K317半裁状況(西から)



S K317完掘状況(西から)



S D301半裁状況(西から)



S D301完掘状況(西から)



X3ライン、Y5ライン以北第3遺構面遺構検出状況(西から)



X3ライン、Y5ライン以北第3遺構面遺構完掘状況(西から)



Y 5 ライン以北 S K 401 検出状況 (北から)



Y 5 ライン S K 401 検出状況 (西から)



Y 3 ライン S K 401 検出状況 (東から)



Y 5 ライン以北 S K 401 完掘状況 (東から)



Y 5 ライン S K 401 完掘状況 (東から)



S K 401 Y 5 ライン南壁土層 (北から)



S K 405・406検出状況（北東から）



S K 405半裁状況（西から）



S K 406半裁状況（西から）



S K 406完掘状況（西から）



S K 407~409検出状況（西から）



S K 407半裁状況（西から）



S K 407完掘状況（北から）



S K 409半裁状況（西から）



X 5ライン第4遺構面検出状況（南から）



Y 3ライン、X 6ライン以西第4遺構面掘削状況（東から）



S K 411掘削状況（西から）



S K 411完掘状況（西から）



S K 411土層西壁（西から）



S K 411土層北壁（北から）



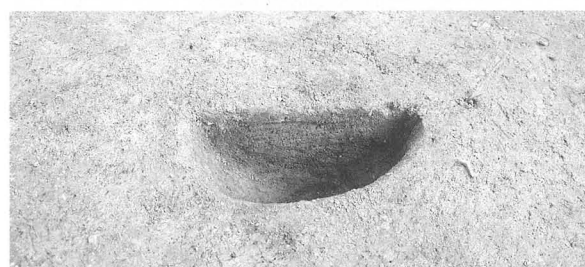
S K 411土層東壁（東から）



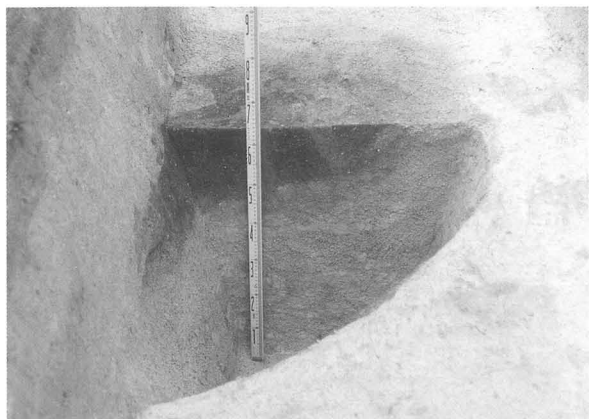
S K 411土層南壁（南から）



S P 402~404検出状況（東から）



S P 402半載状況（西から）



確認調査時の S E 401 掘削状況（東から）



S E 401 完掘状況（北から）



確認調査時の S K 432~435・S P 401 の完掘状況（南から）



X 4 ライン・Y 5 ライン交点付近耕作痕集中部完掘状況（東から）



X 3 ライン、Y 3 ライン以南耕作痕集中部検出状況（南から）



Y 3 ライン、X 3 ライン以西耕作痕集中部検出状況（東から）



X 3 ライン、Y 3 ライン以南耕作痕集中部完掘状況（南から）



X 3 ライン・Y 5 ライン交点周辺耕作痕集中部完掘状況（西から）



S K 501掘削状況（南から）



S K 501土層観察用畦南壁（南から）



S K 501掘削状況（北西から）



S K 501完掘状況（南から）



S K 501南部土器出土状況（東から）



S K 501北部土器出土状況（西から）



S K 502掘削状況（東から）



S K 502掘削状況（北西から）



S K 502土器出土状況（北から）



S K 502内ピット半裁状況（東から）



S K 502内ピット土層（東から）



S K 503掘削状況（北から）



S K 503検出状況（北から）



S K 503土器出土状況（西から）



S K 503完掘状況（北から）



S K 503土層（北から）



X 3ライン S X501完掘状況 (北から)



Y 5ライン S X501東肩部完掘状況 (北西から)



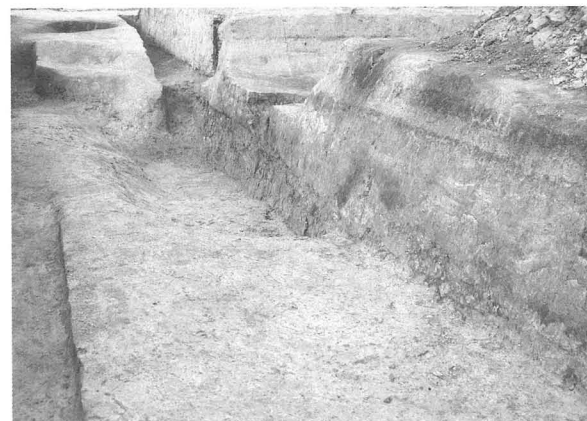
X 4ライン・Y 3ライン交点付近 S X501掘削状況 (北東から)



X 4ライン S X501北肩部完掘状況 (南から)



Y 3ライン、X 4ライン—X 5ライン間 S X501掘削状況 (西から)



X 5ライン S X501完掘状況 (南西から)



X 5ライン S X501完掘状況 (北西から)



X 6ライン・Y 3ライン交点付近 S X501完掘状況 (北東から)



5層内土器出土状況



5層内土器出土状況



南区D区5層分布状況（北から）



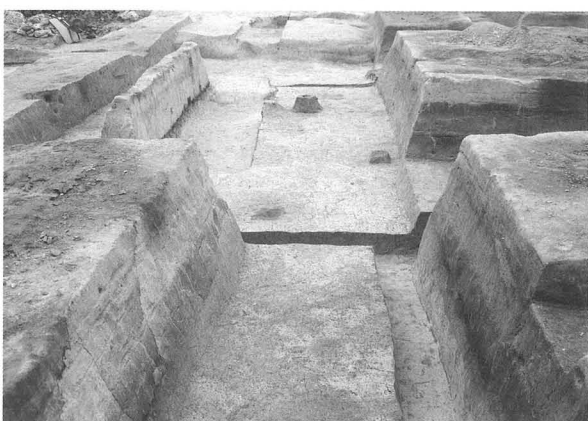
南区西端S X 501完掘状況（北東から）



北区S X 501完掘状況（南東から）



北区S X 501完掘状況（部分）（南から）



Y 5ラインS X 501完掘状況（西から）



S K 504・505完掘状況（北西から）



S K 505完掘状況 (西から)



S K 506完掘状況 (南から)



X 3ライン東壁5層 (部分) (西から)



西区北拡張部北壁5層 (部分) (南から)



S K 507掘削状況 (北から)



西区北拡張部北壁5層 (部分) (南から)



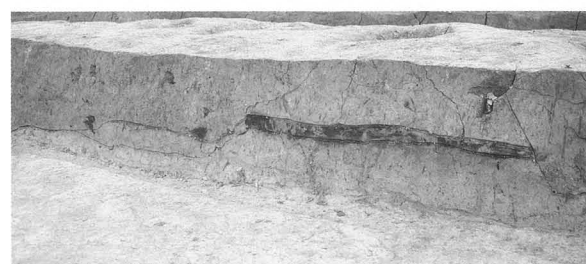
S X 501床面における黒色ブロック検出状況 (北から)



南区F区北壁土層 (北から)



北区南壁東部 (部分) (北東から)



北区南壁西部 (部分) (北西から)



北区北壁土層（南から）



北区西壁土層（東から）



北区南壁土層（北西から）



南区東部北壁土層（南から）



南区X 5 ライン付近北壁土層（南から）



南区X 6 ライン付近北壁土層（南から）



南区北壁土層（南東から）



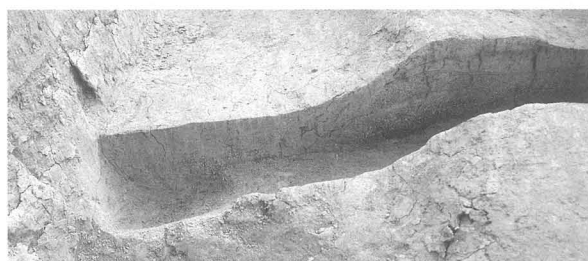
東区北壁土層（南西から）



Y3ライン、X4ライン以西南壁土層（北東から）



Y3ライン、X3ライン—X4ライン間南壁土層（北から）



Y3ライン、X5ライン付近南壁土層（北から）



Y5ライン、X2ライン以西南壁土層（北西から）



X3ライン、Y3ライン以南西壁土層（北東から）



Y3ライン、X3ライン以西南壁土層（北西から）



Y3ライン、X4ライン—X5ライン間南壁土層（北東から）



Y5ライン、X2ライン—X3ライン間南壁土層（北から）



X3ライン、Y3ライン以北西壁土層（北東から）



X 4 ライン西壁土層 (南東から)



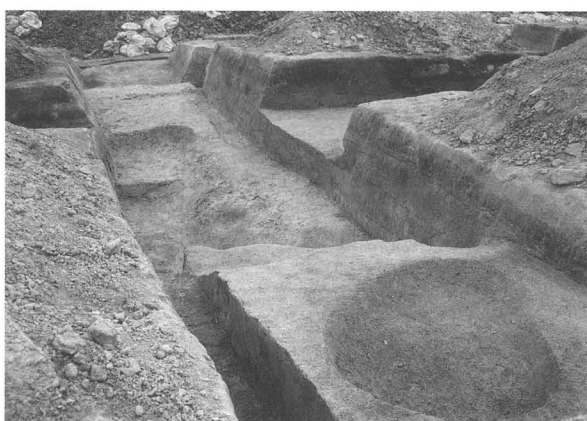
X 4 ライン、2 トレンチー Y 3 ライン間西壁土層 (東から)



X 4 ライン、Y 3 ライン付近西壁土層 (南東から)



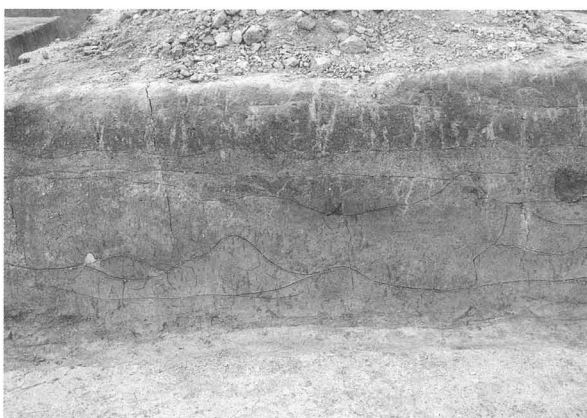
X 4 ライン、Y 3 ラインー Y 5 ライン間西壁土層 (東から)



X 5 ライン西壁土層 (北東から)



X 5 ライン、2 トレンチ以北西壁土層 (南東から)



X 5 ライン、2 トレンチー Y 3 ライン間西壁土層 (東から)



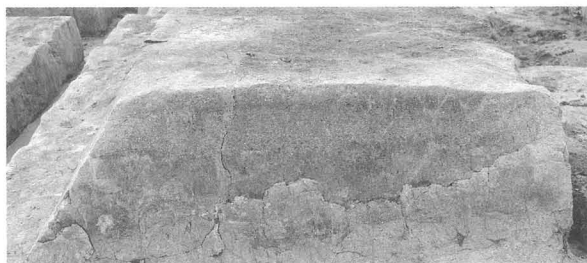
X 5 ライン、Y 3 ラインー Y 5 ライン間西壁土層 (東から)



X 6ライン西壁土層（北東から）



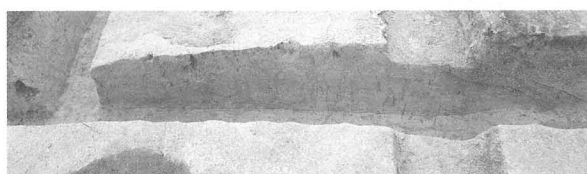
X 6ライン、Y 3ライン以南西壁土層（南東から）



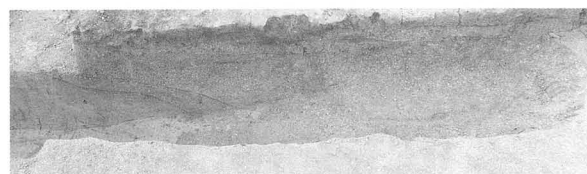
X 6ライン、2トレンチ以南西壁土層（東から）



X 6ライン、2トレンチーY 3ライン間西壁土層（東から）



X 6ライン、Y 3ライン交点付近西壁土層（東から）

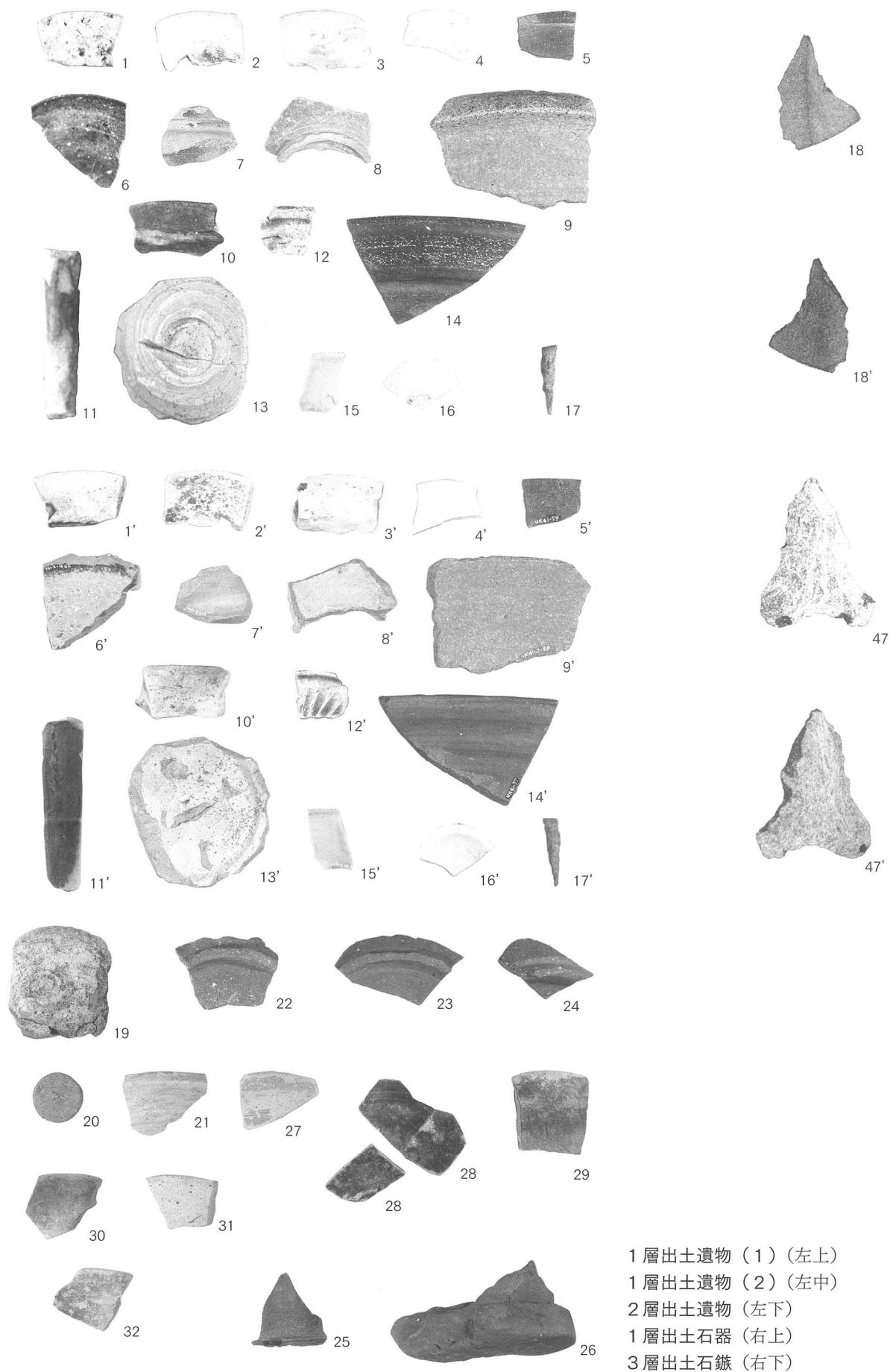


X 6ライン、Y 3ライン以北西壁土層（東から）



調査区全景完掘状況（西から）

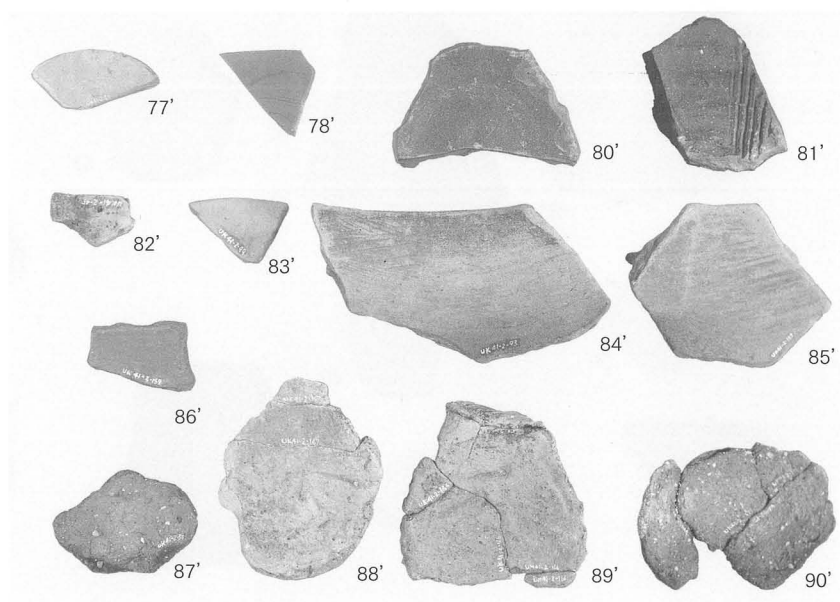
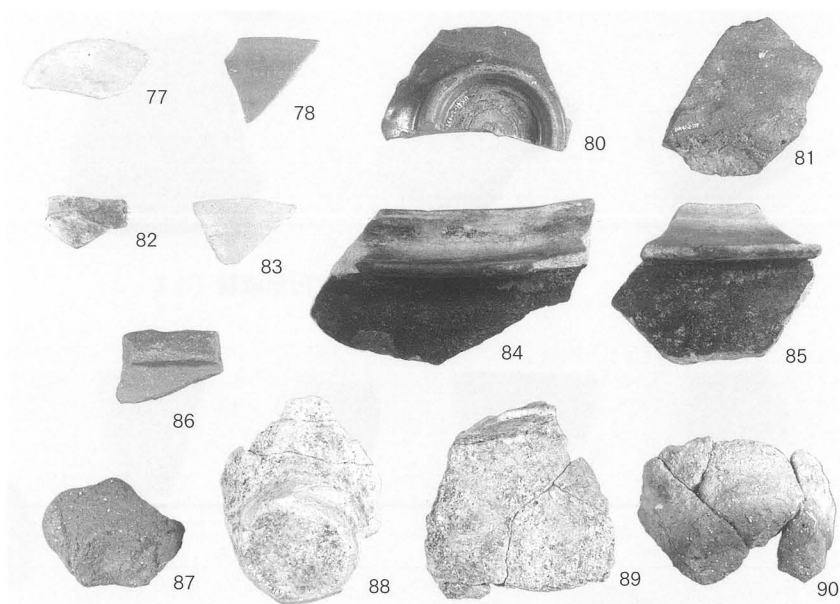
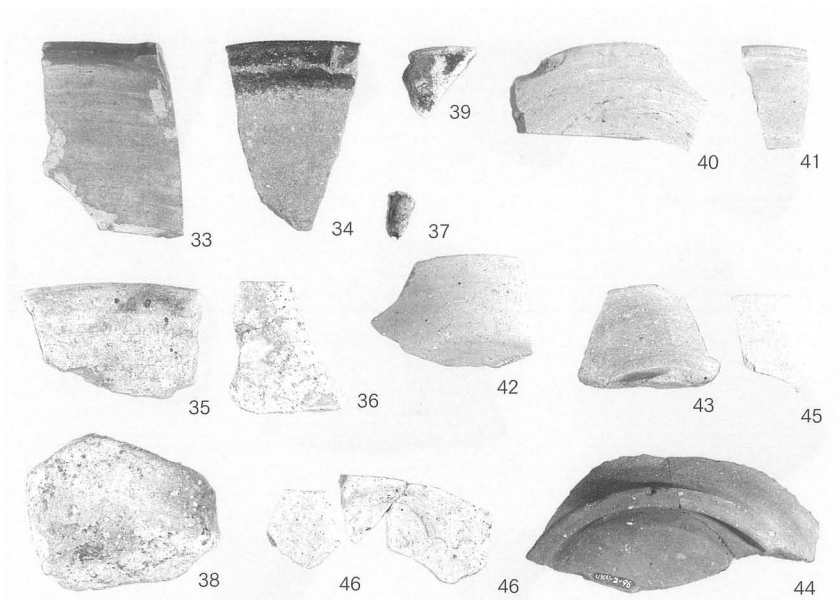
図版
26
出土遺物
(1)



1層出土遺物 (1) (左上)
1層出土遺物 (2) (左中)
2層出土遺物 (左下)
1層出土石器 (右上)
3層出土石鏟 (右下)

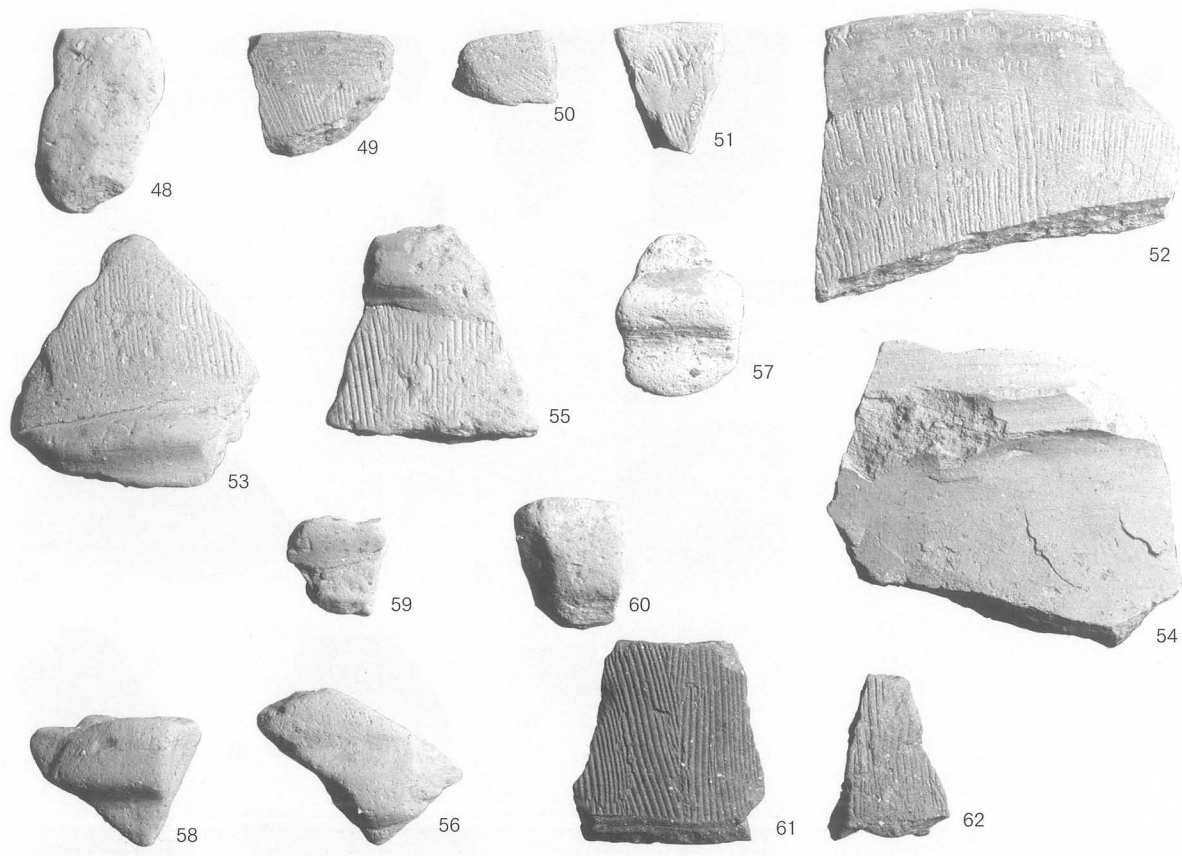


79



S K 101出土灯明皿 (左)
2・3層出土遺物 (右上)
遺構出土遺物 (1) (右中)
遺構出土遺物 (2) (右下)

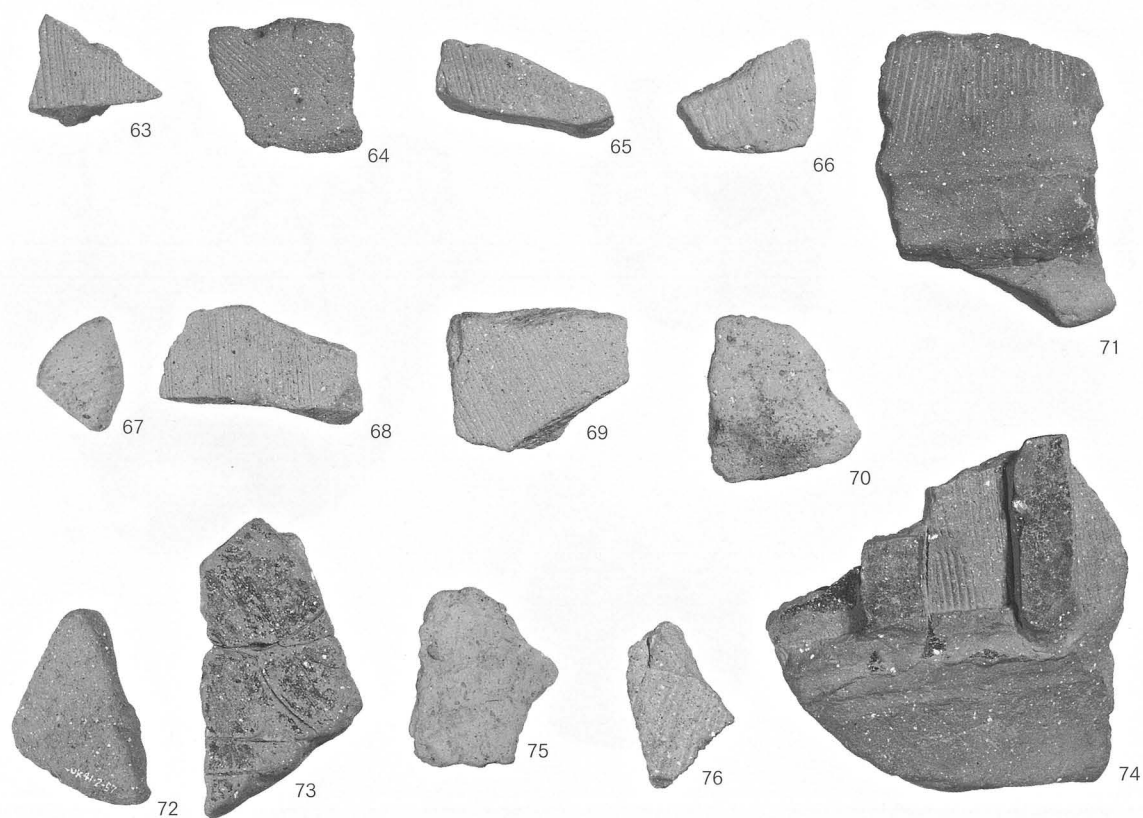
図版 28
出土遺物 (3)



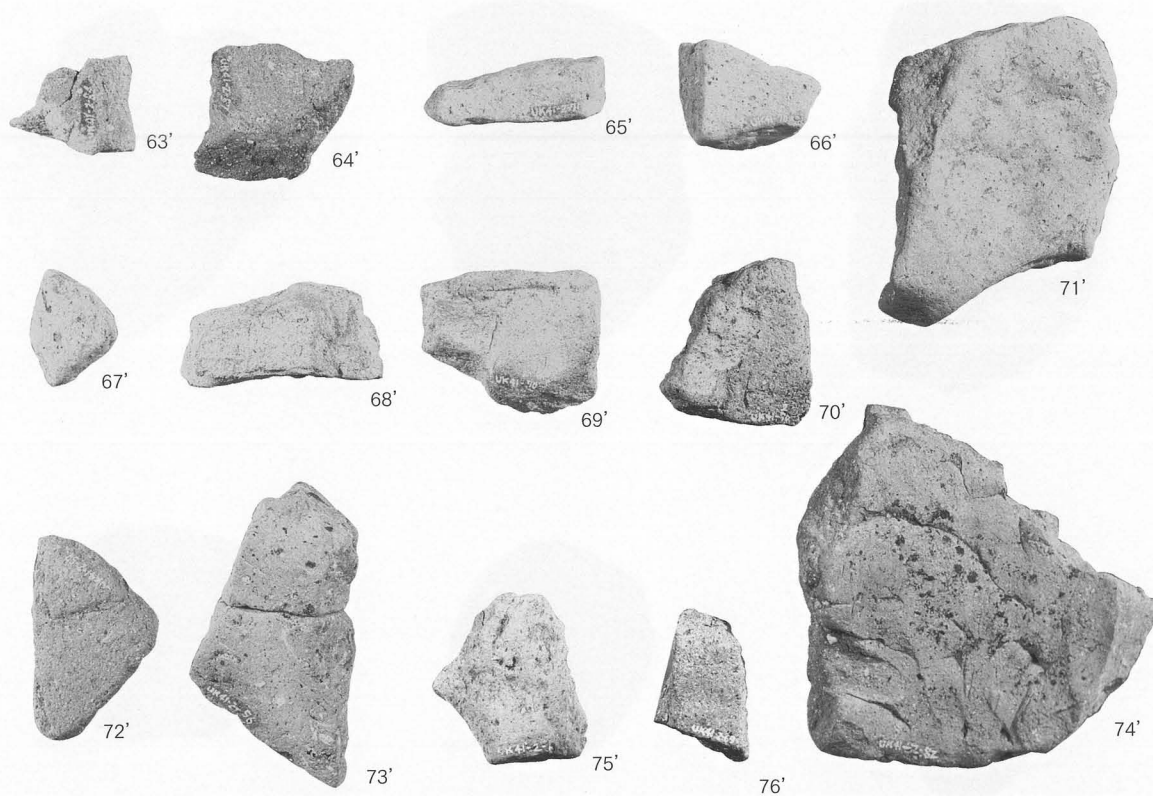
円筒埴輪 (1)



円筒埴輪 (2)



円筒埴輪・形象埴輪 (1)



円筒埴輪・形象埴輪 (2)



91



93



95



92



94

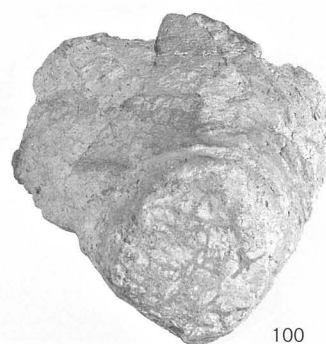
S X 501出土遺物 (1)



96



98



100



97



99



101

S X 501出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うちでこづちいせき（だい41 ちてん）はくつちようさほうこくしょ							
書 名	打出小槌遺跡（第41 地点）発掘調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	芦屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	第66 集							
編 著 者 名	（編集・執筆）竹村忠洋・白谷朋世（執筆）坂田典彦							
編 集 機 関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）							
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-31-9066							
発行年月日	平成19（2007）年3月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
うちでこづちいせき 打出小槌遺跡 （第41 地点）	ひょうごけん 兵 庫 県 あしや 芦 屋 市 うちでこづち 打出小槌 ちよう 町39－1	28206	UK41	34 度 43 分 49 秒	135 度 18 分 59 秒	確認調査 20051003 ） 20051021 本発掘調査 20051121 ） 20060126	確認調査 111.9 m ² 本発掘調査 832.49 m ²	共同住宅建 設に伴う事 前調査
	種 別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
	集 落 跡	弥生時代後期後半から古墳時代 初頭		粘土採掘土 坑群	石鏃・弥生 土器・土師 器・須恵器	弥生時代後期後半から古墳 時代初頭の大規模な粘土採 掘土坑群を検出。 打出小槌古墳に関する遺構 は検出されなかった。		
	生 産 跡	平安時代末期から近代		耕作面	・緑釉陶器 ・灰釉陶器 ・瓦器・瓦 質土器・陶 器・磁器・ 埴輪			

※裏表紙写真 埴輪出土状況

本発掘調査では打出小槌古墳の遺構を検出することはできなかったが、遺物包含層から打出小槌古墳に伴うものと考えられる埴輪が出土している。写真は、形象埴輪片（第38図74）の出土状況である。



芦屋市文化財調査報告 第66集

打出小槌遺跡（第41地点）発掘調査報告書

平成19（2007）年3月31日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

T E L. 0797-31-9066

編集者 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

T E L. 0797-31-9066

印刷所 株式会社 旭成社

〒651-0093 兵庫県神戸市中央区二宮町1-2-7

T E L. 078-222-5800（代）

